個人的、その他

u_

個人的

南の小国に、或る日、東の隣国が前触れもなく攻め入った。南の小国は直ぐさま占領されたが、西の隣国もすかさず兵を進め、東西両国は、南の小国を舞台に激しい戦闘を続けた。

この両国は、不幸にして今まで一度も戦った事がなかったので、却って戦闘は全く歯止めが利かず、凄惨を極め、南の住民は難民となる間もなく、ことごとく戦闘の犠牲となった。軍人や官僚にしても、戦おうとした者も逃げ延びようとした者もいたが、皆同じ最期を遂げた。王宮に独り王子だけが残された。

自分一人生き残ってどうなろう。多国籍の義勇軍が、何時かは領土を回復してくれたとして、それでしかし、自分一人の主権国家など、あり得ようか。

王子は心を痛めた。直に何も考えられなくなった。部屋に籠もるより、まだまだ続く、戦闘の最前線に出て行く方がましだ。人の消えた街に立つと、つい何日か前までの、笑顔を絶やさぬ住民達の暮らしぶりが思い出され、悲しみに全身が震えた。銃撃の音など聞こえない。彼だけは全くの静けさの中に居て、

この悲運を堪えていた。

王子はその美しさによって、外国にも良く知られ愛されていた。その彼の、傷心に身悶えする姿を見て、それに銃を向けられる兵士などいなかったし、どちらの国の士官達も、王子の姿が報告されると、たちまち戦闘の中止を命じた。そうして王子は、かすり傷一つ負わないのだった。

さて、なぜ東の隣国は、軍事戦略的にも殆ど意味のない南の国に兵を出したりしたのか。おおよそそれは、次のように知られている。

当時、北の大国の元首は、独身主義者の三十代の女性だった。高校を出て、会社でずっと事務を執っていたが、彼女の友達が親戚のお陰で選挙に受かり、近所で若手政治家ともてはやされるのを見て、それへの対抗心から、政治に足を突っ込んだ。というのは、誰かの作り話かも知れない。実は、世界最高レベルの大学に幾つも留学し、学生の頃から将来を嘱望されていた大変なエリートだったという話もある。ただ、その話こそ作り話だと言って笑う者も多い。しかし、もちろん運もあったのだろう、気が付くとトップに登り詰めていた事だけは確かだ。

その彼女が、各国首脳が顔を揃える国際会議で、南の小国の王子と隣り合わせ、少しの時間、言葉を交わした。彼女は、彼の言葉から伝わる彼の純粋さに驚いた。それは男性に対して初めて味わう経験で、彼の純粋さは、彼女の心の

底の底にまで届き、生涯そこを離れる事はなかった。
　王子には許嫁もいたし、北の国の元首は独裁者でこそないが、その若さでその地位に上り詰めたやり口は大いに恐れられ、しかも自ら独身主義を触れ回っているようでは、王子との接点など、もう持ちようがない。
　進退窮まった彼女は、そこで、東の隣国に工作員を送り、秘密裏に武器を蓄えさせ、南に攻め入るように仕向けた。彼女の計算は、直ぐに圧倒的優位を誇る自国軍が介入し、東の軍を取り除いて、南の主権を回復すれば、また王子と会って話もできるし、自分の気持ちも伝わるかも知れない、というものだった。
　しかし西の隣国が東の動きを事前に察知し、こちらも密かに戦争の準備を整えていたのだった。もちろん西の国にしても、軍事的には南の小国など意味はない。ただ内政が、もう誰にも解きほぐせないほどに、こんがらがって、緊張していて、何か外に向かう力に先を委ねるしかなくなっていた。
　彼女もまさか、何の関係もない西の隣国が、電光石火の素早さで出てくるとは、思いも寄らなかった。
　今更、当事者でもない遠く離れた北の大国が、行き成り軍を送り込めるだろうか。南の国の住民は、もうみんな殺されてしまった後なのだ。難民一人居ないのだ。大国の醜い領土的野心と見られるだけだし、その前に国内に疑問の声が起こるだろう。大義もまた西の国によって、先に主張されてしまった。ここ

で取って付けたように西に味方したところで、自国の兵士が死ぬ以外、何を得るわけでもない。
　そこで彼女は、国内の政敵を急いで粛清し、自ら初代の王位に就いた。そうしてから、世界最強の特殊部隊を送って王子を救出し、心ここにあらずの王子と勝手に結婚式を挙げ、直ぐさま王子に王位を譲った。大義は整えられた。王の名の下に、北は大軍を送って、あっという間に東西両軍を退けた。
　そうして北と南は一つの国になって、元南の王子がその支配者となった訳だ。しかし元王子は誰一人、南の旧領に住まわせなかった。そして、花嫁を北に置き去りにして、自らは旧領に入ったまま出ようとしなかった。
　彼は元王子であり新しい王である。彼の言う事は全て通った。もちろん、ただ王妃の力に与っていただけだ。彼は消えた町並みを全て復元させ、そこに旧住民の数だけの等身大の人形を並べ、一日中その人形を見て回った。
　そうこうする内に、王妃、と言うより、女帝と言った方が通りがいいが、彼女が側近の一人に敢えなく殺された。北に新政府が立てられ、南はさっさと分離される事が決まった。
　元王子たった一人の主権国家などあり得ない。何処の馬の骨とも分からん連中が、好き勝手に入り込んできた。そいつらだけで大統領を選び、王子は見捨てられた。人形は次々に打ち捨てられ、その後に、見ず知らずの者達が、まだ

新築同然の家をタダで手に入れてゆくのを、元王子は、ぼんやり眺めるだけだった。
直に彼も死ぬが、近所の人達の手で一応何処かに埋められはしたようだ。葬式という程の事もなく、何処に埋められたかも分からなくなった。
さて、二、三年もしない内、その小国の経済は困窮した。新住民のそれぞれが、自分流のやり方にばかり拘って、意志を統一できなかったからだ。王宮を再建し、観光客を呼ぶ話も立ち消えとなり、元々流れ者が板に付いていた連中ばかりとあって、駄目となったら皆次々に国を棄て、遂に誰も居なくなった。
もう東西の隣国が、そこを自国の領土であると主張する事もなかった。
今ではそこは、全く人の姿のない荒野であって、何処にも属していない。
しかし、地上からそこが消えた訳ではないので、世界地図にはちゃんと載っている。ただし、真っ白で名前も何も書かれてはいない。
「もちろん、個人的にですが、」と、そこを指さして、
「これを見るたびに、なぜか、安らぐんです。うまくいってる国を見るよりもね。」
難しい外交交渉の合間などに、そんな事を言う人もいる。（二〇〇一年四月一日）

*

*

*

見本

「先生、人は本当の感情を持ったままで、生きて行けますか。」
「またどうして、先生にそんな事を聞くんですか。」
「人は本当の感情を持ったとき、いや、本当の感情は、いきなり何処かからやって来て、私達は訳も分からずそれに襲われて、ただ圧倒されるだけでしょうが、そのようなものに襲われてしまったなら、どれ程心の強い人間がそれに立ち向かっても、結局そこから逃げ出さない限り、最後は、命を落とすしかなくなってしまうんじゃないかと思うんです。」
「まあ、そんならそれで、いいではないですか。」
「しかし、逃げ出せるかどうかは、多分心の強さなんかとは関係ないでしょう。逃げ出せない人は、何としても逃げ出せない。逃げてしまえばいいと分かっていても、逃げるのがどうしても嫌で、逃げられないのかも知れません。それに圧倒されたまま、誰にも分かってもらえず、だって他人には何も見えませんからね、そうしてただ独りで死んでいって、そのような死に値する何かを、その人は得たでしょうか。」

「本当の感情にもよるでしょうね。嫌な奴がくたばって本当に楽しいとか、好きな人にふられて本当に悲しいとか。」

「私の言う本当の感情は一つしかありません。所謂、喜怒哀楽なんて、感情の内に入りません。」

「へぇー。じゃ、喜怒哀楽は何ですか。」

「知りません。興味もないです。何か刺激を受けた時の、予め決められた、ヒトという動物特有の反応でしょうか。」

「じゃあ、あなたの言う本当の感情は、何かの反応じゃないんですか。」

「そうですね…、喩えて言えば、光に翳したコップをゆらゆら揺すって、中の水が揺れて、キラキラ輝くのが喜怒哀楽で、本当の感情は水そのものではないでしょうか…、いや違うな、全然違う事を言ってる。」

「巧い事、言いますね。と言いたいところだけど、先生にはさっぱり分かりません。」

「ごもっともです。喩えが悪すぎます。と言うか、本当の感情について何か言ったところで、悪い喩えになるだけでしょう。」

「いや、そんな事もありませんよ。私なんか、毎日、本当の感情だけで生きてるようなもんですよ。腹に穴を開けてでも、美味いものをタダでたらふく食いたいと思い、いい女を見ると、その子の鼻の穴の奥までだって舐めたいと思

い、憎らしい奴に言い掛かりを付けられると、透明人間になって駅のホームから突き落としたいと思い、腰が痛くてたまらないのを、頼むから誰か何とかしてよと思い、屁をこいた奴を、臭い奴だと思い…」
「本当の感情の恐ろしさ、危険性については、殆ど言われていません。それに襲われた人間が、それを全く外に伝えられないまま、それが原因で死んでしまうからでしょう。そんな死因は、法医学の本にも出てこないし、当然、統計などある筈もありません。しかし私はどうやら今、その本当の感情に襲われてしまっているようなのです。まだ生きているのが不思議な程です。先生の所へも、お別れを言いに来たのです。」
「いや、顔色は良さそうですよ。まぁ、この部屋は随分明るいからなぁ。」
「もう何日も何日も何日も、飲まず食わずで、一切眠ってもいません。そうしたいとも、まるで思いません。」
「点滴に限りますよ。女に夢中で、つい何日も寝るのを忘れてしまった後なんか、たまに私もやるんですが、あれ、絶対、途中で寝ちゃいますね。」
「そうですか。少しは効くでしょう。」
「それはそうと、どうしてまた、そんな感情に捕らわれてしまったんですか。」
「先生、人は本来、本当の感情によってのみ生きるべきではないでしょうか。嘘の感情で生きて、果たして生きていると言えるでしょうか。やっと私は、自

分の求めてきたものが分かった気がするのです。本当の感情、と言ってみても、所詮これも、一つの言い方に過ぎませんが、それを本当の感情と呼んでみると、なるほどこれだったんだと、行き当たるべきものに、とうとう出会えた気になれるんです。これに行き当たるために、私はずっと生きてきたのです。」

「その、これってどれですか。」

「とにかく私を、私の命ごと、それへと掻き立ててしまうものです。ただ私は、逃げようと思えば、逃げられるんじゃないか。すっかりなかった事にしてしまえるんじゃないか。だって逃げてしまえば、それは多分、追っかけては来ないでしょうし、後で誰かに、どうこう言われる事もないでしょうし…。ただ幾ら逃げても、それはただ死ぬ事から逃げているだけで、本当の感情からは、少しも逃げられていないのかも知れません。」

「何か楽しい事を見付けなさい。楽しい事なんて、その気になって探せば、山ほど見付かりますよ。私なんか、それで困ってるくらいだから。」

「いや、死ぬのから逃げて、それでただ生きてはいけますが、楽しいなんて事は、もうないでしょう。だからやっぱり、捕らわれたままなんです。でそのまま、いずれは死ぬ訳です。そんな独りぼっちで死んでゆく自分を、哀れだとか、情けないとか、毎日そんな風に、感じてるしかないんです。

　生きてゆくからには、必ず何かを感じさせられる。それもまた何処か哀れで

す。全く煩わしいんですが、死に損なった罰でしょう。もちろん哀れったって、ただぼんやり哀れなんじゃなくて、そうでしかない事に、どうにもならない怒りが渦巻くような日々が続くのでしょう。
　それでも何かにすがるとしたら、その哀れさ、情けなさにすがって、心をそういう方に何時も心を向けていれば、私は哀れを解する情けない風流人にでもなって、まるでつかみ所のないような者として、人の中で暮らしてゆけるでしょうか。もちろん、そんなの、納得いきません。まあ、だから哀れなんですが。そうして、もう二度とやって来ない本当の感情を、ただ遠くから眺める術を身に付けてしまった人間は、そのように独りで勝手に気取って、生きるしかないんでしょうか。
　いや、そんなのダメだ。せっかく本当の感情が私にやって来て、死ぬしかない程の苦しみが与えられたのなら、その苦しみを生きてこそ、初めて生きたのであり、そうして生きてこそ、たとえば生きる歓び、そんなものがあればの話ですが、それについて考える資格も得られて…、そのぉ…」
「じゃあ、先生なんかには、決して生きる歓びは回って来ない訳ですね。あなたの言うようにでなければ、禄に生きてもいない訳ですから。」
「先生は、立派な方です。」
「そういうあなたも、立派な生徒です。」

「お月謝を滞納しないからですか。」
「大当たり。」
「先生のそういうところは、確かに尊敬に値します。死んでも真似できません。」
「死んじゃっちゃ、真似できません。」
「先生。この世界は、本当の感情に襲われてしまった者が、決して生きられないように出来ているんです。恐ろしい事じゃありませんか。

ただほんのおまけに、ひどく苦しいだけですが、少しは生かしておいて貰えるようです。今の私のように。ただそれも、本当の感情に襲われるまでの私が、少しも生きていなかったと思い知らされるためだけにでしょう。それを知らされて、私は虚しく死ぬしかなく、そうして死んで、初めて何か、生きる事の秘密にでも、触れられたような気にさせてもらえるのかも知れません。いや、いざ死ぬ間際になれば、そんな風に都合よく、何かに感じ入るような余裕などないでしょう。ただ、少しも生きられずにずっと時を費やしてしまった事に、心底がっかりさせられて、絶望感に押し倒され、目を回して、悔しい思いで死ぬだけでしょう。

しかし先生、そんな死に方だからって、まるでダメだったと言えるでしょうか。たまたま奇跡的に、そこから生きて戻って、生きている事の、この上ない

歓びを味わったところで、生きて戻らなかったのと、どれ程の違いがあるでしょう。生きる歓びなんて知れてます。いや、ダメだったか良かったか、なんて、どうでもいいんです。生きる価値を見出せたかどうかなんて、ただの辻褄あわせでしかないでしょう。本当の感情を抱いて、そのまま死ぬかどうか、ただそれだけなんだ。だから私は…」

「あのォ、先生は、眠くてもう、死にそうなん…です…け、ど…」

先生は、本当に死んでしまう。

「やっぱりそうだ。先生は分かってたんだ。私なんかよりずっと長いこと、本当の感情だけで、生きて苦しんでこられたんだ。眠くて死にそうで、本当に死んでしまう奴なんて居るもんか。先生は自分の体なんか少しも傷付けずに、きっちり脳ミソだけで自殺したんだ。私みたいな者のために、見本を示してくれたんだ。」（二〇〇一年四月三日）

*　　　　*　　　　*

ふわふわ

その真っ白な空の下の、微かな風の揺らぎまで聞き取れるのに、男には、自

分の声が聞こえない。真っ白な空の他には、真っ黒な地面しかなく、余計な物音を立てるようなものは、一つも見当たらない。声を上げれば上げただけ、それは少しも損なわれず、響き渡るしかないだろうし、真っ直ぐ男の耳に達する筈だ。

男はずっと、大声で、大勢に訴えかけるように、何かをしゃべり続けていた。初めの内は、そのしっかりした言葉のリズムまで、面白いように聞き取れた。少なくとも、そう思えた。

しゃべり始めたのは、もちろん何か言いたい事があったからで、それを憶えていられた内は、耳など使わなくても、自分の喉の震えからだけで、自分の声ぐらい聞き取れたのだ。

しかし、それはもう遠い昔の事で、何を言いたいのか、疾っくに忘れてしまった。そうなるともう耳が感じ取れるのは、喉から伝わってくるその震えだけだ。或いは、言いたい事など、初めからなかったのではないか。ただ、折角口があるからには、何かを言わなければならないように思えたし、耳があるからには、その自分の声を聞かなければならないように思えただけで、そのような口と耳があるからには、必ず言いたい何かを、自分は持っている筈だと、勝手に信じ込んでしまっただけかも知れない。

そうして実際、口と耳をフル活用してみると、人並みに口と耳が働いている

事に、大方安心してしてしまったようで、どうでもよくなって、それで済んでしまうのかも知れない。それで、何事もなかったかのように、口と耳だけが働き続けるのは、やはり元々言いたい事などなかったからではないか。

しかし、と男は思う。では、言いたい事があって、それを憶えてさえいれば、或いは、ただ言いたい事があると信じてさえいられれば、自分の声を聞き取れるのだろうか。聞き取れているようなだけで、ただ言いたい事を、喉の震えのほんの上っ面に、なぞっているだけではないか。初めからそのようにして、自分の声を聞き取れたと思い込んでいただけではないか。

その間、耳は何をしていたのか。微かな風の揺らぎまで聞き分けられる、この精妙な耳は。或いは、喉だけはそれらしく見事に震えたが、声は少しも出ていなかったのか。或いは、自分の声だけが選り分けられて、耳はそれを弾き出してしまうのか。

なぜ自分の声が聞こえないのか。実は男は、うすうす感づいていた。いや、もう疾っくに察していた。それは彼の声が、ただの一度も、他の誰かによって聞き取られなかったからだ。他の誰かに聞き取られた事のない声は、どんなに耳が良くても、自分には聞こえない。この世界には既に、そのような法則が確立しているのだ。見渡して見ろ。男がどんなに全身を揺さぶって、声を限りに

叫んだところで、誰も居ないのだから、話の中味は全く何処にも届く事はない。そんな所でずっとしゃべり続ければ、初めの内こそ、たとえその高らかに響き渡るのを聞き取れたかも知れない声でさえ、直に擦り切れて、透明な空気の中に溶け込んで、空の彼方に回収されてしまうだろう。

　いや違う、もっとよく見てみろ。そこは黒い地面には違いないが、土塊そっくりの人の群が、男の足元目指して腹這いで進んでいないだろうか。男に近付く程、それらの人の形は崩れ、男の足元までもう少しの所で、全くの平らな黒い地面になってしまっていないだろうか。いや、男の足元まで近付けた者は、運のいいほんの少数で、もっとずっと遠くで、すっかり土に還ってしまった者達も、随分いるようではないか。

　そうまでして近付きたいとは、余程、男の話に魅力を感じるのだ。男はまんざらでもない気分で、自分の恰好を顧みた。腕も胴も脚も、黒だけで覆われて、全く直線だけで出来ていた。長い時間が、男の体から色と曲線を全て削ぎ落としたに違いない。左腕を振り上げ、拳を強く握り締め、まるで鉄棒に片腕だけでぶら下がって、その腕をずっと直角に折ったまま、ぐるぐる腰を振り回しているようだ。拳には、マイクが握られているべきだろうか。マイクのないのを誤魔化すために、その力み返ったような体の動きが、必要だったのだろうか。いや、マイクなんて関係ない。男のその迫り来るような激しい動きが、尋常

でない彼の呼び掛けを、ずっと遠くにまで伝えているだろう。その声を聞きたいなら、地べたに頭も体も擦り付けて、男に近付いてゆくしかない。なぜなら、その声は余りに凄まじいので、空気の振動を通して、それを聞こうとしても、耳が破裂するだけだ。その声を聞けるとしたら、土の中からしかないのだ。
第一、あの男の動きを見てみろ。あれは、自分の声が少しも聞こえていない者の動きだ。奴の耳は疾っくに、いかれてる。もし自分の声を聞きながらしゃべっているなら、もっと当たり前に突っ立っていられる筈だ。休む事なく、あんなデタラメな動きをしていられるのは、何が何でも言いたい事があるからに違いない。

しかし、そんな男の声を、土に還る覚悟までして聞き取ろうとする者達は何者なのか。声の聞こえる筈のないずっと遠くから、どうして彼らは、それ程までに男の姿に心を奪われるのか。

男は、尚も大声でしゃべり続けながら、じっと彼らの動きを見詰めた。何度も何度もあらゆる方向を見詰め直した。彼らはどの方角からもやって来た。空気中の全ての霞は取り払われ、男の視力はどんどん上がって、遂には、人の頭が地平線の上にポツンと現れる瞬間をも、易々と見て取れるまでになった。

地平線に頭を出した人物が、地平線の上に全身を現す事はない。その者はもう男を見付けて、地面に腹這いになっている。三六〇度の地平線から、そうし

た者達が途切れる事なく、男を目指していた。
　しかし、そこまで見て取ってしまうと、今度は逆に、それらが、男を目指して土に還る者達ではなく、元々土塊でしかないように見えてくる。ただの土塊が、土塊になってゆく人の姿に見えただけではないか。
　ただ、そこには男の他、白い空と黒い地面しかない。だから、男がそこに何を見て取ろうと、それは全く、男の見て取っただけのものであるしかない。男に異議を唱え、それを覆せるものは何もない。空と地面にしても、男が独りで見て取ったものだ。全ては、彼独りの事柄だ。つまり、もう一度彼が、その土塊を人の姿と見直せば、土塊は全て、紛れもない無数の人の姿に戻るのだった。
　男はそうして、彼らにびっしり取り囲まれていた。彼らは、何とか男の声を聞き取ろうと熱望している者達なのだ。そうして、地面を通して、疾っくに彼らの体に、男の声は届いている筈だ。だからこそ彼らは土に還ってゆけるのだ。
　男は、地面から浮き上がる程に、全身が熱くなるのを感じた。
　いやしかし、人であるか土塊であるか、どうであったところで、男には自分の声は聞こえないままだ。自分が何を言っているのか、少しも分からないままだ。仮にそれが、無数の者達に聞き取られていて、それと同じものを男が聞けたとしても、恐らく雑音にしか聞こえないだろう。それは、土に還る者達にとっての声であって、男には声でも何でもないだろう。

いや、一体俺は何を見ていたのだ。三六〇度、目に映る全ての土塊が、俺の声なのだ。白い空と透明な空気の他は、ここは俺の声で満ち満ちている。この星の地面は丸ごと俺の声で出来ているのだ。聞こうとばかりするから、見えなかったのだ。分かってみれば簡単な事だ。
　すると男の体は、その細く尖った形のまま、何倍も硬くなり、何十倍も重くなり、そのようなものからすれば、全く柔らかくふわふわでしかない地面の中へと、一瞬の内に沈み込んだ。そのまま、この星の中心に向かって、一直線に落ちて行くに違いなかった。（二〇〇一年四月五日）

*　　*　　*

楽園

　頭は石で、体はその台座で、誰かが後から拵えた。だから体は私のものではない。その体はもう、何処かへ行ってしまった。頭だけで、しかもそれが石なら、私には、考える事しかない。石は、動かずに済む。石に限らず、そのような物は、ただ考えるためにそのようにしている。その辺が、生き物とは違う。
　さて、その私は、何をしているか。何をさせられているか。何かを求めなけ

ればならないか。何も求めずにいられるか。求めずにいて、消えてなくならずに済むか。或いは、求めていないようで、こうしてここにあるからには、そのある事だけは求めていて、そうであるから、ある事が出来るのか。

　あろうとするから、或いは、あろうとさせられているから、ある事が出来る。でなければ何処にもない。あるからには、そのようにしかない。いずれ消えるにしろ、今はこうしてある事が求められ、その通りになっている。そうでなければ、初めから何処にもないし、求められなくなれば、消える。そのような世界にいる。周りも全て、そのようにしてしかない。と思えるから、また私もそうであるしかないと、思い定められる。

　しかしそう思えるだけで、私を含めた全ては、また別の、私に知りようのない成り立ちによって、こうしてあるようでもある。あると言うが、何があるのか。なぜ私は、私を、あると言うのか。仮に、私も何も、ここさえもないと言ってみよう。しかし何がないのか。ないなら、それはあるものがないのだ。それなら、あるのではないか。つまり、あるとかないとかでない、別の何かの係わりを認めるしかない。それに否応なく巻き込まれていると感じたものが、仮に私と呼ばれたりしてしまう。

　私はもう石ではなさそうだ。空気に近い。石の成分そのままの、透明なガスか。勝手に渦を巻く。と言って、何が変わった訳でもない。ただそうなってい

る。そうなっているのから逃れられない。私など何処にもない、と言ってみたところで同じだ。逃れられなければ、大抵それが私だ。別に私でなくて構わないが、そう知らされるのも、やはり大抵は私だ。
いや、風が吹けば、私でなくなる。私は散り散りになり、大抵私である筈のものが、私でないものになって、私の知らない何事かを、やり始めるのかも知れない。私を逃れた何かは、何処へか流れてゆく。
それでも例えば、それまでの思い出は残って、それが何処かに現われていて、それと係われていると信じ込めれば、それが私であったりはする。
すると私はまた、石のようだった。いや、まるで違う。空っぽだ。空っぽでないとしても、中味は私ではない。しかし、時々カラカラと、中で小さな破片が、独りでに回っているような音がする。思い出の塊が、寂しくて、何かの音を欲しがるのだろうか。
私は、そんな音を響かせる、スチール製の箱だろうか。箱の中の何か。箱の中は空だ。その空の中味が私か。箱と言うより、筒だ。横に丸い穴が開いている。音を出すためだ。私はその穴か。誰かが紙屑を投げ込んだ。ちょうど手頃なるのだ。すかさずその紙屑に飛び掛かり、紙屑になった。いや、その積もりなだけだ。私は何処にいる。次の紙屑に飛び掛かろうと、穴の側にいる。
誰かが筒を片付けた。私だけが残る。飛び掛かろうとする姿勢のままで。穴

がなくて、誰が紙屑を投げ込むか。待つしかないが、待つにも限度がある。同じ姿勢は辛い。何時かは何かがやって来るか。私が死んで、ずっと経ってからなら、やって来そうだ。このままでは、待つ事に、雁字搦めにされてしまう。思い切り、力んでみた。空気を感じた。空気の中に出られたのだ。私が空気でなく、空気のようなら、また何かのガスだろうか。

　しかし待つ姿勢は、何の成分も含まない。それではただの小さな風の一吹きだ。何かに飛び掛かろうとする風。私は辺りを見渡した。ありとあらゆるものがまぶしく輝き、犇めく。そのどれにでもなれそうだ。近付いて、飛び掛かる事さえ出来れば。

　鳥のようではないか。そうだ、私は最後の鳥だ。空を飛べるのは、世界中で私だけだ。しかも世界には、鳥と鳥でないものの二種類しかない。しかも地上は、地面を這いずり回るものらによって、もうすっかり彼らだけのものだった。降り立てる場所はない。眺め回せば、その私だけが飛ぶ空の、何と寂しい事だろう。それも、私にしか見て取れない。静まり返って、決して何も甦らない。そんな眺めに見とれて、羽ばたくのを忘れていた。

　体力も少しずつ落ちていて、先程からもう、地上は直ぐ目の前だ。翼を振り立て、また昇ってゆけるか。昇れる所まで昇ったら、そこが命が舞い上がれた最後の高みだ。いや、そんな拘りは捨てよう。このまま低空を、少しでも長く

飛ぼう。高みから墜落して意識を失うより、ゆるゆる落ちて、奴らの餌食になる私を見届けよう。

しかし、間近に見下ろす地上の眺めも、空に劣らず、寂しく静かだ。大分長い事、動くものにお目に掛かっていない。奴らはどうした。何処に身を潜めた。私を騙して、私が地上に降りて羽根を休めた瞬間、一斉に襲い掛かる積もりか。或いは地上に降りて、仮に奴らが現れず、思う存分、体を休められたとしよう。その安逸に染まった私は、二度と空へは戻れないだろう。多くの仲間は、そうして鳥でなくなる道を選んだのではなかったか。

この星は飛ぶには向かない。空気は薄いし、その割に重い。それに逆らって、どうしてまた私の先祖は、こんな何もない空を目指したのか。一体、何があったのか。

見上げると、宙に浮く植物群が、空中高く根を張って、甘そうな巨大な実を、無数に実らせてでもいたのだろうか。

なるほど、そうであったなら、飛べるか飛べないかで、餌を得る確率は段違いだ。毎日毎日、空中の果実を眺めては、少しでも体の一部を翼に出来る可能性を信じるものらによって、飛ぶ試みがなされた。そしてその中の、今の私の形に近い私の先祖が、ふらふらと気流に乗り、遂にその植物群の枝に掴まる事が出来た。仲間は勇気百倍、それを真似て次々に舞い上がる。天敵も追ってこ

ない、餌取り放題の楽園を得て、空前の繁栄を見たに違いない。痩せた地上になど用はない。空中で生まれ、空中で死に、子々孫々、私達は栄え続ける。

　しかし次第に、果実は食い尽くされてゆく。植物群は遂に枯れ果て、鳥たちも共食いの果てに絶え、空中の楽園は跡形なく消えたか。

　そうなる前の食料不足の厳しい時代、空での覇権を失ったものらは、遠い祖先が後にした故郷の地へ降りるしかなかった。彼らは、空中でぶくぶく太り、地上の飢えたものらには、恰好の餌食だったろうか。

　或いは逆に、餌の豊富な空中で彼らは巨大化し、しかも彼ら同士、際限のない欲望に取り憑かれ、餌を奪い合って争いを繰り返し、途轍もない戦闘能力を身に着けていたかも知れない。地上のものらこそ、恰好の餌食だったろうか。そうして地上でもまた、餌は食い尽くされ、彼ら自身滅びていったか。だから地上は、死んだように静かなのか。

　いや、それはそうと、私は身を投げた筈だ。もうそろそろ、地上に叩き付けられても、いいと思うが。（二〇〇一年四月七日）

＊　＊　＊

真理

やり方さえ分かってしまえば、そこでは様々に異なったものが、無限に手に入る。また、様々に異なったやり方も手に入るので、無限の無限に、様々に異なったものが手に入る。

　ではそこでは、あらゆるものが手に入るのだろうか。いや、何かと異なるのでなく、ただそれであるだけで、たった一つのそれであるようなものは、まるで手に入らない。

　そう気付いてしまうと、無限の無限にも手に入ったものどもは、全て何でもなくなってしまう。それらはただ、互いに異なっていてだけ、そこにある。私はそれらと、触れ合う事も交わる事もない。だから何でもない。それらを何処までも見晴らして、すっかり手に入れている積もりにはなれても、そうしているのは、それらとの平行線上を移動してゆく、独りきりの私でしかない。

　ただそれであるだけの、たった一つのものの中にこそ、触れられる無限があるのではないか。たった一つしかないので、それはごく当たり前に、手に取る事も出来るに違いない。

　何もかもなくして、四方は全く、ただ壁だった。そう簡単な事ではない。どう説明すればいいか。実際そこに入り込んで、周りを見渡すしかない。勿体を付けている訳ではない。その目で見なければ、それが壁であるとも分からない

だろう。しかし、体験しようとして体験出来る事ではない。入り込んでしまって、いきなり突き付けられるしかない。

　仮に、四方の壁が全て、真っ白く塗られたばかりの、何一つ置かれていない、窓もない、物音一つしない、暑くも寒くもない、匂いもない、微動だにしない、そんな部屋に独りで入ったとしよう。しかしそこには、四方が壁である他に、何と多くの事が詰め込まれているだろう。

　その白さ、静けさ、飾り気のなさ、その快感、不快感、暑くも寒くもない事が皮膚に及ぼす感覚、窓のない事から来る圧迫感、匂いのなさが齎す落ち着かない感じ、眩しさ、暗さ、息を吸う音、吐く音、眠気、幻覚、幻聴、妄想、嫌でも思い浮かんでしまうあの事、あの情景の中のどうしても思い出せない小さな一角、痒み、痛み、誰それの顔、声、差し迫った約束、心臓の鼓動、独り言、喉の渇き、落書きしたくなる気持ち、頭を壁に打ち付けたくなる気持ち、ピョンピョン飛び跳ねたくなる気持ち、その他幾らでもあって、四方が壁である事などすっかり忘れ去られてしまう。

　では、ただ壁であるとは、どういう事か。目の前にそれだけは見えていて欲しいと願うものが、こちらにではなく、向こうにしかなくて、決して姿を見せてくれない時、そこに壁があるのではないか。いや、姿を見せてくれないばかりか、思い浮かべさせてもくれない。一切、私の頭に働き掛けて来てくれない。

だから、私の頭は止まったままだ。ただ、頭が働いていた時には、思い浮かべられた筈で、その確信だけが、止まった頭の中を、ゆるゆると行き来する。

　すると、そこにまた壁がある。透き通った壁だろうか。見たいものが、粗方見て取れるようだ。ただし、決して私の踏み込めない、その壁の向こうに。

　しかしそれは、動かない平らな壁ではない。刃物のように斬り掛かってくる。見たいものを頭の中に投げ込んで、ありありと見せる。私は何処かに切り捨てられ、その見せられたものだけが、勝手に振る舞い出す。しかしそれが、そのものの本当の姿かどうかが、分からない。その分からない事が、また壁になる。

　その分からないままに、ありありと見える姿は、耐え難い程に、動かし難い。寧ろ私は、それとの間に壁を求める。しかしそれは、私の脳髄を直撃し、頭の中を空っぽにする。それを防ぐための壁を求めたのに、逆に、その空っぽのための壁が出来て、そのため私は、それに囚われて逃れられない。

　その見える姿は、紛れもなく、それと私を隔てた壁によって、却って私の頭の中に、壁を取り払って入り込んできた。では、初めから壁がなかったら、私はその本当の姿の前に、真っ直ぐ立ち至れたろうか。いや、そう出来なかったから、私は壁に行き着くしかなかったのだ。壁が原因なのではなく、壁は、私の見たいものが、それを見ようとした私に返してきた、答えのようなものだ。つまり壁は、私の見たいものと、それを見ようとする私によって、予め出来上

がっていたようなものだ。
いや、どうして私から壁を築いたりしよう。ただ私に見られるのを拒み、私が壁にしか行き当たれないよう望んだ結果が、壁なのだ。その望みは、寸分違わず、私の前に実現した。ただ私の見たいものだけが、私に見せて貰えなかった。恐らく私は、壁に囲まれた中にさえ居ないだろう。私はその間、一切係わらせたものは、疾っくに遙か彼方を行き過ぎていて、私などはもう、思い出しようもない過去に消し去られているのだろう。私の求め
だから、私をここで嘲笑っているのは、もう、その私の求めたものではなく、私とは何の係わりもないものだ。求めて得られない私の姿が笑われるのではなく、ただ私の姿の、何だか分からない妙なおかしさが笑われるだけだ。
私は無限に異なるものどもの方へと、引き返すしかないだろうか。引き返さずに居ようにも、その居場所がないなら、そういう事だろう。試みに、無限の無限の中から、私の求めたものに出来るだけ近いものを探そうともしてみる。しかし何のためかは、自分でも分からない。探すには、平行線は持って来いだ。しかし何度往復しても、似たものが目に留まる事すらない。何もないのと変わらない。それもその筈、無限は恐らく、無限のためにあるのであって、私のためにあるのではない。無限を手に入れたところで、私の求めるものは含まれない。ありとあらゆるものがあるだろうが、それらはどれも、ありとあらゆる違いに

よって、あるに過ぎない。
他の何かとの違いによるのでなく、ただそれであるだけでそれである、たった一つのものでなくて、どうして求めたり出来ようか。そうでないものを本気で求めるなど、汚らわしいとしか言いようがない。探し回って、見付けたような錯覚に嵌まり込んで、それを楽しんでみるか。時間潰しの下らないゲームだ。
居場所がなくても、やはり壁に戻ろう。その壁は無限の外にある。私の求めた、それであるだけでそれであるものと結び付いてだけ、それは壁であるからだ。その壁も、ただそれが壁であるだけで壁なのだ。
ただ、戻ったからといって、何も付け加わらない。何も始まらない。容赦なくそれを、初めから私に分からせてしまうから、壁なのだ。
私はその壁と向き合って、私の体や心の変化にでも注意を向けるべきだろうか。私に何が起こるかを探求し、その観察記録を並べ立て、新たな真理でも導き出すべきだろうか。何になる。また無限巡りの習癖へ逆戻りだ。
壁と向き合いたいなら、何かを得ようとしたり、自らを顧みたりしない事だ。ただその壁からやって来るものに、殺されたいと願うだけだ。しかし壁に人が殺せるか。もちろん。求めるものが、既に彼方に去り失せたなら、私を殺すためだけの壁だ。しかしそうして壁の前に身を投げ出すと、そんな幼稚な望みを抱え込んでいる私を、壁は嘲笑うばかりだ。（二〇〇一年四月九日）

＊　＊　＊

答え

　言葉の通じない者同士が言い争っている。一体、何時になったらケリが付くのか。いい加減うんざりしてくる。いや、よく耳を澄ませ。中で言葉が通じないのは、たった独り、私だけではないか。やっとそう気付いて、側に居る一人に何気なく話し掛けると、彼らは更に高ぶって一斉に争うのをやめ、目を剥いて、よってたかって私をそこから放り出した。二度と出入りするな。

　先ず、真っ直ぐ前を見ろ。完全な空虚。果たしてそんなものがあるのか。あってもなくていい。完全な空虚だと先ず認める事だ。すると私は、男でも女でもその中間でもない。私はどうした。何だ。

　いや、そのような者は、既に男なのだ。ただしそれは、私が男であればの話だ。では私が女であればどうか。私は既に女か。いや、私は女ではないだろう。女であれば女でない、そのような私は、相変わらす男でも女でのその中間でもないままだろう。では私は女なのだ。そのようにして女なのだ。男でも女でもその中間でもないままに、女なのだから。

つまり私は女である。しかし何処がどう女なのか。女であると思えるような事は何もない。女だと思っただけで、それこそ完全な空虚だ。いや空虚以下だ。それが女だろうか。別に女でなくてもいい。と言って男でもない。では、その中間だろうか。しかし男でも女でもなくて、どうしていきなり、その中間になれるだろう。そうなれるのなら、まるで話は早いのだが。

つまりは私は、男でも女でもその中間でもないのだ。ただ私が既に男である場合に限り、そのような私は男なのだ。しかしなぜそれが男なのか。そもそも男でないのに、どうして男である場合などがあり得るのか。

では私は何だ。やはり女か。女にしても、ありもしない女である場合でなければ、女ではない。それとも女だけは別か。女でなくても、男でも女でもその中間でもないなら、どのようにか、女であるのか。まさか。そんな話を信じる奴は、余程女を買い被っている。

と、そんは風に言い放って、それで無事でいられると思うのか。他人事じゃない。ずっとこのままでいられるか、いられる筈がない。時は容赦しない。男か女かその中間か、私はそのどれかになるしかない。たまたま、ほんの少し猶予が与えられている。その間だけ私は、私が三つの内のどれだろうかなどと、悠長に考えていられる。考えたり出来るのが、既に悠長だ。

いや、それなら別に考える事など何もない。時に任せれば済む話だ。三つの

内のどれにもなれず、綺麗さっぱりなくなるにしても、そのような私であれば仕方ない。
　しかし何の猶予か。私は猶予の中になどいない。私が時の中にいるなら、私は疾っくに、男か女かその中間になっていなければならない筈だ。そうでなければ消えているかだ。猶予などある筈がない。
　そうなっていないなら、私は時の外にいるのだ。だから私は、男でも女でもその中間でもないのだ。そうだろう。時の外なら、きっとそれは当たり前の事なのだ。何を考えたところで、どうなるものでもない。ずっとこのままだ。
　そうだ。いや、そう私が決めてしまえば、確かにそのままかも知れない。しかし私が、男でも女でもその中間でもいいから、そのどれかになろうとしたらどうか。そもそも、その三つの内のどれだろうか、などと考えるのは、そのどれかになろうとしているからではないか。あと一押しが足らない。どうしたら一押し出来る。出来るなら疾っくにそうしてるだろう。
　今更、振り返る事に意味があるかどうか分からないが、これまでどうにか、生きて来られたからには、必ず私は、男か女かその中間であった筈だ。ただ忘れいるだけだ。戻れないにしても、思い出せもしないのか。自然の力は奥深い。幾ら忘れたようでも、何かしらそれらしきものが、そこはかとなく滲み出すのではないか。或いは、私に勘を働かせてくれるような何かが、ほんの一瞬、私

の前を行き過ぎないものか。

　そういう事がまるでない。それなら私は、自然の力の届かない所に居るのだ。死んでいるのではないか。もうその辺をさまよっている火の玉か何かでしかなくて、そいつが勝手に、自分が何なのかなどという事に、強迫観念のように取り憑かれているだけではないか。しかし、確かにそうだと言えるものもない。生きているか、死んでいるか、それが大問題だ。何しろ、生きていると死んでいるでは、大違いだ。しかし男でも女でもその中間でもないままで、どうしてそれを確かめられよう。結局どれも、分からず仕舞いだ。

　さて、では私はどうしようか。まあ先ずは、分からない事など考えない事だ。初めっから、男も女もその中間も、生も死も、ついでにその中間もなかった事にしておけ。それで済むだろう。気楽なもんだ。

　いやそうでもない。寧ろあれこれ考えていた方が楽だ。まるで分からないなら、あれこれ考えているべきだ。考えるのをやめたら、私は私自身を、そのまるで分からない事に、明け渡すしかない。そうして私まで分からなくなったら、私は粉々になるまで苦しむしかないだろう。逆に、幾ら難しくても、ほんの少しでも分かり掛けている事は、放っておく方が楽だ。分かってしまうだけ辛くなる。まあそれはいい。

　そう分かったのなら、私は、楽な道を見付けたのだ。いや、そうでもない。

楽など直に使い果たされ、楽がそっくり苦しみになる。尤も、それで苦しむなら、苦しむだけだ。退屈しないで済む。苦しんでいられただけ、本当の苦しみを逃れて、楽しめたのかも知れない。だとすると、そうしてずっと考えながら、楽と苦を延々繰り返す事になる。それは困る。そうだと分かってしまっては、何も考えられなくなる。どうしよう。

　それなら例えば、私は絶対男で死んでいるとか、絶対女で生きているとか、決め付けてしまったらどうか。そうしてみて、その先どうなるかを、また楽しんだり苦しんだりしてみよう。

　しかしそれもまた、組み合わせは限られていて、いずれネタは尽きる。私は絶対に、男でも女でもその中間でもあり、生きてもいるし死んでもいるしその中間でもある。そうでありながらまた、絶対に、男でも女でもその中間でもなく、生きても死んでもその中間でもなくなったところで、ネタは尽きる。

　では私は段々に、追い詰められてゆくしかないのか。取り敢えずは、それでい。追い詰められるのを楽しんだり苦しんだり出来る。で、その先は。

　何もかも放り投げる。そうしてまた元に戻る。堂々巡り。その堂々巡りに、また、楽しみや苦しみは付いて来てくれるだろうか。いや、付いて来なくていい。楽しみ苦しみを繰り返すだけが能じゃない。初めからそんなものさえないなら、退屈さえ知らずに済む。物言わぬ堂々巡り、何も感じない堂々巡り、堂

々巡りのための堂々巡り。
　しかし、そんな私が、どうして生きているだろう、私は死んでいるのだ、とそのように、生きている私が考えるのだから、生きているに違いない。答えが出た。何しろ考えるのだから、死んでいる私が、そんな私であれば、まだ生きている。何だ、簡単じゃないか。または、死んでいると考えるか、死んでいると考える。これでもいい。生きている私が死んでいる私が生きていると考えるか。これは大問題じゃない。だって、どっちだろうと大して変わらない。これが正解だ。
　ではついでに、もう一つの問題はどうだ。男か女かその中間か。こっちはさっぱりダメだ。何しろ私は放り出されたのだから。もう何も考えられない。そうして私はもう何度も、粉々になるまで苦しんだではないか。それで。（二〇〇一年四月十一日）

＊　　　＊　　　＊

背丈

　青味掛かったりピンク掛かったりする陽の光は、真上から垂直に差すようだった。歩いている私の体が、傾いていていたのかも知れない。右へ右へと緩いカー

ブを根気よく描き続けるブロック塀に沿った、照り返しの眩しい真っ白なコンクリートの道を、浮き上がるように歩いていた。春の日の正午頃だった。カーブが終わると、その直ぐ右手だけが、真っ直ぐ落ちてくる濃い影に、鋭く切り取られていた。光りの中の白い道は、尚も真っ直ぐに延びて、電柱三本の先の、その突き当たりに、間口の狭い薬局が見えた。そこも高い陽を受けて、縦長の赤い「薬」の字が燃えるようだった。道の左側はブロック塀の続きが真っ直ぐに延び、その上に灰色の痩せた猫が一匹、擦り切れた雑巾のように疲れ果てた様子で乗っていた。塀は途中で崩れていた。

　濃い影に惹き付けられ、私の体は明らかに傾いた。光に慣れた目には、そこは殆ど闇だった。捻れて脹れながら右へ傾く、扇形のちょっとした空き地で、石畳が敷かれ、湿っていた。その先の奥まった所に、ガラスの壁に囲まれた小さな事務所が見える。そこが、今日からの私の勤め先に違いなかった。

　正面からは、狭い一部屋が見えるだけだった。その正面の右の端の一角だけに、何処からかほんの狭い幅で、高い陽が落ちてきていて、そこだけ真っ白くすっ飛んで見えた。その中に、小さな目をしょぼつかせた、色の黒い小さな男が、傷だらけのスチール製の丸椅子に掛けて、膝に手を置いて少し前屈みに、そちらに歩いて行く私の方を見ている。

　正面中央のガラスのドアに手を掛ける頃に、やっと目が慣れて、事務所の中

のこざっぱりした様子が窺えた。更にその右手の奥の方に、トイレが張り出しているのが見えた。ドアに掛けた手を放し、小さな男の目の前を横切って回り込み、トイレで用を済ませてから、小さな男の直ぐ後ろにある、もう一つのガラスのドアから中に入った。

直ぐ右手に、ガラスの壁に寄せられた事務机が一つ、正面を向けて置かれていて、そこに、びっくりしたような顔のすらりとした男が、両肘を乗せていた。私と目が合うと、丸く開けた口を尖らせた。

昼飯は食べたかね、と聞くので、まだです、と答えると、その部屋の奥の、半分壁で仕切られた、本当に狭い台所の、汚れたテーブルの上の、焼き魚と刻んだキャベツを乗せた皿を与えられた。私は先ずそれを食う事にした。天井から小さなアブラムシがぽたぽたと落ちてきた。びっくり顔は私の背中越しに、厚かましい奴だ、と言った。

食い終わって、事務机の方に向かった。ほんの二、三歩の事だ。びっくり顔の換わりに、肩幅だけ目立って広い、胸の薄い痩せた女が、腰掛けていた。その青白い顔は、額も頬も顎も殆ど肉が付いておらず、角張ったエラが張り出していて、仮面のように硬そうだった。ほっそりした鼻筋は通っていた。骨の形がバラバラに浮き出るような指をしていた。

私は、その傍らの、日曜大工で作ったような木の長椅子に、腰を下ろした。

その椅子は黒ずんでいて、お尻の形に磨り減った窪みが並ぶ程に、使い込まれていた。ただ静かに前を見ている小さな男に倣って、両膝を鷲掴みにするようにして、私は黙ったままでいた。

　事務机の電話が鳴って、女が受けた。するとその時だけ、小さな男の全身を照らす真っ白い日差しが、少しだけ弱まったような気がした。女は、事務所の名前を名乗っただけで、後は一切無言だった。電話を切った。すると日差しもまた、元の強さに戻るようだった。

　二時間くらいだろうか、私達は、人の出入りの全くない、その暗くひんやりした事務所の中で、殆ど物音も立てず、ただ黙ってじっとしていた。日差しもまた、時間の経過など関係ないように、少しも動いていないように見えた。

　電話が鳴った。高い日差しはチカチカして、また少し暗くなるようだった。はっきり見て取れた。女は受話器を取った。

　小さな男がいきなり立ち上がり、飛び跳ねるように正面のドアに突っ掛かり、一瞬の内に外に出ていった。私はのろのろと、腰を屈めたまま、その空いた丸椅子に移った。自分の顔が、真っ白く輝くのさえ分かった。

　白い道と石畳との、ちょうど光と影の境目で、小さな男が、背の高い細身の二人組に対応しているのが見て取れた。三人は何処かへ消えた。後ろを振り返って、何処からですか、と私が聞くと、女は俯いて黙って受話器を置き、それ

から顔を上げて、測ったような笑顔を作り、取引先の名前だけを甲高い声で言った。別にメモを取った様子もなかった。

　私の全身を包む日差しは、少しも動かないまま、少しずつ金色が混じり、直に赤みを増し、直ぐに弱まっていった。事務所に灯りが付けられた。私の目には、事務所の中は、ずっと白々と眩しいままだった。何度か電話が鳴った。その度に、灯りはチカチカと少し暗くなり、受話器が置かれるとまた元に戻った。

　女は簡単な身支度をし、きっかり定時に帰っていった。私と小さな男とびっくり顔の男と、後もう一人、私達の夕食の支度をした男の四人で、体をぴったり寄せ合って、台所で夕食を済ませた。１０分と掛からなかった。外は真っ暗で、何も見えなかった。

　私達は、二階の倉庫から毛布と布団を運び込んだ。私は新入りなので、正面のドアの直ぐ横の、ずっとそこだけ陽の当たっていた隅に、布団を敷いて寝た。他の者達は、長椅子の上に体を小さく折り畳んで、互いの体にかじり付くようにして、毛布を被って寝たようだった。

　目を醒ますと、もうすっかり朝で、見上げた空は、深い青に輝いていた。他の者達はもう起きていて、何か忙しくしていた。私の足元の正面のドアから、入れ替わり立ち替わり来客が出入りしていた。私の頭の上のもう一つのドアから、びっくり顔が、私の体を跨いで足早に出ていった。私は、寝付きが悪かっ

たのを思い出しながら、ぼんやりした頭で布団を片付け、自分で勝手に自分の居場所に決めた、木の長椅子に腰を下ろした。

昨夜から明け方近くまで、その長椅子で三人の男達は、一塊りになって、ゲラゲラ笑いながら身を揺すり、楽しそうにおしゃべりを続けていたのだった。それで私は眠れなかったのだ。

朝の慌ただしい時間が過ぎると、事務所は、私と女と小さな男の三人を残して、すっかり静かになった。小さな男は、昨日と同じ、そこだけ陽の差す一角で、目をしょぼつかせていた。

彼は外に何かを見付けたようで、やはりまた、飛び跳ねるようにドアに突っ掛かり、外に出ていった。昨日と違い、私は何か彼の手助けをすべく、後を追おうと腰を上げた。

一人で大丈夫ですよ、あなたはそこに座っていてください、と女に言われた。女は腕を突っ張らせ、丸椅子を指さしている。私は白い光の中に入って、外を眺めた。傾き掛かって来る暗い石畳と、光る白い道と、白い塀と、青い空だけだった。

二人きりの、沈黙の時間がずっと過ぎた。陽に少し金色が混じり、午後も大分回ったようだった。女は立ち上がり、私に近付いて来た。私は丸椅子ごと場所を譲って、女の脇に並んで立った。私はすれすれ、光の中に居た。女は殆ど

私と同じ背丈があった。光の中で、女の横顔の、彫りの深さが際立った。女の両肘が上がり、細い指が拡がって、爪を立てるようだった。顔を少し上げ、横に長く口を広げ、前歯を剥き出して、女は、目の前の何かに、囓り付くような振りをした。ガリッと音がした。
女は、そこに切り立つ透明な氷の壁に歯を立てるかのように、光を囓り始めた。光の方も、ただ食べられてばかりでなく、身を捩って抵抗するようだった。それをまた女が、首を少しだけ右へ右へと素早く振って、打ち負かすようだった。
どれ程か、そうした時が過ぎて、やっと私は、その女の姿を凍り付いたようにじっと見詰めている自分に立ち戻った。途端にひどい疲れが襲った。私は、前後に揺れる体を支えようと、ガラスの壁に手を付こうとした。しかしそのまま、危うく前のめりに倒れそうになった。
右腕がなくなっていた。右腕だけではない。右肩も、みるみる消え掛けているようだった。私は全身、光なのだった。日が暮れるにはまだ間がある筈だったが、外が真っ暗になった。時間を掛けて、私の体は、女に丸ごと食われていった。（二〇〇一年四月十三日）

＊

＊

＊

目的

　四人家族の内、父親と息子は都会が好きで、母親と娘はジャングルが好きで、結局、別れて暮らす事になった。母親と娘は、アマゾンの奥深く分け入り、何処まで枝を伸ばしているか知れない、大きな樹の上に寝床を設えて、そこを住処にした。外の世界の事は、ちっぽけなラジオが伝えるだけだった。
　或る日、娘が水辺で体を洗っていると、ギラギラと全身を輝かせた半魚人が、水の中から、いきなり娘に飛び掛かった。娘は、母親の目の前で、ムシャムシャと頭から喰われてしまった。水辺は血に染まった。他には何一つ残らない。何とも呆気なかった。
　その夜から、母親は、その水辺のすぐ傍らに寝床を移した。夜だけでなく、終日そこで、ただラジオを聴きながら、何もせず黙って過ごした。その結果がどうなろうと、とにかく母親は、一度あの半魚人に突っ掛かって、あらん限りの力を振り絞って、取っ組み合わなければ気が済まない。
　半魚人は用心深い。遠くからそっと水の上に目だけ出して、どんな罠が仕掛けてあるか、見付け出そうとした。母親はあらぬ方を見詰め、ただ寝そべってラジオを聴いている。半魚人は次第次第に近付いて、母親の寝息まで聞き取れ

る辺りにさえ、身を潜める事も出来た。

何処かの国の或る自治体が、水族館の建設を計画している。そうラジオが伝えていた。それで、何処にどんな水族館を作ったらいいかのアイデアを、広く募っているとの事だった。それは半魚人にも聴き取れた。

何だ、水族館の設計なら、俺達、半魚人に任せた方が、おもしろいものが出来るに決まってるじゃないか。

しかし彼は、ジャングルを離れては、生きていけない。或いは、都会の人間共も、水族館なら半魚人にやらせるのが一番だと分かってはいても、奴らに頼むのは無理だと、諦めているのかも知れない。

半魚人はもちろん、それまでラジオなど聴いた事はない。外の事は何も知らない。水族館というものがあるのも、初めて知った。で、それ以来彼は、何処にどんな水族館を作るかで頭が一杯になった。

まさか、ジャングルの中に水族館を作る訳にはいかない。都会の連中は面白がって押し掛けるかも知れないが、仲間に迷惑が掛かる。やはり水族館は、都会の連中が考え出したものだけあって、都会の真ん中に建てられてこそ、さもそれらしい怪しげな魅力を放つに違いない。しかし自分は都会には行けない。

そこで目を付けたのが、彼が平らげた娘の母親だった。あいつはただジャングルが好きでここに居るが、元々都会の人間だ。半魚人は水族館の場所を、そ

の母親の腹の中に決めた。
女の腹の中に水族館を作る！　何とも奇抜な発想。いや、まるで無意味だ。馬鹿げてる。しかしそう思うのは、水族館に通い慣れている都会の人間だからだ。ただ水族館という言葉を覚えたにしても、それを見た事も、それがどんなものかの説明さえ聞かされていない。そんな半魚人にとっては、極めて真っ当な、思い付く限りの殆どただ一つのアイデアだった。
そうして半魚人は、来る日も来る日も、水辺の脇に横たわっている女の側に通っては、その腹の中に自分の脳波を送り込み、そこに水族館を拵えた。そして彼女も或る日、自分の腹の中に、どうした訳か、水族館が出来上がっているのに気付いた。
それで彼女はやっと、死んだ娘の側を離れ、都会に戻る踏ん切りを付けられた。
「どう？」と女は、服を捲り上げて、私に白い腹を見せた。
「この中に水族館があるの。入ってみたくない？」
「おいくらでしょうか？」
「大人２０００円、学生１５００円、あなたは友達だから、１２００円にしとくわ。」
もちろん、入って見たかった。

「何処から入るんですか？」
女は白い腹の、ただ全く白いだけの辺りを指差した。
私の体はみるみる小さくなって、その白い肌の奥の、柔らかい脂肪の中へと吸い込まれてゆく。それから私の体は、細い紐のようになって、何処かをぐるぐる引き回されたかして、息苦しい思いをしていると、上の方で、女の声が重々しく響き渡った。
「ああそれから、一人で水族館に行くなんて、カッコつかないわよね。彼女を一人、付けてあげるわ。レンタル料は、一時間につき一万円。安いもんでしょ。」
さあ、安いかどうか。そんな事より、私はいきなり水の中を、殆ど腰だけを使って、前へ前へと泳いでいた。どうした訳だ。右を見ても左を見ても、水槽など見当たらない。四方八方見通しの悪い濁った水ばかりだ。隣を見ると、なるほど、彼女らしきものが一緒に泳いでいた。何処からどう見ても、彼女は半魚人だった。
しばらく進むと、色とりどりの巨大な水中花が幾つも現われた。水中花と言っても、コップの中の小さな造花ではない。ぴらぴらと揺れて、プランクトンや小魚を、吸い込んでいる、生きた水中花だ。更に進むと、少しずつ水が澄んで来たは良いが、上から槍が何本も降って来た。私は、彼女にリードされてそ

れを避け、何とか命を落とさずに切り抜けた。命と引き替えなら、一時間一万円も高くないか。

更に進むと、水はまたどんどん濁って、砂煙だか、泥煙だか、或いは、何かの微生物が寄り集まって煙のように見えるのか、そんなものがあちこちでモクモクと湧きだして、私はバランスを崩し、分からない内に裏返ったりしてしまうのだった。彼女は甲斐甲斐しく、私の周りをぐるぐる回った。

「黙ってないで、何か言ってよ。」と女の声が、水の中へ落ちてきた。

「何だ、言葉が通じるんですね。」

「当たり前でしょ。」

「何で、魚が一匹も出て来ないんですか。」

「半魚人の考えなのよ。多分、ジャングルでは、魚は必ずしも水の中だけじゃなくて、泥の上まで出て来て、そこを這い回ったりするもんだから、水中に棲む生き物の内に入らないんじゃないかしら。」

「じゃあ、槍は？」

「彼らには、いきなり水の中に現われる、何とも謎めいた生き物なんじゃないの。」

私達はもう、進むのをやめていた。周りを見渡すと、人間と半魚人のカップルが何組も、嫌でも目に付く。

「ここはもう、水族館じゃなくて、その先のデートスポットってとこね。ねえ、聞こえてる？」
半魚人の彼女が、私に絡んできた。私は泳ぎ疲れ、腰などは全く痺れて、思うに任せない。彼女の為すがままに、私は半魚人と交わる羽目になった。
それから私は、ずっとそこから出られなかった。速いもので、何ケ月かが経ったのだろう。半魚人の彼女は、私達の子供を産んだ。もちろん半魚人だった。正確には、四分の一魚人だろうが、人間から見れば、半分だろうが四分の一だろうが、魚の血が混じっていれば、全部半魚人だ。半魚人の側から見たら、どうなんだろう。まあ、それはいい。
私達の周りでも、人間と半魚人のカップルの子供が次々と産まれていた。もう大分大きくなって、おませな半魚人もいた。その半魚人同士がまた交わって、子供を作った。正確には、四分の一魚人同士の子供だから、それはまだ四分の一魚人のままだ。
しかしその四分の一魚人は、もちろん雄雌を問わず、或いは男女を問わずと言うべきか、水族館を見に来た人間の、レンタル用の、彼、彼女になっては、子供を作っていった。そうして、八分の一魚人、十六分の一魚人…、と次第に魚の血の薄くなるものも現われた。
或る日、殆ど人間と変わらないような、しかし必ずほんの少しは魚人である

筈の、女の子が生まれた。少し成長してから見直すと、何処か見覚えがある。ここのオーナーに似ているのだ。その子は直に、水に流されて何処かへ行ってしまった。
　私は直ぐにピンときた。女はその子を産んで、自分の娘にしたのだ。自分の腹から出て来たなら、初めから自分の娘でしかないだろう。いや、多分それで目的が達成されて、気掛かりなのは私達の行く末だ。（二〇〇一年四月十五日）

＊　＊　＊

時間

　もう何もない。決して何も戻ってこない。何一つ取り戻せない。それなのに、一体何のために、未練がましく生き延びているのか。こんな事をしていても仕方がないではないか。決まり切ってる。いい加減、諦めたらどうだ。毎日ダラダラとこんな下らないものを書いて、そんなお前の生きている姿など、自分でも全く醜いだけだろう。ただのゴミだ。さっさと処分すべきだ。
　こうして時間をやり過ごしていれば、その先に何かがやって来るとでも期待しているのか。だとしたらそれはひとえに、お前が意地汚いからだ。その意地

汚さが、何事かへの期待を、性懲りもなく抱かせてしまうのだ。思い知れ。そんな乞食根性を忍び込ませて、何時までゴマカシが利くと思っているのか。それで何か、困難にでも立ち向かっているつもりか。それでも時間だけは、頼みもしないのに、出来たら断りたいのに、勝手にやって来る。お前の時間なんて、もう全く使い物にならない。その時間を、ただ生き延びるだけのために飼い馴らしている。何にもならないと分かっていて、ただそうしている。他に何もない。使い物にならない時間だけがあって、一日中それとだけ向き合うのは耐え難い。何もしないでいると、それとだけ向き合うしかない。それを避けるためにだけ、生きて何かをしようという魂胆だ。そうして、その時間に擦り潰されて、やがて消えてなくなるのを待つ方が、さっさとそんな猿芝居を已めにするよりも、マシだとでも言うのか。

　どうしたいんだ。埋め合わせでもしているつもりか。こんな事が、失われたものの替わりにでもなると思っているのか。馬鹿げてる。なる筈がない。何がどうひっくり返ったって、取り替えなんて少しも利く筈がない。しかも、初めから、別の方を向いて、別の事をしているのだから、話にならない。尤も、失われたものには、もう決して届かないのだから、どう足掻いたところで、まるで見当違いの方を向くしかない。生きていても、もう何も得られない。それで生きる意味など見出せる訳がない。死んでいるのと同じだ。なぜケリを付けない。

やはりそうか。私の意地汚さだけが、私を生かしているのだ。ただその意地汚さを放し飼いにして、それで、生き抜こうとする意志を貫いているつもりか。苦しんで生きる意味でも、探り当てようとしているつもりか。それで何とか、恰好を付けているつもりか。そんな恰好で自分を欺いて、何が面白い。いやきっとそこに、何かしら面白味が伴うのだ。しかしそんな快感を、独りきりでいじり回しているお前の恰好を見てみろ。それがお前の実の姿だ。分かり切ってるだろう。もう終わりにしたらどうだ。

　続けていても、絶対どうにもならない。それから目を背けて生き続けて、それでどうなる。書く事が最後の救いにでもなるのか。無理にでも、そう信じたとしよう。だけどそれが何だ。救いが何だ。救いこそ、全く救いではない。解決こそ、全く解決ではない。その他全て、良いものの正しいもの私を生かすものは、全くその反対だ。

　そうした全ての良いものから私は拒まれている。得たいと思ったものが、得られる事はもう決してない。これはもう変えようのない事だ。私が良いと思うもの、得たいと思うもの、生きられると思うものは、全て私を拒んだものと結び付いてしか、この世界にあり得ない。それらは、隅から隅まで私のものではない。私から奪われたものであるしかない。もうそうなってしまって、決して元には戻らないのだ。おぞましい。目を背けたい。だから、こうしてどうしよ

うもなく、ただ書く事くらいしか出来ずにいるのだ。

しかし目を背けていられるなら、書く事は、取り敢えずの逃げ場所にはなるか。しかしそれが都合のいい逃げ場所だと自分で気付いてしまえば、それはもうそうでなくなる。それも奪われるしかない。私はただ奪われるしかない。何処へ逃げ込もうと、私の得たいと思うものから、私は容赦なく拒まれる。それはもう、決して私のものではないのだから。

それでも時々何か良いものが、私に近付いて来るようであるのは、それが私から決定的に奪われている事を、私に思い知らせるためでしかない。良いものを一切忘れて、ただ悪いものに苦しめられてだけ生きる方が、余程マシだ。いや、そんなものは苦しみではない。失われた良いものこそ、その記憶こそ、たった一つの苦しみの源泉だ。それを思い出してだけ、私は苦しむ。他に苦しみなどない。

それでも結局、他にする事も思い付かず、こうしてただ、紙をインクで汚してゆく。そうして紙の汚れに、ただムダに生き延びた時間が写し取られる。同じ苦しみでも、その生き延びてしまった分だけ苦しみはひどくなる。それでも兎に角、こうして書いている間だけは、私を苦しめる思い出を寄せ付けず、奪われたものと隔たっていられたようであっただけ、苦しみは累積してゆく。その分だけ、何度でも甦る同じ苦しみはひどくなる。その苦しみに、また新たに

初めから苛まれる。
　何時まで耐えられるのか。今でももう、殆ど耐え難い。こうしてただボールペンを横滑りさせていれば、一時的に少しは和らぐのか。しかし何のために耐えているのか。引き延ばしただけ苦しみがひどくなるなら、引き延ばすのを已める方がいいに決まってる。いや、ここでもまた私は、いいに決まってる事から隔てられ、ひどくなるだけの苦しみへと追い立てられる他ないのか。それなら一体、何がこれを終わらせてくれるのか。苦しみの極点を登り詰めろとでもいうのか。そこに死があるなら、それがただ一つの私に残された望みか。それならこの引き延ばしも、その最後の望みへと至る道筋か。
　しかしそれが望みであるなら、それは、そこに至るまでの私を生かすものだ。だから私はまた拒まれる。そのように生きられると思えてしまうと、それは決してそのようには生きられない。それは苦しみに成り変わって、私をより深く傷付け、責め苛む。
　つまり私のやっている事は、ひどくなる一方の苦しみと、その苦しみだけでもダラダラ引き延ばそうという意地汚さとのシーソーゲームか。気力と体力がもつ限りそれを続けて、後には何もない。初めから分かり切った敗北。それでもその道を、ただどうにも出来ず真っ直ぐ進むしかないのか。その道を逸れるために必要なものは、全て私から奪い取られている。それらももう、二度と取

り戻せない。
　死だけが望みである、と言ってみよう。しかし死など疾っくに定まっている。そして望みであるなら、死が望みである事からさえ、私は追放される。これはどういう事なのか。そうして私は、何処をどうさまようのか。
　それでも死に急ぐ事は出来る。死に急ぐのが望みなら、それだけは直ぐにも叶えられる。惨めなだけの呆気ない死と、惨めなだけの引き延ばし。どう違うのか。いや、別にどちらがどうという事もない。どちらもただ、それだけの事だ。
　何をどうしたところで、何一つ変わらない。全てを奪われ、もう生きる事からは何も得られず、ただ停止して、後は死ぬしかない。そんなの、疾っくに決まり切ってる。だからこそ私は、このようにしてしか、いられないのだ。つまりはそれだけの事か。
　続けるか、已めるか、その全く無意味な選択だけが、辛うじて残されている。そうして死を選ぶ事が出来たなら、あっぱれ私は、停止した生に殉ずる事が出来たのだ。或いは、停止した生に逆らわないで、それを終わらせる事が出来たのだ。最期にそう出来たからと言って、つまりはまた、それだけの事なのだが。いや、これも未練を断ち切れたらの話だ。意地汚さを乗り越えられたらの話だ。元々私にその能力が備わっていないなら、その選択さえ、実は残されていない。

どちらの結末が訪れるにしろ、私はそう定められているだけか。で結局、今のところ私は、こうして引き延ばしている。或いは、引き延ばしを強いられている。幾ら無意味でも、死には一つだけ効用がありそうだ。それは、その前に立ち尽くして、こうしてインクを垂れ流して、全く使い物にならない時間を潰せる事だ。こんな私にネタを与えてくれる殆ど唯一のものだろう。

大分紙を汚した。全く愚かな錯覚だと分かっていても、こうして頁が字で埋まってゆくのを見ると、それが何事かであるようにも思えてくる。で直ぐまたそれは、苦しみに変わる。私には、望みを一切絶たれた私が残されているだけだと、思い知らされる。その他の何事かはどれも、私に改めてそう思い知らせるための罠だ。仮に、そんな私から目を背け、他の何かに目を向けたところで、その視線は、よりひどい苦しみを伴って、全てを失った私自身に引き戻されるだけだ。そうしてまた、失われたものが一々思い出されて来て、私は耐え難い思いに駆られる。

だから結局、こんな事をしていて何になるのだ。ただ、逃げるために逃げられずにいるのだ。初めから逃げるのを已めれば、すっかりケリを付けて、さっさと逃げおおせるものを。

何が書けたところで、もちろん虚しい。その時だけの独り善がりの錯覚に身を任せたに過ぎない。いや、そこに何かの望みを抱ける内はそれもいいだろう。

例えばこうだ。「書く事だけは違う。全てを失い、一切の望みから隔たったままでも、書く事だけは出来る。何の望みもなしに出来る、この世でただ一つの事が、恐らくは書く事だ。なぜなら書かれた事は全て空虚だからだ。」疾っくにそんな呑気な夢は覚めた。それでも死ねずに、かと言って、使い物にならない時間とだけ一日中何もせずに黙って向き合う事も出来ずに、机に突っ伏してボールペンを走らせるしかないとしたら、それは何だろう。全く取り留めのない夢のような、或いは、何処に向かう事もない、下らないアイデアかイメージのデタラメな羅列。或いは、そのデタラメだけは、辛うじて何事かであるのではないかと言う錯覚。そしてまた、失われた全てが初めから新たに思い出されてくる、耐え難い苦しみ。

　もう沢山だろう。分かり切ってる。しかし何度その「分かり切ってる」を繰り返すのか。或いは何度でもか。

　私はこんな事を少しも望んでいない。書く事など望んでいない。何も書きたくなどない。この頭デッカチで書く姿の、何と哀れで惨めで不恰好で見苦しい事か。全く無能な生き物だけの振る舞いだ。うんざりする。もしも、一生の内ただの一度も、何も書かず、何かを書きたいとさえ思わずに過ごせたなら、私は絶対そちらを選ぶ。書くのが好きでも、書きたい事がある訳でもない。それなのに書くしかないのは、それなのに書くしかないところから、抜け出したい

からか。それで書き始めたのか。そうに違いない。書く人間になりたくなくて書いている。滑稽だ。

滑稽で済むか。事態は悪化している。書けば書くほど、書かずにいられなくなってしまう。しかも書かずにいられなくなる程、書けなくなる。

いやそうではない。全く違う。書く事など全く取るに足らない。書けても書けなくても大した事ではない。私を追い詰めるのは、もっと別の事だ。書くしかないところに私を追い遣ったものが、更に追い打ちを掛けて来るのだ。それで私は、愈愈書くしかなくなり書けなくなり、辛うじて書けたところで、書く事の無力、その書いていた間だけ、失ったものを忘れていられたような錯覚に陥っていられたに過ぎないのを思い知らされ、またそれに打ちのめされる。その私の無力を、出来もしないのにどうにかしようとして、また書くしかない。つまり私は、そういうまるで馬鹿げた堂々巡りに囚われてしまって、そこから抜け出せなくなっているだけだ。まるで書けなくなれば、それに替わる何かが、やはり引き延ばしのための堂々巡りを、私にさせるだろう。そこでケリを付けない限りは。それが一応の結論か。何にもならない。

もう何もない。一度失われたものは二度と戻ってこない。そこから何を書いたところで、徒労でしかない。書く事は、意地汚い引き延ばしの手段でしかない。後は何時どのように、それが終わるかだ。いや、どのように終わるかに迂

闊に意味など求めたところで、デタラメの羅列と同じ、おめでたくも馬鹿げた錯覚でしかない。何時終わるかなら、早い方がいいに決まってる。苦しみを引き延ばして、ますますそれを耐え難いものにして、それでどうなる。（二〇〇一年四月十七日）

＊　　＊　　＊

居残る

ただあなたに逢うためにと、私は毎日を生きてきたのでした。それに気付いてから私は、全く見通しの利かない真っ暗な夜の道を、何年間も歩き続けたようでした。そのあなたが誰か、世界でただ一人、あなたと呼べる人である以外、何も分かりません。それともそれで、もう十分でしょうか。何も知らなくてさえ、ただ一人の人と分かるのですから、もうこれ以上の事はなく、私達が分かち難く結ばれている、何よりの証しでしょう。

その人の姿形から声から性格から考え方までを知り尽くして、その上で親しく交わって、その心の中までを直ぐに察する事が出来るようになっても、それはただそれだけの事で、その人の何を知れた訳でもなく、少しの係わりも結べ

てはいないのです。

　さて、真っ暗で全く見通しが利かないのですから、ただ体が向いている方へと、真っ直ぐに進むだけです。それでも、何一つ私の前に立ち塞がるものはなく、何かにぶつかる事も躓く事も、ただの一度もありませんでした。或いは私は、小さな闇に閉じ込められたまま、その中で一度も地に足を付けずに、ただ手足を交互に振って、歩いている積もりになっていただけでしょうか。ただそれでもきっと、私は前に進んでいたのです。その私の歩みを止めるものに、遂に行き当たれたのですから。

　それは星明かりに微かに照らされた東向きの小さな窓で、夜中なのに開けっ放しでした。難なくくぐり抜けて、私はあなたの部屋に入りました。あなたは留守でした。寝床と小卓と流し台だけでもう一杯の小さな部屋で、私は長旅の疲れが一気に出て、寝床に倒れ込んで意識を失いました。

　あなたが帰って来た頃には、もう外は明るいようでした。あなたは手酌で水を一口、不味そうに飲んで、そのまま寝床に倒れ込みました。私は名乗る間もなく、寝床から転がり出ました。私にはあなたの居るその部屋は、とても窮屈でな耐えられず、直ぐに東の窓をくぐって外に出ました。そうしてあなたが目を覚ますまでを、色々あなたの事を聴いて回りながらでも、外で過ごす事にしました。

直ぐに分かったのは、あなたが私の名を名乗り、すっかり私に成り代わっているのは、年恰好から何から、私達は少しも似ていないのに、あなたが私である事を疑う人は誰も居ないのです。いや私でさえ、話に聞く限り、何から何までであなたは私でした。私に少しも似ていないあなたこそ私なら、私は私ではないのでしょうか。私は何でしょう。実際何が私であるかを良く見極めて、どちらが私か、ちゃんとはっきりさせるべきでしょうか。

　しかし私にしてみれば、私が生まれた時からずっと私であったものが、私であるしかないでしょう。それについて憶えている事の全てが、私に思い描く事の出来る私であるしかないでしょう。そして、話を聞く程、そっくりそれが、あなたのものであるとしか思えないのです。

　また或る人から、訳知り顔に、こんな話も聞かされました。あなたが私を名乗るようになったのは、それ程古い事ではない、ほんの何年か前だと言うのです。もう少し詳しく聞くと、どうやらそれは、私があなたに逢おうと、この身一つで真っ暗な道に踏み出したのと同じ頃でした。どうやら、あなたがそれを、どのようにか知ったに違いないのでした。

　そこであなたは、ただ待つだけでは駄目だとでも思ったのでしょうか。私もあなたも互いを全く知らないのです。私はあなたを、あなたは私を、他から見分ける術を何も持たないのです。それでは幾ら私が真っ直ぐあなたに近付いて

も、後一歩で行き違いになってしまうかも知れません。そうならないためにあなたは、私を名乗り、私の注意を惹こうとしたのです。私の他に、私の注意を惹けそうなものを、あなたが持ち合わせている筈はありませんから。もちろんあなたは私を知らないのですから、あなたは自分で知らない内に、そうしていたのです。

　そう言えば、私があなたの部屋まで辿り着けたのも、その日その日の風の匂いや、昼間の光の具合の中に、昔それを肌身に感じた事があるような親しみを見出しては、夜の歩みの確かさを信じられたからではないでしょうか。つまり、あなたを求めての旅は、私自身の感覚にぴったり来るものを手繰り寄せての旅でした。そして私にそれが出来たのは、あなたがそのようなものを、私に向かって、届けようとしてくれていたからに違いないのです。

　しかし、遠く離れた私に届く程に、あなたが私であるようなら、或いは、そうしてもうすっかりあなたが私なら、私はもう、そんなあなたに逢わなくていいのかも知れません。逢えば、私が二人居る事になって混乱してしまいそうです。あなたは、私があなたに逢いに来るのを知って、すっかり私になったのですから、あなたはもう私に逢う望みを叶えたのではないでしょうか。このままあなたは、ずっと私を待ち続けて、私になって生きてゆけばいいのです。私はあなたに見えないように、ずっとあなたの側に居て、あなたを見守っていてあ

げましょう。幸い、私が私である事に誰も気付きませんでした。私は今、きっともうあなたになって、部屋で寝ているのです。

　正午過ぎに部屋に戻ると、あなたはもう起きていて、自分で作ったものを独りで食べていました。私はまた窓をくぐって部屋に入り、窮屈なのを我慢して、あなたの直ぐ前にしゃがみ込みました。あなたは少しも気付いていないようです。しかしあなたの顔はすっかり影の中に沈み、表情は全く読み取れず、ただ額に窓からの光が当たって、その輪郭を浮き立たせているだけなのです。そのじっと動かない白い輪郭から、私は、昨日あなたに起こった事を、読み取る事が出来ました。

　あなたは昨日、もう私と逢っていたのです。昨日のあなたは、朝から、心身共に、これまでになく充実していて、この世界を隅から隅まで見て取れるように感じられる程でした。別に私に遭える予感はなくても、やはり何か、この同じ世界にずっとありながら、ただ見過ごして来ただけの素晴らしいものを見付けて、それをそっくり掴み出せそうな気はしていました。

　そしてあなたは部屋を出て、忽ち私を見付けました。私もまたあなたの事は直ぐに分かりました。初めて逢うのに、私はもうそこで「あなた」と呼び掛けていました。そのまま私は、あなたに向かって話し続けました。あなたに逢おうとするまでの私、あなたに逢おうと思った私、長旅での色々な出来事、それ

らが独りでに、流れるように私の口を付いて出て来ました。あなたも、まるでそれらをずっと前から知っていて、ただそれらの記憶を心地良さそうに辿り直しては、それを一々鮮やかに甦らせるようにして、聞いているようでした。

　そうしてあなたはすっかり私を受け入れ、私はあなたと一つになりました。そのあなたは今、私の直ぐ後ろで私に優しく寄り添ってくれています。私を守るためにだけ、生きていてくれます。ずっと私の求めて来たあなたです。何も加わらず、何の欠けるところもなく、全く私のあなたであるだけのあなたです。

　それが全てでした。いや、どうしてそれが全てでない事があるでしょう。しかし、もう一人のあなたが居たのですね。その時は全く気付きませんでした。そうです。すっかり私になったあなたです。或いはそれはもう、あなたではなく、すっかり私自身であると言って構わないのかも知れません。その私であるあなたは、あなたと私が完全に打ち解けるのを、直ぐ傍らで、ただ眺めているだけでした。そうして、この私を、すっかりあなた自身に持ち去られ、何も出来ないまま、私の目に一度も留まらないまま、独り取り残されてしまったのです。

　そうして、その私であるあなたは、私である事もあなたである事も出来なくなってしまったのですね。私はあなたに奪い取られ、あなたは私と一つになって何処かに行ってしまったのですから。それから、自分が何でもなくなった事

に気付いて、一晩中、あなた自身の私らしきものを探し出そうと、歩き回っていたのですね。

　その間私は、あなたに導かれるままに、あなたの部屋に入れてもらい、あなたに抱かれて眠る事が出来ました。

　一方、残されたあなたは、白み始めた東の空にゾッとして、終わってしまう夜を恐れ、逃げ帰るように急いで部屋に戻り、そのまま寝床に倒れ込んだのです。

　そうして、三つ四つどろりとした夢の上っ面を梯子したような後に、うっかり目を覚ましてしまっても、自分は一体何を待っていたのか、何を求めていたのか、何を求められていたのか、それらがただ空っぽの頭の中を回って、止まらないだけのようです。ただ、もう誰も自分には逢いに来ないし、自分で勝手に誰かを待つ事さえも出来ないとだけは、分かっているのでしょうか。それを認めるかどうかは、また別にして。

　そうして私から見ても、今部屋で、自分の淹れたお茶を啜っているこの誰かさんは、もう私でもあなたでもありません。どうやらこの誰かさんは、独りでずっとここに居残るようですが、誰もそれをどうにも出来ないでしょう。私はここにこうして居て、あなたは私の直ぐ後ろに居て、私を見守っています。これが私とあなたの全てです。

私は、昨日までこの誰かさんの中に居たあなたと一緒に、私達に相応しい場所を求めて、ここを出て行きます。ずっと待つだけだった二人に、さようなら。これからもずっと誰にも逢えないままの、私であったりあなたであったりした誰かさんにも、さようなら。でも声は届きませんね。（二〇〇一年四月十九日）

＊　　＊　　＊

篭

夜、鍵など掛けない。眠れないならせめて、間違いでもいいから、勝手に運送屋が上がり込んで来て、何か荷物でも置いて行ったらどうだ。目障りで、邪魔になって、どうしようもないようなヤツ。

上から下まで白い紙で包まれた、細長い大きな箱が、部屋の真ん中に柱のように突っ立っていた。そのつるつるした包装紙を鷲掴みして、頼みもしないのに、誰かがびりびりと破り取った。中に箱はない。換わりに空気がそこだけ細長く窪んでいて、中に若い女が嵌め込まれている。肩を窄めて、目はとろんとして、唇を半開きにして、少し顎を上げ、何をされてもされるに任せてしまいそうだ。その脇に、赤毛の小柄な中年女が蹲っていて、腰を痛めて立ち上がれ

ないと、声を潜めながらも激しい口調で、盛んに言い立てている。

　若い女の足元に、暗い雲のような影が延び、その左足の甲を舐め、踝から脹ら脛まで舐め上がったが、膝頭で躓いた。みるみる白くなって、縦に脹れて伸びら上がった。そうして、窪みのほんの狭い隙間は、粗方その白いもので埋まった。ぴったり寄り添って、女を抱き締めるようだった。女は少しだけ、窮屈そうに体の向きを変えたかも知れない。それきりで、何かを待っているようだった。直に白いものは消えた。

　直ぐにまた、同じ影が左から足元に来る。今度はそれは、剥き出しのほっそりした腿まで一気に舐め上がる。女は軽くそれを左手で払った。影はパチンと音でも立てるように白くなって、女の手を握り損なって、仰け反るようにして消えた。若い女は、中年女に洗面器を持ってきてくれと頼んだ。

　中年女は四つん這いで、流し台までを往復し、水を入れた洗面器を、震える腕を伸ばして若い女に差し向けた。若い女が、左手を水に入れて指と指を擦り合わせると、白い汚れは全て水に落ちた。しかし手を拭くものがない。女は手を振っては指を弾いた。水滴が女の腿に何滴か付いた。中年女が手を上げて、それを自分の指で拭こうとすると、若い女は少し微笑んだ。それを拒絶の合図と取った中年女は、手を下ろし、ただ水滴を見詰めた。暫くして、乾いたが白い粉が残っていると、若い女の顔を見上げて、中年女が言った。若い女が手で

払うと、粉は一度で全て取れた。

その脚を踏み出して、若い女は窪みを出た。篭を抱え、棚の方に向かった。窪みの左右から、すかさず黒い服の二人の男が現われ、大きな一枚の黒い紙で、窪みを覆っていった。黒い紙は、上げ下ろしされる度に、震えて鋭く唸った。下からまた影が伸びると、そこだけ黒い紙は灰色の煙を出した。男達は包んだものを上下逆さまにした。影が来て煙を出した。男達は、一度包んだ黒い紙を剥がして裏返し、それでまた窪みを包み直した。影が来ると、紙は下から溶けて、苦い匂いを立てた。紙はあちらこちら爛れたような穴が開き始め、上下逆さまにするだけでも、男達は扱いに手間取った。影が来てまた紙を溶かした。紙は形を失い、凋んでいった。男達はそれを両手で掴み取り、一つに丸めた。その間も、紙は溶け続けて、粘り気を増し、男達の腕は、それがこびり付いて真っ黒になった。人の頭三つ分くらいの塊になった。それを両方から持って、男達は若い女の方に向かった。

若い女は、篭を胸に押し付けて、右腕だけで抱えていた。左の肘を篭の縁に乗せ、頬杖を付いて、立ち尽くしていた。男達が黒い塊を篭に入れる積もりだと察して、慌てて走り出した。男達は追って来なかった。彼らは全く走れなかった。

女は、まん丸い池の畔に出た。池の上の空中で、何かが女を見ているような

気がした。それが女を、池から離れられなくさせた。女は池をぐるぐる何周もした。女を見ている何かが、目を回し始めていた。女は思い切って篭を捨て、腕を振って、笑いながら池の周りを走り出した。池の水が少しずつ渦を巻き出した。それに連れて、女を見ている何かが、少しずつ降りて来た。そのままなら、直に池に落ちる。女は期待した。しかし足が疲れた。早足がやっとだ。女を見ている何かもそこで止まって、女はそれに睨み付けられているようで、急に嫌な気分になった。

辿々しい足取りで、男達がやっと追い付いて来た。男達は、黒い塊を池の中に投げ込もうとした。草叢から、痛めた腰を折ったままの中年女が飛び出して、男達にしがみ付いた。三人は暫く組み合った。男二人にしては、腰の悪い小さな女に手こずり過ぎだ。男達は、走る事が出来ないように、組み合うのも苦手らしかった。ただ赤毛を掴んで、押し返すだけだ。その内に、三人の体の中で揉まれて、黒い塊はグジャグジャになって、三人は重油でも被ったようになった。

池の水が荒れだした。それにも増して、若い女を見ている何かは、猛スピードでデタラメに飛び回らずにはいられないようだった。若い女は、呆れたような顔でそれを見ていたが、放り出した篭を思い出し、それを探す事にした。そうしている間に、三人を真っ黒にしたものは、少しずつ乾いていって、三人は

真っ黒で絡み合ったまま、固まって動けなくなった。池の水はすっかり収まって、澄んだ緑色のゼリーのようだ。

　若い女はやっと篭を見付け、ついでに石を拾って池に投げた。石はポンポンと跳ねて、池の表面に乗ったまま止まった。それを見て女は、篭を持って池の上に乗った。歩く度に、池全体の弾力を感じ、女の体は小気味よく上下に揺れた。女はまた嬉しくなって笑い出した。しかし池の真ん中に近付くに連れ、急に体が沈みだした。戻ろうにも、角度の付いた池の表面はつるつるで、足が滑るだけだった。結局、池の真ん中へと進むしかない。ますます体は沈んだ。そして遂に池の真ん中の、円錐形に鋭く落ち窪んだ中に、揃えた両足をきつく締め付けられて、「気を付け」の姿勢で一歩も動けなくなった。目の前は緑一色だった。

　女は、篭を足の下に敷く事を思い付いた。そのようにして篭の上に乗ると、大分体は浮いて、ぎりぎり池の縁が見えた。足を折って、無理矢理下半身を篭の中に畳み込み、両手でゼリー状の表面を掴んでは、何とか前に進もうとした。全くムダだった。もう篭からも出られなくなって、どうにもならなかった。

　女は真上を見上げた。こんな時こそ、自分を見ている何かは、自分を助けるべきではないか。眉を顰め、天頂を睨み付けた。そこはポカンと白っぽいだけだった。声が聞こえたような気がして、空から目を落とすと、ぐるりと池を人

が取り囲んでいた。誰も黙ってじっとしていた。

女は喜んで、猫撫で声で彼らに呼び掛けた。それが合図でもあるかのように、彼らは顔も体もどんどん黒くなって、ただの影になって、溶けて繋がって、池の周りに影の囲いが出来た。その分池は、暗く冷たくなっていく。女は思い切り叫んだ。これら全てを、切り裂かずにはいられない。そのためには叫ぶしかない。

影の囲いは、その叫びを外に漏らすまいとするかのように、震えながら、却って高くなっていった。その様子が、何か慌てているようで、女を面白がらせた。もう一度今度は嬉しそうに、念入りな隙のない叫びを上げた。影は伸び上がり、伸び上がる程、それは滑稽な感じでプルプルと震えた。女は甲高い声を途切らせないまま、長く笑った。

影も、もう止まらなかった。震えているかどうかも分からない程に高くなり、空は、遙か上の丸の中に、ぽっかり見えるだけになった。空気がどんどん冷たくなって、女は腕をさすった。ふと前を見ると、影の囲いの直ぐ向こうの草叢が透けて見える。影は薄くなっている。このまま影が伸びて、遂には風船が爆ぜるように、影も弾けて消えるのではないか。

しかしそれは何時の事か。その前に凍えてしまいそうだ。女は体を上下に揺すった。篭ごと、体が少し跳ねたような気がした。続けていれば、トランポリ

ンのように体を跳ね上げられるだろうか。しかし続ける程、逆に弾力は失われて、疲れるだけだった。先ずは息を整え、どうしてこうなったか、考えてみた。何も浮かばずに、また空を見上げた。

するとその小さな丸い空が、目のようだった。表面が涙で覆われていて、池も草叢も女の姿も、その中に確かに映っていた。それはあの、女を見ている何かに違いなかった。やっと正体を掴めた気がした。こいつの正体を掴むために、こうならなければならなかったのだ。

女は納得がいった。しかし動けないのには納得がいかない。そう思いながら、首の痛いのを我慢して、顔を真上に向けたまま、ただただ、天空の目の瞳の奥を覗き込んだ。

どれ程そうしていたか分からないが、女はその瞳の奥に、何時からか、黒い塊が動いているのを見付けていた。それは、溶けるようになっては、少しだけ脹れるようだった。暫く固まって、また溶けるようになって、脹れた。そして、溶けた時のドロドロした感じが見て取れるまでになると、その繰り返しの勢いが急になった。目そのものが、グリグリした丸みを見せ付けるように、どんどん大きくなって、迫ってきた。もう止まらない。途轍もなく重い目玉が、真上から落ちてくる。

取り囲んでいた影が、一瞬の内に飛び散ったようだった。女は物凄い風圧を

感じた。ゼリーの底から、ロケットになって打ち上げられたのではないか。しかし全てが収まってみると、それ程でもない。彼女はただ真っ平らなゼリーの上で、篭に嵌まって、ふらふらと揺れていた。脚を抜くのに何ケ所か擦り剥いたが、何とか篭から解放され、痺れた足でよたよたと歩き出した。裸足の裏に、池の表面の、生き物のような温かみが感じられて、女は嬉しくなった。それでも笑うのは控えた。

池の外に出ると、赤毛の中年女が、死んだように横向きに倒れていた。その体の何処にも、黒いものは見当たらなかった。二人組が草叢から飛び出してきて、荒い息遣いで若い女を押し倒した。その間中、それでも女は一言も声を上げず、されるに任せた。（二〇〇一年四月二十三日）

*　　　　*　　　　*

綺麗

そのガラス瓶は、空気より透明で、ぴかぴかに磨かれた腹を、でっぷり脹らませている。大きさはよく分からない。柄が取れて刃だけになったナイフが、その中を回っている。色も形も大きさ

も、どれもそっくり同じようだった。数えてみると、五つまでは数えられる。それなら瓶は、それ相当に大きい。ナイフは、概ね等間隔に、水平の同じ軌道を、互いに触れ合わずに回っている。ヒュンヒュンと空気を切る、水平、規則正しい音だけが、ガラスを突き抜けて、周りに響き渡る。

　ナイフの刃が増える。水平だった一つの軌道が、細かくぶれる。ナイフの刃が増える。等間隔が怪しくなって、音の響きに、細かなざわめきが混じる。ナイフの刃が増える。それぞれが、まちまちな角度で回りだし、それぞれ違った形に見えてくる。刃の数を数えてみる。まるで数えられない。ほんの一瞬しか目で追えない。その飛び過ぎる姿を捉えるたびに、目を切られるようだ。

　ナイフの刃が増える。まだ増えるのか。まだまだ増えるのか。どれだけ入るのか。しかし、どうせ数えられないなら、見る方とすれば同じ事か。また増えた。いや増えていない。では減ったのか。何かが消えたように、見えなかっただろうか。増えるようにばかり見えていたが、途中から減っていたとしたら。取り返しの付かない過ちを犯した気がしてくる。

　新しく加わる姿は、見やすい。しかし消える方は、どのように見えれば、それが消えたのかも、よく分からない。ただ新しく加わったのでないなら、そのように見えた何かの変化は、消えた事によるのでしかなさそうだ。

　そんな事を思って眺めるガラス瓶は、何処か物足らない。刃はもっと速く回

らないものか。速く回れるのではないか。速過ぎて何が困る。風圧に捩れて、ねじ曲がるのか。いや、もうねじ曲がっている。そればかりか、ずっと薄くなって幅を拡げて、ヒラヒラと風に舞うように、好き勝手な回り方で回っている。ぶつかる事など気にせず、ただひたすら速く空気を切る事だけを思って、回っている。しかもそれで少しも触れ合ったりしない。これでいいのか。これで、私の思い通りになっているのか。それとも、まだ何か足らないか。

　空気を切るそれぞれの音が、絡み合い、擦れ合い、転がり合って、ガラス瓶を突き上げる。グリグリと盛り上がって、風さえ起こす震えが、ガラスの表面を走っている。

　それが何だ。数が全然足らない。なぜ増えない。この速さでもう、次のナイフが入りきらないのか。幾ら待っても、もう何も変わらないのか。どうやら、ずっとこのままのようだ。

　ナイフを増やしたい。そのために、瓶の腹をもっと脹らませたい。瓶は小さ過ぎる。こんなに小さくて、何が出来る。もっと脹れろ。割れるなら、割れただけだ。空気を押し込めろ。

　その空気が悪いのではないか。空気が濁ってる。使い物にならない。そんなものを、幾ら詰め込んでも、ふにゃふにゃと縮まるばかりだ。ガラスよりも、もっと透き通った空気に替えるべきだ。そんな空気がないなら、兎に角先ず、

瓶を膨らますのだ。空気は後から来るだろう。

瓶は膨らんだろうか。少しだけナイフが、小さく見えていないだろうか。それならもっと速く回れる筈だ。速く回らないなら、数を増やせ。するとナイフは増えてゆく。増えて、ガラス瓶の腹は膨らんでゆく。破裂したって構わない。腹が破裂する。

破片は全て、外に向かって飛び散ったようだ。ナイフの刃は回り続けている。すると、そのナイフと飛び散った筈のガラスの破片を、全て中に詰め込んだ、さっきより一回り大きいガラス瓶が、同じ所に見えてこないだろうか。中はガラガラだ。ナイフの数がどんどん増える。ガラスの破片はそのままだが、みるみるナイフの刃に砕かれて、細かくなってゆく。殆ど粒になる。粒と言っても、どれも薄く鋭く尖った形で、ナイフよりずっと細かく空気を切る。その音は、一纏まりになって、何処かずっと遠い所から微かに響いて来る。

ナイフはまだまだ増えて、瓶の腹が膨れ出す。膨れなくなって破裂する。ナイフとガラスの刃が、回り続ける。そこにまた、新しいガラス瓶が、割れたばかりの新しいガラスの破片までを包み込んで、出来てくる。

私はその隙を捉えた。飛び込んで、瓶に入った。私はナイフだった。空気とガラス片を切った。切って切って、少しも飽きなかった。周りが窮屈に感じられて、またスカスカになった。瓶が割れたに違いない。急に新しい空気とガラ

ス片が来て、それをまた、回りながら切った。また一杯になって、また瓶が割れたようだった。

　すると私は、新しいガラスの破片だった。歪な形からして、瓶の首から肩に掛けての破片のようだった。ナイフの刃に次々に激しく当たられて、砕けて粉々になってゆく。しかしそれで、私がバラバラになる訳ではない。歪な破片の方が、余程バラバラのようだった。私は、瓶の中の隅々にまで満ちて、却って、びくともしない一つきりだった。飽くまで私はガラス片だったが、細かくなり過ぎて、瓶の中の空気に溶けたようになっていた。まるでその空気が私のようだった。

　そんなようになってしまうと、私の丸ごとの全身は、回り続けるナイフとガラスの粒の刃に、少しの余すところもなく、何時までも切り裂かれてゆくままになる。切られても切られても、細切れのまた細切れまで切り裂かれて、まだ切られても、少しも飽きなかった。何時からかずっと、この時を待っていたのではないか、とさえ思えた。

　見回すと、ガラス瓶は何処にもなかった。ナイフだけが飛び回っていた。私もぐるぐる回っていた。いや、私だけは回っていない。いや、回っている。但しナイフの刃の逆方向に、全てのナイフを受け止められるように身を開いて、ゆっくりと回っていた。すると私は、空気などでは、まるでなかった。

私は、骨に肉を付けて血を通わせた、生きた物だった。その自らの姿を確かめようとすると、私は宙に舞っていた。ナイフが一斉に私に突き刺さってきた。どこもかしこも、その突き刺さったナイフで、私の姿はすっかり覆われた。血の一滴もこぼれなかった。私の全ては、その数え切れない数のナイフの一塊の中に閉じ込められた。どのナイフも、まだ進めるなら幾らでも中に進もうと、刃と刃をギリギリと迫り合わせた。それは時を追って激しさを増し、刃と刃の擦れ合う無数の音が、びりびりと空気を震え上がらせて、その空気がそのまま金属になってしまいそうだった。

　金属になった空気を見て取れたと思えた瞬間、ナイフの塊は何処か一ヶ所、バランスを失って、一気に崩れた。ナイフはバラバラにばらけて、ガチャガチャと打ち合って、またゆっくりと回り出した。みるみる数を減らしながら、速さを増し、それ以上速く回れないのか、そこで安定した。またガラスの膜が出来ていった。

　その新しいガラス瓶の中に、私は居なかった。血や肉のようなものは、瓶には入れないか。それとも入れても、直ぐに蒸発してしまうのか。ナイフも何処か違っていた。回り方がおかしい。瓶の空気の内へ内へと、切れ込んでゆくように回る。それに連れて、瓶も、内へ縮まろうとするようだった。

　ガラスは直に割れた。膨らむ力には強くても、縮む力には弱いのか。ガラス

は、数えられる程の大きな破片となって、飛び散る事もなく、その場でどれも、踊るような動きをした。それにナイフが当たる度に、妙にか細い響きが鋭く伸び上がった。

　ガラスの破片は、砕かれるどころか、逆にナイフの刃をこぼれさせた。そうしてナイフが勢いを失うと、ガラス片は一斉に、それを眺めている私に向かってきた。私の体は、血を噴き上げてバラバラになった。その数えられる程の幾つかの肉片に、刃のこぼれたナイフが一斉に突き刺さった。忽ち肉は、ナイフの刃の中に隠れされた。それぞれが、持ち上がって宙を回り始めた。それらがまた、新しいガラス瓶の中に収まると、ナイフは、さっさとばらけた。何も出てこなかった。私の体は綺麗さっぱり消えていた。

　そのガラス瓶が宙に浮いている下で、私は転げ回っていた。一分の隙なく、私の体にはナイフが突き立てられ、ハタから見れば、脹れた頭と脹れた胴体と脹れた手足を持った、全身、金属の、ギザギザの輪郭の人の形だったろう。転がるたびに、ナイフは私に食い込んで、その食い込んだだけ私は、無数のナイフどもに、きつく締め付けられた。私は、頭を振り、腕を振り、脚をばたつかせた。或いは、そうした積もりになっていただけで、殆ど身動き取れなかったのかも知れない。

　そんな私が、どうした弾みでか、跳ね起きるようにして、立ち上がれた。両

腕を振り立てて、ガラス瓶を叩き割った。

突き刺さっていたナイフが、一斉に私の体を突き通って、そのまま真っ直ぐに飛び去った。そこへ、数えられる程の大きなガラスの破片がやって来た。私の体は、既に無数のナイフによって細切れの筈だが、なぜか、その細切れのまま、人の形を崩さずにいられた。そうしてガラスの破片を次々に抱き締めると、私の体は数えられる程の、幾つかの肉の塊に切り分けられた。もちろんどれも、細切れを積み上げて出来ている塊に違いない。

そのそれぞれに、ナイフが一斉に突き刺さる。直ぐにどれもナイフで覆われる。金属の丸い塊が、幾つか転げ回っているように見えた筈だ。しかし、刃と刃の重なりは何処か狂っていて、直にバランスを崩し、ナイフはばらけてしまう。その度に肉も細かくばらけ、そのそれぞれにまた、ナイフが一斉に突き刺さって、また崩れて、また肉がばらける。

そうして全ての血が流れて、私はまた、一つきりの私になった。

私は、回るナイフを見詰めていた。それらはもう、瓶の腹を脹らます事も、縮ませる事もない。そして私は、何時でもそこに入って行ける。瓶の中で、私の体は、みるみる細かく切り分けられてゆく。瓶の中なのに、私の血と肉と骨は、もう蒸発したりしない。ただ決して瓶の内面には触れず、ゆっくりナイフに逆らって回り続ける。

そうして私の体は、もうすっかり粉々で、瓶の中の空気に溶けたようになって、瓶と同じ形の、一つきりになる。待っていたかのように、何の力も加わらないのに、瓶は独りでに静かに割れる。空気のようなまま、私は数えられる程の幾つかに、切り分けられる。その切り分けられた形がどれも、私には、どうしても気に入らない。もっと綺麗な形になれた筈だ。

直ぐにまた、無数のナイフが突き刺さって来る。私は空気のようなだけだ。ナイフはただ、互いにぶち当たって激しく火花を上げ、空気の私を吹き散らかして、飛び過ぎるしかない。

そして、そこでまた私は、一つきりの私になって、ナイフが回るガラス瓶を眺める。ナイフに吹き払われる直前の、不恰好に切り分けられた自らの形だけが、頭に残る。もっと綺麗な形がある筈だ。私は、気に入った形が見て取れるまで、何度でも遣り直さなければ気が済まない。

ほんの一瞬の形なのに、どうしてそれ程、こだわるのか。この先まだ、どれだけ私は、ナイフに切り裂かれなければならないのか。（二〇〇一年四月二十五日）

＊

＊

＊

納得

　まだ新しいから建物も綺麗で、しかもすごく大きくて、だからみんな、明るくて大らかで裏表なんかなくて、今のところ私はここが好きだ。だからここに居る。やりたいようにやらせてもらって、毎日、楽しい。
　ちょっとした空き時間で、先輩のイカレた身の上話を聞かされて、お腹が捩れた。椅子からずり落ちそうになって、ついでに今の内に、トイレに行っておこうと思った。天井の高い長い廊下に出ると、誰も居なくて、何一つ動くものがない。全く静かで、おかしかった話が、すっかりありきたりになった。
　用を済ませてトイレを出ると、ガラスに映るぼやけた人影を見付けた。こっち側は白い壁だが、反対側は、殆ど床から天井までガラス張りで、噴水のある広い庭が見渡せる。もう暮れかけていて、その暗い中に、天井の小さなライトを背中に受けた、ほっそりした逆三角形の人影が浮いていた。ガラスの角度のせいか、床ごと、つんのめっているように見える。
　その顔が私を見ていた。ちょっと離れた所に、やっぱり前のめりの、ほっそりした私の影もある。トイレのご婦人用の標識の赤い女の横顔を、漫画の吹き出しのように乗っけて、少し二重になって映っている。多分、先ずその人が、その私の影に気付いて、その視線を感じて私も、その人の影に目が行ったのだ。

影でないその人を見付けた。柱の脇の灰色のソファーに、前屈みに浅く掛けていて、影よりずっと近い。今度は私が先に見付けた。その人は、その私の視線を直に感じて、影でない私の方を見た。何だかおかしい。つい笑ってしまう。静かすぎて、廊下の奥の方へ声が響くのが、自分でも聞こえる。その人も、軽く私に微笑み返してくれた。でも直ぐに俯いて、細長い暗い横顔を見せた。私と違って、ここに居たくなくても、居るしかなくて居るかのようだ。

そう思うと、急に私は、自分の姿がその人にどう見えているか、分かるような気がしてくる。

その人から見た私は、他は何時もの私だが、髪だけは金髪で、とても長くて、量も多くてモリモリしていて、それがずっとトイレの中まで続いている。その金髪の私は、トイレの前の青い床はもちろん、壁や天井まで、裸足で走り回れる。足の裏に吸盤は付いていないが、吸盤の付いた動物の鳴き真似をしながらだったら、逆さまでも、幾らでも走れる。いや、私はもう天井を突き破り、空中に弧を描いて隣のビルに乗り移り、そのまた隣に乗り移り、その屋上のマンホールから落ちて、そのビルの中の、吹き抜けの広い空間を埋めている人だかりを、汗をかいて掻き分けていた。真っ赤な高いヒールを履いていて、周りの人の足を踏み付けては、長く伸び上がる悲鳴を次々に上げさせた。その悲鳴が絡み合って渦を巻いて、行き場をなくしてドーム天井を転げ回った。それを頭

一つ突き出して見上げていた、背の高い、兎のような目をした銀髪のおじさんの車に乗って、舗装されていない山道をくねくね登って、展望台に夜景を見に行った。ただ、そこまで行っても、金髪は幾らでも伸びて、その先端は、ずっと、ここのトイレの中に隠されたままだった。

しかし、その私の姿は、その人が私と目が合って微笑んだ、ほんの一瞬だけのものだった。その人が俯いてしまうと、トイレの前で、何を待つでもなく、つまらなさそうに立ち尽くしていた金髪の私は、くるりと背を向けて、またトイレの中に戻って行った。さっき私が用を足したばかりの便器の中に吸い込まれていた。動き回るどころか、そっちに引っ張られて行くしかない。もう普通に立ってもいられなくなって、便器の直ぐ前で、愈愈私は、便器の穴の方に頭を向けるしかなくなった。そこでやっと私は、その金髪に触れた。それは髪にしては硬くて、ロープのような感触で、それに力付けられて、私はそれを強く掴んで、引っ張り上げるようにした。

ゴーゴーと水が流れる音がして、穴の中から濡れた金髪の先が躍り上がり、水滴を撥ね散らかした。それが垂直に伸び上がったかと思うと、そこに全身金色の素っ裸の女が、片足を便器の縁に掛けて、私と真正面に向き合った。特にその腰の辺りなど、私よりずっとほっそりしていた。もちろん豊かな金髪で、その髪の先に私が居た。つまり私とその女は髪を共有していて、その髪で引っ

張りっこをしているようなのだ。私の髪もまだ金色のままだったが、相手の金色の体に比べると、制服姿の私は、何か黒々としたつまらないもののようで、金髪は全てその女のもので、その髪の先に、私という醜いものが、吐き捨てられたガムのように、くっついているだけに思えてしまう。私は面白くないので、指でチョキを作り、その人が見ているのを意識して、目の前の金髪を切り落としてやった。

その人は少しも動じなかった。もう私など眼中にない。女は誇らしげに、私から解き放たれた金髪を掻き上げた。切られてもまだ、髪は床に届きそうな程に長かった。私は黒い髪に戻った。そこに留まるべきか少し迷ったが、どこか機嫌の悪そうな、その金色の顔と何時までも睨めっこしていても仕方ないので、構わずトイレを出て、その人の方を見ないようにして、また廊下を通って、同僚達の居る部屋に引き返した。

そうして仕事の段取りの話になっても、私には、トイレの中の金色の女の動きが分かるのだった。先ず、その金髪だが、直ぐ私の後を追うように、束になって宙に浮いて伸びて、トイレから出てきた。それがそこで、一つ大きく輪を描くと、女が前から目を付けておいた男が現われた。髪の先がばらけて、男の足元に絡み付いた。そうして男を中に引っ張り込んで、自らは便器を跨いで、尻を突き出した。ばらけた髪は、そのままでは邪魔になる。また纏まって、ト

イレの外まで伸びて出た。それは波を打って、次第に激しくなっていった。
もちろんそれは、その人にも見えていた。その人に見えているものが、私にも見える、というのは少しも変わっていない。一束に纏まった金髪の先が、トイレの出入り口の前で、鞭のようにしなって、のたうった。金色ばかりでなく、あらゆる色が次々に、その動きの中に浮き出るようだった。

　今なら誰も居ない。その人はそこまで行って、四つん這いになって、その鞭に打たれたいと思う。しかしそれは許されない。目の前に見えているのに、その人とその金髪とは、どうにもならない程、遠く隔たっている。しかしその隔たりによって、却って、その妖しく波打つ鞭は、ソファーから立ち上がる事さえ出来ないその人の頭の中まで入り込んで来て、その人をズタズタになるまで鞭打つようだった。金色の女が、脳天に向かって絞り出すような、歪な金属を震わせるような声を上げ出した。それは少しずつ調子を変えて、規則的に続いた。それは廊下にまで漏れて出て、その反響は直に私の耳まで届くようだった。全く聞くに堪えない。私でさえそうなのだから、その人はさぞかし耳を塞ぎたいだろう。しかし、その人は前髪を顔の前に垂らして、じっと俯いたままだった。その耳で直に聞けるなら、少しでもその女の声を聞いていたいのだ。それが出来て、その人は嬉しいのだ。しかしもちろんそれは、その人をひどく苦しめもする。やはりどうしても我慢できずに、耳にそっと両掌を当てたようだ。

部屋の、廊下と反対側の小窓に張り付いて、ただ独り私達から離れて、暗いだけの外を眺めていた子が、突然振り返った。誰かその子の事を呼んだだろうか。呼んだのかも知れない。誰かに呼ばれたような顔をしている。すると、トイレの中の女は、男と共に綺麗さっぱり消えた。その間際、男も全裸で、金色の全身の後ろ姿が、瞼の裏に焼き付けられるようだった。

そして、その子はそのまま、まるで何かの踊りのステップでも踏むような軽い足取りで、私達の脇を擦り抜けて、ドアを開け廊下に出て行った。何処に行くかって、トイレしかない。その人はその子に全く気付かない。その人もまた、金色の女が見えなくなっていて、それで頭が一杯なのだ。その人は項垂れたまま首を横に向け、ガラス越しに、暗くて見えない噴水の辺りを見ていた。それでも私には、その子の影がガラスに映るのが見える。その人に見えなくて私に見えるとは、どうした事か。

そう言えば見覚えがない。たまたま部屋に居たから、つい同僚に思えただけだ。部屋に居る子を数えてみた。最後に私も数に入れれば、一人も欠けていない。それならあの子は誰だろう。

あの金色の女の、もう一つの姿ではないだろうか。今の私に、見えないものが見えてしまうなら、決してその他のものではなさそうだ。ではどうしてそれが、あの人には見えないのか。私にはあの人が、ソファーの端で今にも滑り落

ちそうに、蹲るようにしているのまで、確かに見えるのに。
　あの人はもう、あの子と遠く隔てられていて、その姿を決して見られないと思い知らされているのだ。それで見えないのだ。多分そうだ。
　私は、立ち上がってドアに向かった。しかし、ノブに手を掛けられない。私は、ドアの向こうのあの人の姿を見ようとした。すると何も見えない。ただ灰色のドアだけがあった。しかしその灰色が、あの人の考えている事を私に分からせた。
　ただ遠く離れているだけで、その離れている人が、今何処で何をしているか全く分からないのが、あの人には、どうしても納得がいかないようだった。分かろうとさえすれば、それは直ぐに、手に取るように分かって良さそうではないか。そしてそのまま直ぐに、その傍らまで飛んで行けそうではないか。どうしてもそう思える。どうして、そうならないのか。そして、そうならないのは全く自らのせいでしかなくて、その自らを責めているようだった。
　今頃あの子は用を足していて、もう直に、トイレから出てくる。真っ暗な噴水なんか見てないで振り向けば、あの子の姿が見えるかも知れない。だけど私には、それは伝えられない。もし私が、あの人に声を掛けたりすれば、それこそ台無しだ。取り留めのない日常会話に引き摺られて、忌々しい思いをするだけだ。

しかし、どうして私に金髪が生えてしまったのだろう。また大して考えもせずに、それをチョキで切ってしまったが、もしあのまま切らずにいたら、私はあの人に、何かしてあげられただろうか。いや、あのまま睨めっこを続けて、あの金色の女がずっとあそこで股を拡げて立っていたなら、鞭打ちどころか、あの人の脳ミソは、粉々に擦り潰されてしまうのではないか。それとも、それならその方が良かったのか。私はあの人を抱き起こして、その目の前で、チョキで金髪を切ってあげられたかも知れない。しかし、もしそれであの人が甦ったら、私などには目もくれず、切り落とされた金髪が、蛇のように床を這って、トイレの便器の穴に入って行くのを、やはり床を這って、あの人は後を追って行くだろうか。（二〇〇二年四月二十七日）

＊　＊　＊

春

眠ると言う事がどういう事か、私はまだ、分かっているだろうか。もし眠れたとして、体はそれに耐えられるだろうか。拒絶反応を起こして、あさっり死んでしまうのではないか。

何かが欠けている。つまりは、眠るための資格のようなものが。眠るには、ちゃんとした資格が要るのだ。今頃気付いても遅い。資格は何時でも取れる訳ではない。どうも何か変だと思っていた。十七歳から十九歳ぐらいの間の事だ。同じ年頃の者達が、時々連れ立って何処かへ出掛けてゆく。私は何時もそれを独りで見ていた。何処へ行くのだろうとは思ったが、他人は他人で、大して気に掛けなかった。眠るための教習を受けていたのだ。三年掛けて正しい眠り方を身に付け、資格試験に合格して二十歳を迎える。後は別に苦労しなくても、その人生を全うするまで、その資格は通用し、毎夜毎夜、飽きもせず眠る事が出来る。

　どうして彼らは私に声を掛けてくれなかったのか。或いは、どうして誰かが、君も一緒に行くべきだと、忠告してくれなかったのか。もうその時に私は、その資格を得るための資格を失っていた。その資格は大体、七歳から九歳くらいで取る。ただし教習は受けない。合格点も低い。零点でさえなければいい。しかもしょっちゅう試験が行われていて、一点でも取れば、百回試験を受け直して、百点になる。一度に高い点を取って、さっさと先に進む奴もいる。十歳までに合格点が取れなくても、十七歳までに点数を積み上げていけばいい。そこでどうやら私は躓いたようだ。十歳になるまで、一度も試験を受けなかった。そうなるともう、試験を受けさせても貰えないのだ。

　ではどうして試験を受けなかったのか。その頃の私には、そのような悪事に近付くなという、神の声でも聞こえていたか。「神は眠らない。何時如何なる時も目覚めていて、神への祈りを心掛けよ。」

　それで大人になって、私が全く眠れずに苦しんで来たかと言うと、そうでもない。眠りの真似事なら見様見真似で出来るし、自分としてはそれで、そこそこ眠れていると信じてもいられた。しかし間違っていた。それは眠る振りでしかない。最近それが分かって、それ以来もう、その眠る振りも出来なくなった。

　いや、どうして眠る振りだと分かるのか。そう分かるためには、本当の眠りを分かっていなければならない。資格のない私に分かる筈がない。とするなら全ては藪の中だ。眠りとは何か。私のしてきた事は何か。仮に眠る振りだったなら、それが出来なくなったところで、元々眠れないだけの事だ。

　ただどうしてまた、眠るための資格などという、妙な事が思い浮かんだのか。もちろんそれは、余りにも眠れないからだ。しかし眠れない理由なら、他に幾らも考えられるだろう。例えば人間関係というヤツだ。考えようでは、多かれ少なかれ、全てはそこから始まる。知らず知らず私は、不眠という罰を受けなければならない掟破りを、人間関係において犯していたという訳だ。それとも逆に、掟破りの眠り方をして、人間関係の中でその罰を受けているのか。それなら先ず、直すべきは眠り方となる。しかしどう直したらいいか。それこそ教

習でも受けたいくらいだ。手遅れかも知れないが。
いや、それは今までの事だ。人間関係も眠り方も、ずっとひどいままだった。それは確かだが、それがそのまま続いても、この先ずっと、私はそのようなひどい日々を送るだけの事だ。しかし今の私は、一体もう、どれだけ眠っていないのだろう。何ヶ月間か、一睡もしてない。そもそも眠りたいと思わない。眠っていないのを時々思い出して、このままでいいのかと、何となく思うだけだ。昼間だろうと夜だろうと、次から次ぎに、どうしても今、考えておかなければならない事が浮かんでくる。それを、その時その時に、何を考えていたか分からなくなってしまうまでに、考え抜くしかない。少しでも気を緩めれば、私の頭は、それきりイカレてしまうだろう。せめて眠れずにいられて、有り難いとさえ思えてしまう始末だ。

　実際、眠くて困っていたり、睡眠時間が取れなくて困っている人もいるだろう。眠りから解放されたと考えたらどうか。そのどうしても考えるしかない事に、一日中付き纏われて悩まされるにしても、せめてその障害となる眠けについてだけは、悩まされずに済んでいるではないか。

　久し振りに、知り合いの女性から連絡があった。彼女は彫刻家で、その作品が市役所前の広場に置かれたから見に来て欲しいという。真夜中だったが、早速私は出掛けた。シトシトと雨が降って、生暖かいゆるい風が吹いた。街灯の

下に、二、三十人の人だかりが出来ていて、大人達は傘を差したまま拳を振り上げ、何かスローガンを合唱している。子供達はびしょ濡れで、その周りを嬉しそうに飛び回っている。「邪魔物は即刻取り払え」と彼らは叫んでいた。

　その直ぐ向こうが、市役所前の広場の筈だが、波打つような壁が高く切り立っていて、見通しが遮られている。それはどうやら真っ黒な鉄で、しかも宙に浮いていた。話を聞くと、壁ではなくて、その断面が壁に見えてしまう程の、七、八メートルもの厚さの鉄が、そのままずっと奥に続いて、すっかり広場を占拠しているとの事だった。その一番端っこだけが見えているのだ。紫外線の強い日など向こう側が霞んでしまう程、意味もなく広い広場だ。そこを占拠する巨大な鉄など、どうやって置けたのか。子供達はそれを、鉄仮面、鉄仮面と呼んでいた。

　おかげで、市役所の正面入り口には、その鉄の下を、腰を屈めたり、所々では、這ったりしながらでなければ辿り着けない。市民の憩いの場が、昼間っから真っ暗がりだ。たまに子供がよじ登って、落ちて怪我をする。裁判はもう起こされているが、時間が掛かって、業を煮やした連中が、こんな時間まで押し掛けているのだ。

　この波打つ巨大な鉄は、人の顔の形をしていて、それが仰向けに横たえられている。そう子供達から聞かされて、その顔を想像しながら、鉄を見上げると、

こいつもまた、眠る資格を奪われているように思えてくるのだった。そして、これに一見の価値があるなら、その眠らない事によって、存在感を示しているからではないか。撤去を求める声も、鉄から眠りを遠ざけるためであるように聞こえてくる。
　私は黄色いロープを潜って、鉄仮面の下へと進んだ。手探りしながら、身を屈めてはいたが、それでも何度か、鉄をオデコにぶつけて、ひっくり返った。大きな穴が二つ開いていて、微かに光が差し込んでいる。目だろうか。雨が降り込んで、仮面の裏を流れる涙に見立てたら、出来過ぎだろうか。更に進んで、やっと市役所の入り口に辿り着いた。自動ドアが開きっぱなしになっていて、夜勤の職員が一人、私を出迎えた。彼は嬉しそうに、私の顔を覗き込んだ。
　それから彼と私は、何十階もある、その市役所の高いビルの階段を、黙々と登った。やっと屋上に出て、見下ろすと、鉄仮面の顔が一望出来た。雨に濡れ、街灯の光を受けて、黒光りしている。下では気付かなかったが、人だかりの中に、連絡をくれた知り合いの女性の顔を見付けた。花柄の傘を差していたが、何と彼女は、他の連中と一緒に、拳を振り上げているではないか。小さな白い拳だけが、傘の外に出て濡れてポツンと光った。
「ここからなら、よく見えるでしょう。」
　と職員は、私と並んで、私と同じように手摺りから身を乗り出して、大きな

声で言った。そしてまた、嬉しそうに私の顔を覗き込んだ。
　私は気付いた。鉄仮面は私の顔だった。
　そして思うのだった。どうしても考えなければならない事を考えていたのは、私ではなく、この鉄仮面ではなかったか。私の頭には、考えなければならない事が、次々に浮かぶだけで、それについて私は殆ど何も考える事が出来ず、どうにもならなくなって、結局それを全て、この鉄仮面に考えさせていたのではないか。
　私は柵を乗り越えた。その眉間辺りを狙い定めて、身を投げた。私はその黒光りの中に吸い込まれていった。
　全身が伸び上がるような衝撃を感じ、それから私は、何処だか分からない空中を、ぐるぐる回った。
　足枷が掛けられていて、それに鎖が繋がれていて、私は、ビルの屋上から逆さ吊りになっていた。考えるしかない事が、激しく私を襲った。もちろん考えたが、とても独りで考えきれるものではない。後はそれを、振り払うしかない。振り払えなくても、振り払おうとするしかない。いや後もう一つ、出来る事がある。鎖を手繰って屋上まで上がるのだ。私は縋り付くように、力の限り濡れた鎖を掴み取っては、そちらに気持ちを振り向けた。
　鎖を登りきって、屋上に身を投げ出した時には、もう夜が明けていた。私は

鎖をジャラジャラ言わせ、階段を降りていった。そこでも、考えるしかない事が私を襲って、足が縺れ、なかなか次の段に足が降りてくれなかった。奥の深い疲れを感じ、ひょっとしたら、その中には眠気さえ混じっていないだろうか。しかし足を止める訳にはいかない。そんな事をしたら、考えきれない事を、全て真面に考えなければいけなくなる。出来る筈ない。外の喧噪が耳に届く。窓の外はすっかり明るい。階段を降りるだけで、どれだけ時間を費やしたか分からない。

やっと外に出ると、もう陽は殆ど真上だった。鉄はもう撤去されていて、広場のあちこちで、若い母親達が、よちよち歩きの子供達を遊ばせていた。石畳は少し湿っていたが、すっかり晴れ渡って、カラッとした暖かい風が流れ、恐ろしい程に、爽やかな気分を強いられるようだった。それは耐え難かった。他の事が綺麗さっぱり洗い流されて、考えるしかない事だけが、くっきり浮き立ってしまう。しかもそれは、何処にも持って行けず、取り替えも利かない。

そう出来るかどうか分からないが、私は眠りたくなった。どうしてもそうするしかない。他には、逃れようがない。

子供達が寄ってきた。足枷を掛けられて蹲る者の姿が、珍しくて面白いのだ。その子供達の歓声に促されるように、次から次ぎに、また考えなければならない事が押し寄せてきた。

中で恐らく一番若い母親が、中学生のような軽い足取りで、笑いながら走って行くのが見えた。ミニスカートで、黒いソックスを穿いていた。直に職員が、鍵をジャラジャラさせて、私に近寄って来た。その背中に隠れるようにして、若い母親が、嬉しそうに私の姿を覗き込んでいる。彼女は私の事を、職員に言い付けたに違いない。「すいませーん、変な人がいるから、何とかしてくださーい。」

職員は鍵で足枷を外した。すると、考えるしかない全ての事の答えが、遙か平行線の彼方で、たった一つに結び付いた。そこに辿り着くまで、走る続けるしかない。私は取って返し、市役所の階段を一気に屋上まで駆け上り、その答え通りに身を投げた。幻でいいから、鉄仮面をまた見たかった。しかし麗らかな春の日差しを受けた、真っ白な広場の石畳が拡がるばかりだった。（二〇〇一年四月二十九日）

＊　　＊　　＊

予想

決して男ではないので、生まれた時からずっと女の恰好をしている。それで

自他共にすっかり女で通っているなら、私もここでは、彼女と呼んでおこう。女物の衣類やアクセサリーを並べたガラスのケースの前で、その彼女が、頭から、透明なビニール袋を胸の辺りまですっぽり被って、今にも歩き出しそうにそっと立っていた。と言うのも、彼女の爪先が羽根のように軽そうに見えたからだ。

　私はガラスケースの中に居て、そのガラスの戸を少し開けた隙間から手を伸ばし、そのビニール袋を掴んで引っ張った。彼女は全身を現し、ほっそりした両腕を高く上げてポーズを取り、直ぐにそこから、笑顔のまま走り去った。足音は聞こえなかった。やはり、白いふわふわした羽根が、床の直ぐ上を、風に運ばれて行くような感じだった。ビニール袋は、私の手から滑って、暫く宙に浮いた。その中に、空気より軽い彼女の吐いた息が、残っているのだろうか。

　彼女が立ち去ると、ケースの中の私の目の前で、真っ黒な大きなゴムまりが膨らんで、私はそれに抱き付くような恰好のまま、下半身を四角に折り畳んで、身動き取れなくなった。もちろん私は、ゴムまりから自由になりたかったが、それ以上にゴムまりが、私から離れたがっているに違いなかった。ゴムまりの中から、荒い息遣いのような妙な音が聞こえてきたからだ。すると私は、暫くこうしているのも悪くないようにも思えてきて、体の力が抜けてしまう。

そんな気持ちになっている場合ではない。床も天井も柱も、左に大きく傾い

ていた。ガラスケースはバランスを崩し、私とゴムまりを閉じ込めたまま、床に倒れ込んだ。そこだけ赤い絨毯が剥がれて、コンクリートが剥き出しになっていた。最後に、絢爛豪華な音の構造物を私の耳に残し、ガラスケースは粉々に砕けた。ゴムまりは、脹れた腹をパックリ切り開かれたようになって、短い破裂音と共に消え去った。その勢いで、ガラス片が私の顔目掛けて、幾つも飛んできた。私は咄嗟に目を閉じたが、もう瞼の裏は細かな破片でザラザラしていた。指で何度も目を擦っては、私はそれを取っていった。涙も出なかったが、痛みもそれ程には感じなかった。寧ろ痛みは、指が目を擦っているのを分かるために、なくてはならない。いや、その痛みを繰り返したくて、奥の方に入り込んだ、もう取れそうにない破片に向かって、指を掻き回しているのかも知れない。

そうして、粗方ガラス片を掻き出した目で、自分の体を見ると、胸から腹から脚の方まで、大小のガラス片がキラキラ光っている。何か物足らない。私は横になったまま、服を脱いで裸になって、ガラスだらけの服の上を何度も転げ回り、起き上がって、ガラス片を拾い上げては、体のあちこちに刺していった。奥の棚の鏡張りの背面に、その姿が映った。自分でも、決して近付きたくないような、刺々しい姿だった。これなら誰も、私に危害を加えたり出来ないだろう。

　真四角な頭をしたずんぐりした管理人が、髪を振り立ててやって来た。スラリとした背の高い若い男を連れていた。管理人は鋭い目付きで、その若い男に命令した。先にもう、若い男は、私に飛び掛かっていたかも知れない。私は一遍に押し倒された。ガラスの破片くらいでは、ハッタリが利かなかった、と思っていると、漸く若い男はそれに気付いたらしく、私の胸を押さえていた掌を裏返して、じっと眺めた。それから急に、力が抜けたようによろよろと立ち上がって、いかにも自分が哀れであるような、途切れ途切れの、一回一回大いに感情の籠もった、小さな叫びを上げ続けた。

　しかしその男の目は、何処を見ているのだろう。私の頭に、その男の顔の表情が順々に浮かんだ。管理人の後を付いて来た時の顔、立ち止まって私の姿を見た顔、私に飛び掛かった顔、私の上に馬乗りになった顔、そして叫ぶ顔。その目付きは全く変わらない。少し疲れて岩の斜面で休んでいる蜥蜴のような、何処を見ているか分からない目だった。掌を覗き込んでは叫ぶたびに、眉を顰め、顎を回転させるようにしても、その目だけは、何もない遠くを見ているままのようだった。

　何て禄でもない男だ。何をするのも、ただ管理人の言いなりだ。少しは後先考えろ。こいつの馬鹿は、目の前のものを見ないせいだ。そういう癖が付いてしまって、不幸な事に、死ぬまで直らないのだ。

私は立ち上がって、体中のガラス片を一つ一つ抜いては、その男の、つるりとした白い面長の顔に、突き刺していった。頬から耳から額から顎から項まで。ただし目だけは、ずっとそのままであるように、そのままにして。

それから私は、通行人に紛れて、そこを立ち去った。大分してから振り返ると、管理人が、独りで辺りをキョロキョロ見回しているのが見えた。

暫く歩いて、私は腹が減ったので、通り掛かりの食い物屋の裏口から入って、誰も居ないのをいい事に、生の食材を手当たり次第にパクついた。何時の間にか、管理人の弟が私の横に来ていて、ぶよぶよの汚い手を食材に伸ばした。もう口をモグモグさせている。私の方を見て、ニヤニヤ笑っている。鼻っ面に一発喰らわした。顔を顰めて二、三歩後退った。ヤツは顔も体も恐ろしくデカかった。

「オレはここで、お前を殴り殺してもいいんだぜ」

聞こえたのかどうか、目をパチクリさせたまま黙っている。そこへヤツの女が迎えに来て、私の方など見向きもせず、ヤツのデカい体に、棒のように凭れ掛かった。女は、背筋を伸び上がらせて、ヤツの薄い頭を撫で、テキパキと慰めの言葉を掛けた。二人は、手を取り合って帰って行った。

弟は早速、管理人に私の居場所を言い付けたに違いない。私は行く先々で、ビニール袋を右手に持って高く掲げ、にっこり笑ってポーズを取る、彼女のポ

スターを見せられた。その度に私は、進路を変えなければならなくなった。横道からまた横道へ逸れ、また横道を次々に逸れて、見覚えのある所に戻ったようだった。間違いない、長らく私がガラスケースの中に入っていた所だ。
しかし、ガラスの破片も、哀れっぽい蜥蜴目の若い男も、管理人も、そこに滴った血も、綺麗さっぱり片付けられていた。代わりにそこには、右手にビニール袋を掲げた、彼女にそっくりの張りぼてが、平板で厚い真っ赤な唇を割った、はち切れんばかりの笑顔で、突っ立てられていた。ビニール袋は風に揺れて、バサバサと間の抜けたような音を立てた。
どうも、ポスターの彼女は、人間離れしていると思った。これを撮影したのだ。無性に怒りが込み上げた。直ぐさま、来た道を逆に辿って、私は、ポスターを一枚一枚びりびりに破っていった。そうして、行けども行けども、逸れた横道を引き返すのだった。
逸れた横道の数よりも、ずっと多くのポスターを破っていないだろうか。疾っくにもう、ポスターがなければ真っ直ぐに進めた筈の道に、戻れていなければならないのではないか。しかも、ポスターも、初めの内は、角を曲がるたびに、その角に見付かったが、今ではもう、角を曲がってそこからデタラメに歩き回って、まるで思い掛けない所に、見付けられるような事になっている。明らかに私は、私が逸れた横道からも逸れていた。そう考えると、もう何日も寝

ないで、ポスターを破り続けているような気がしてくる。
　周りを見渡した。ポスターを探す目ではなかった。そんな目でものを見るのは、道を引き返して初めてだ。何も見えない、物音一つしない深夜だった。私は目をしっかり見開いて、ただ風の吹く方に進んだ。風は、目を冷やして気持ち良かった。私が破ったポスターも、二度と私がそれらを見なくて済む遠い所まで、その風に運ばれているようだった。
　いきなり、垂直に平べったくて柔らかな感触のものに、躓いた。真っ暗で、触って確かめられた訳でもないのに、どうしてもそれが私には、心臓のある方を下にして、横向きになって眠りこけている女の背中に思えてしまうのだった。私はひどく頭を打っていたが、何とか立ち上がり、風の向きを確かめてまた進んだ。しかし二、三歩も行かない内に、また同じ感触のものに躓いた。それでもんだ。しかし二、三歩も行かない内に、また同じ感触のものに躓いた。それでも構わず立ち上がって、また風に向かって歩き出す。やはり直ぐに、同じものに躓く。
　倒れたまま額に手をやると、濡れていた。血のようだった。舐めてみれば分かるが、舐めなかった。真っ暗で何も分からない。どれだけ血を流したかも、もちろん分からない。それなら、その分からないままに放っておけば、余計な事を考えなくて済む。
　別に急ぐ理由もない。明るくなるのを待ったらどうか。いや、それはまずい。

実際、倒れたまま、そう考えるだけで、体が動かなくなりそうだ。そしてそのまま私も、蹴られても、躓かれても、上から伸し掛かられても、何も感じないでびくともしない、声一つあげない、鈍感な女の一人になってしまうだろう。まだ男のままなら、私はまだ、その男である事を諦められない。それにはまた立ち上がって、風の吹く方に進むしかない。しかし、それで額がひどく割れて、血を流し過ぎて倒れたらどうなるか。ここに転がっている者達も、そのようにして、女になってしまったのではないか。それまではどれも皆、男であったかどうかは兎も角、少なくとも女ではなかったのではないか。

　それなら、四つん這いで行く手もある。そのようにすると、手探りの先は、ザラザラの地面ばかりで、女の背中に一つも行き当たらない。何時の間にか、掌の皮が左右とも全部擦り剥けて、肉が剥き出しになり、その肉を尚もザラザラの地面に擦り付けているようだった。恐ろしい痛みが襲った。しかし、何時から、この痛みと戦っていたのだろう。私はそのまま、肘で頭を抱えるようにして、額を地面に付けた。腰がすっかり這う姿勢のまま固まっていて、立ち上がる事も、地面に突っ伏す事も出来ない。

　やっとの事で、首を捻って左を見ると、そこだけ白んでいて、青い地面が地平線を引いていた。それなら風は、南から吹く。顔を上げて南を見上げると、寝ている女など一人もいない。どの女も立ち上がって、大小様々なものを手に

持って、或いは腕に抱えて、或いは肩に担いで、何処かに向かって歩いていた。立ち止まる者も、余所見して立ち止まりそうな者もいなかった。何かに気を取られているようでも、それは余裕からで、決して進む方向は見失わず、確かな足取りで歩いている者ばかりだ。その南風に乗るように、私は軽々と立ち上がった。

　明るいならもう、風に向かって進む理由もない。それならと私は、別に北に向かう積もりもなく、南に背を向けた。何処へ行くにしろ、ガラスケースの中にだけは、二度と入らないようにしようと思うだけだった。

　すると行く先々で、ガラスケースが目に付くようになる。そこに映る自らの姿の慎重な足取りを確かめながら、私はその前を行き過ぎる。しかし、目に入るガラスケースの数が、どんどん増える。ケースとケースの間の、狭い所を通り抜けるしかない。その積み上げられた下の僅かな隙間を見付けて、屈んで行かなければならない。そして遂に、薄々予想はしていたが、ケースとケースの間だと思って身を滑り込ませた所が、ガラスケースの中だ。つまり何処もかしこもガラスケースで、どうパズルを解いても、行く先はガラスケースだ。しかし、周りもずっとガラスケースばかりでは、そこに閉じ込められたからと言って、私の身にはもう、何も起こりようがないだろう。それとも、そんな何も起こらない所に閉じ込められた事自体が、オオゴトなのだろうか。（二〇〇一年

五月一日）

*　　*　　*

笑顔

　大抵の人は蛇が嫌いだから、歩いていて、ふと目を落とし、いきなり足元に、スルスルと忙しく蛇が這い廻るのを見付けたりすれば、何はさておき飛び退くだろう。

　しかし、彼女は別に蛇なんて何とも思わないから、それが右に左に、すばしこく身をくねらせて前に進むのを面白がって、すっかり、たのしい道連れでも出来たような気分で、自分も一緒になって腰をくねらせてみたりする。踝から足の甲辺りを掠めて、蛇の横っ腹が絡み付いて来そうなのが、ちょっと擽ったかったりしながら、ダンスのステップのように、爪先の動きなど細かい変化を絶えず工夫して、ほそっそりした両脚を滑らかに踏み出してゆく。

　ひょっとして、そういう時の彼女は何時も裸足で、動き回る蛇の上に乗っかっているのではないか。裸足なのは多分、足に羽根が生えていて、それを広げて、自由に羽ばたかせるためだ。

蛇がどちらに体をくねらせるか、即座に見て取って、彼女がそちらに爪先を伸ばすと、その足が地面を踏む前に、蛇は彼女の見立て通り、ちゃんとその下に身を滑らせて来る。その蛇のオデコに彼女の爪先が触れると、蛇はきっと、嬉しくて仕方がないのだ。蛇のために、その進路を分かってくれていて、先回りしてくれていて、爪先で優しくオデコを撫でて貰えるのだから、蛇としては堪らない。そうして、彼女の足を背中に乗せ、そのまま喜び勇んで、彼女の体を運んで行こうとする。

そうなればもう、彼女は、別に自分の足元を見て、わざわざ彼女から、蛇が向かって行きそうな方向を見定めて、そこに爪先を向けたりしなくてもいい。ただその場で腰をくねらせて、交互に右左の脚を差し出して行くだけで済む。後は、彼女の事を大好きな蛇達が、彼女の足の向く方に、自ら進んで身をくねらせて、彼女を何処へでも連れて行ってくれる。蛇達にしてみても、そんな風に自分の背中に乗ってくれて、その行く先を自分達に委ねてくれる、彼女のような存在は、他にちょっといない。

それに、乗っていると言っても、ハタからそう見えるだけで、実際は、互いの皮膚の表面が微かに感じ取れるくらいに、そっと触れ合っているだけのようでもある。だから彼女はあんな風に、少しも踏ん張るような姿勢を取らないで、体の向きを、幾らでも細かく素早く、しかも全く何でもない事のように、変え

たり出来るのだ。その彼女の足の裏の、軽く柔らかな感触も、蛇達にはさぞかし堪らないものだろう。
　だから彼女の足元には、大小様々な色とりどりの蛇達が何時も群がっていて、何とか彼女の爪先でオデコを撫でて貰おうと、盛んに競い合っている。もうそうなれば、愈愈、彼女は、ただ好き勝手に、気の向く方へ足を向けるだけで、そこから先は全て、続々と集まってくる蛇任せでいられる。
　しかし、そう巧く事が運ぶだろうか。蛇達は、何とか彼女の足の裏に触れようと、何時もいがみ合っているに違いない。譲り合いもチームワークもルールさえも全くない、ケダモノの世界だ。いがみ合いに気を取られて、彼女の足を最優先させる事が、出来なくなったりしないだろうか。
　いやそんな事は、彼女は先刻承知なのだ。寧ろ、そのいがみ合いによって、蛇達は、彼女の足との触れ合いを、軽やかな心地よいものに感じてしまうのだ。いがみ合うのをやめて、例えば順番を決めたりすれば、その順番が最優先されてしまって、却って彼女の足がおろそかになってしまうだろう。そもそも窮屈な約束事など設けていたら、気紛れな彼女の足の動きに付いて行ける筈がない。彼女の次の足の動きに、どの蛇が相応しいかは、激しくいがみ合っていてこそ、即座に答えも出る。蛇同士の間に何の繋がりもなく、ただ彼女の爪先だけを見て、互いに反撥しながら絡み合っていれば、間違う事はない。

また、もし彼女専用の一匹だけだったたら、幾らそいつが疲れ知らずであっても、彼女の足の裏にばかり触れていれば、一回一回は羽根のように軽やかでも、積もり積もって、踏み付けられているような感触に囚われてしまうかも知れない。その圧し付けられる感じに、また新たな快感を覚えるのはそいつの勝手だが、それだけでは役目は果たせない。

至る所から集まってきた強者共が、終わりのない血塗れの争いの中に身を置いてこそ、たまに踏まれても、少しも彼女の重みなど感じないで、彼女の足に羽根が生えていると信じられたりもするのだろう。

いがみ合いこそ彼女のための力の源だと、彼女も分かっていて、足元など全く見ないで、彼らの争うままにさせ、長い脚を気ままにどのようにも振り立てて、前に進めば進んだだけ、爽快な気分に浸れる。全て蛇任せでいられて、もう楽しくて仕方ないに違いない。それが、足元を見て、不意にどれか一匹に目が行って、こいつちょっといいな、なんて事になっては、却っておかしくなる。尤も蛇達は、恐らくは、是非そうして自分だけが選ばれたいと切に願って、いがみ合いをやめられないのだろう。

さて、そんな彼女に近付くにはどうしたらいいか。どうもこうもない。彼女に倣って、足元など見ないで、蛇などいない事にして、真っ直ぐ彼女の顔だけ見て、ごく当たり前の事をするように、近寄って行くしかない。

　で、何喰わぬ顔で、そのようにしてみると、彼女が立ち止まっていようが、歩いていようが、どうにもこちらの足元がふらついてしまう。何喰わぬ顔どころではない。そこは大概、下から冷たい突風が吹き上がる、濡れて滑りやすい崖っぷちで、もう縋り付けるものは何もなく、後は落ちて死ぬだけだ。

　いや、それは少し大袈裟だ。足元がふらつきそうになって、ちょっと踏ん張っただけで、もう彼女は、ずっと先を歩いているか、下手をすると、その姿は見失われていたりする。それで大体、命拾いした事になる。何度かそんな事が続けば、大抵は諦める。彼女に近付いたり、ましてや彼女を捕まえようなどと思わなければ、彼女は大方普通に見えるだろう。もし彼女の方から近付いて来たら、じっと立ち止まったまま、それこそ何喰わぬ顔で彼女の要求に応え、そのまま彼女を見送ればいいだろう。

　それに彼女の歩き方を見ていれば、幾らそれが楽しげで魅力的に見えたとしても、それとなく眺めるくらいに留めて、それ以上、彼女に近付こうとは、誰も思わないのではないか。確かに魅力的だが、それだけではなさそうだと感じられれば、自ずと、もう彼女に目が向かなくなる。やはり何処か蛇のようだからか。いや、それを蛇と名指すまでには至らない。仮に蛇だと思い至っても、直ぐにそんな事は忘れてしまう。または、忘れた事にしてしまう。何も考えないで、ちょっとワクワクしながら、ただ彼女を眺める楽しみは、取って置きた

いから。もちろん、そんな彼女だからこそ、近付くどころか、一つ捕まえてやろうなどと、軽弾みに思ってしまう者も、居るには居るだろう。

逆に、彼女の方から近付いて、捕まえようと思えば、どんな男も、たちどころに捕まえてしまうだろう。あの素早くて軽やかな変幻自在の足取りをもってすれば、彼女から逃げおおせる者など居る筈がない。それに例えば、彼女が男の手を取っただけで、その手に触れようと、足元の蛇達が、一斉に男の体を這い登ってきて、男はもう、全く何も出来ないだろう。

ただ、彼女には、今のところ一人の男しか見えていなくて、その捕まえられた男も、それで満足しているようなので、実際どんな男でも捕まえられるかどうかは、まだ試されてはいない。

そんな彼女だが、もう一つ特技がある。ガラスの壁を擦り抜けられる事だ。と言っても、どのガラスの壁でもいい訳ではなく、二ヶ所か三ヶ所に限られているようだ。ただそれも、男と同じで、その二、三ヶ所しか見えていなくて、そうであるだけかも知れない。そして、そこを擦り抜けると、その直後、蛇達は幾らでも数を増やしながら、一斉に彼女の足元から散って行く。そして、早速蛇達は、そこに居合わせた者達の足元に群がって、彼らの足の下に滑り込めば、もう彼らの行く先は、蛇達の思いのままなのだ。

で、彼女はと見ると、足元の蛇は全て出払ってしまって、ほっそりした脚を

無防備に晒して、弱々しくそこに立ち尽くしている。もちろん彼女としては、それを気付かれないように、何時も通りの笑顔を、それとなく周りに見せて廻ったりはする。そのためになら、少しは歩く。

　そして、その彼女の姿を目にした者達は皆、彼女の操る蛇達の動きに従って動くしかない。彼らにはそんな事は分からない。蛇など見えないのだから。少し歩いては何かに寄り掛かったりしている女に、自分達が操られているなど、思いも寄らない。

　ところで、その擦り抜けたガラスの壁の先は、別に閉ざされているのでも、世界から隔離されているのでもない。彼女に操られる者達は、世界中、何処へでも行ける。彼女の足が華奢に出来ているなら、彼らに彼女の体を運ばせれば、彼女だって、世界中、何処へでも行ける。そうして彼女はその気になれば、世界中の者達を、蛇の上で踊らせる事も出来る。

　そんな事をしても、彼女にとって何にもならないので、そうしないだけだ。今のところ、彼女はただ、自らの小さな気紛れな望みを叶えたくなった時だけ、その何時ものガラスの壁を擦り抜けて、そこに居る何人かに、その望みが叶うよう、その足元に蛇を送り込んで満足なのだ。そうして、それが叶えばまた、蛇を皆、自らの足元に呼び寄せて、今度はそのガラスの壁の脇のドアを通って、男の所に戻って行く。（二〇〇一年五月三日）

*　　*　　*

焼き尽くす

私は、地下深くの分厚い一枚の岩盤の中を、走り回っている。岩盤の中を走り回る？　また、どうしていきなり、そんな事になっているのか。どこからどうやって、やって来たのか。走り回るのに精一杯で、何も考えられない。確かにそうだが、せめてそう思えるのなら、そんな私の記憶を辿り直せないだろうか。

　私は、光の中に居た。光の中で、その光の届く所を、隅から隅まで見通せていた。そしてそこにはもう、満遍なく光に照らされるだけで、何も残っていなかった。残っているのは、私だけか。私は、逃れようがなかった。

　しかし、私は、逃れたいと思っていただろうか。もし逃れられたら、私はそれで終わりではないか。忽ちバラバラになって、私でなくなってしまうに違いない。前までそこにあって、私独りを残して、先になくなってしまったものの後を追うだけだ。だから私は逃れようがない。しかし、そんな私では、もう終わってしまっているようなものだ。もし誰かが私を探しても、私はもう、疾っ

くになくなってしまっている事にされるだろう。ただ、私が見てだけ、私がそこに居るようであるに過ぎない。しかし、私は、何処に私を見るのか。誰にも見えない所と言ったら、頭の中しかなさそうだ。となると、私の頭の中は、私の他には光しかないのか。

　そんなひどい所なら、光に背を向けて、まだ終わらなくて済むような所まで、何とか逃げ延びたいものだ。そう思ったに違いない。しかし、そんな所がないのは、分かっている。つまりは、逃れようがない。寧ろ私は、誰が見ても終わっているようでも、私が見る限りは終わっていない私を、せめてそこに留めて置くために、決して、そこにある光を見失ってはならない。もし、その光が見えなくなったら、どうなるか。想像も付かない。

　その光の中で、一瞬、いや一瞬かどうかも分からないで、頭がぼんやりしてしまった。頭がぼんやりするなんて事は、少なくとも、光に囲まれるだけのようになってからは、初めてだ。光は絶えず、私の頭を隅から隅まで、冴えるままにさせた。それをどうにも出来なくて、苦痛さえ覚えた程だ。何か、狂いが生じたのか。冴えるしかなかった私の頭の何処かが、そうでなくなった。ただ、光が欠けるようではなく、ほんの少し、どのようにか曲がるようだったのではないか。よく分からない。ただそれで、少しだけそこは曇ったかも知れないが、決して、暗がりの入り込む余地などなかった。

　それどころか、私が光だけに囲まれていると分かったのは、その時になってかも知れない。頭が冴えるばかりだった時には、その冴え渡る頭の直ぐ裏側に、静かな深い闇が密着しているようにでも、感じられていたのではなかったか。で、どうしたのだろう。何処をどう通ったか、私は真っ暗な岩の中を、止まり方も分からず、ひたすら走り回っている。足取りは、とても軽やかだ。好きなだけ前へ踏み出せる。障害物もなく、まるで滑って行くようだ。もし足の動きが感じ取れなければ、泳ぎ回っていると思っただろう。

　それとも私は、岩盤に突き当たっているのだろうか。それ以上少しも進めなくなって、藻掻いているのだろうか。だからそれは、岩盤なのではないか。いや、それだけならそれは、壁である筈だ。自らの足だけで、そこに一枚の大きな岩盤を描き出せるなら、やはり私は、そこを幾らでも進んで行けている筈だ。

　しかし、幾ら走り回っても、先が見えない。岩盤は、私の前に立ち塞がっているのだ。いや、前ではない。私は中にいて、走り回っている。しかし、それは私だろうか。寧ろ私は、その走り回っているものを眺めていないか。そして、まさか私でないものが、そこを走り回れる筈がないので、走り回るものは、私であるしかないだけなのだ。私でないものは、私を残して、先になくなってしまっていて、明らかにそこは、私だけの場所だ。それなら、そこは私の頭の中か。私の頭に、岩盤が入り込んでいる。いや、私の頭がそっくり

岩盤になってしまっている。

　では、走り回っているのは何か。私の影だろうか。私の頭がどうなっているか調べるために、何時もその中を走り回っている影。その影は一つとは限らない。その或いは無数の影が犇めいて、私の頭の中が、岩盤のようになってしまったのかも知れない。

　近くも遠くもない所を、影が横切って、岩盤の中に走り去って行くのが見えた。新しい影が、次々に、それに続く。そして愈愈、それらを眺めていられたかも知れない私も、一枚の影になって、何処かを横切って、岩盤の中へと走り去って行った。

　それでどうした。それだけの事だ。それとも、私がそれを求めたので、そうなったのか。今更、何を求めるのか。私の頭を、光ではなく、岩盤にするのなら、そしてそこを、私に走り回らせるのなら、その岩盤に隔てられ、決して私には辿り着けないものに、私は狙いを定めているようではないか。無数の私が、暗い地下の岩盤を走り回ってさえ、手に入らないもの。或いは、もしそれに少しでも近付こうとすれば、岩盤の中に籠もって、そこを無闇に走り回るしかないもの。

　それとも私は、光に囲まれて、余りにその何かの近くに居過ぎて、それが耐えられず、そこから少しでも遠ざかりたくて、巨大な岩盤を必要としたのだろ

うか。光に囲まれて、私に何が出来ただろう。届かないままのその何かが、ただ私から奪われてゆくのを、間近に見せられるだけだったろう。そのせいで、私は、少しもぼんやりなど出来なかったに違いない。そんな私には、終わりのない苦しみがあるだけだろう。そこから私は、寧ろ隔たっていたいのだ。

　しかし、その隔たりこそが苦しみの元であるなら、その隔たりそのものであるような岩盤を、私はまた苦しむしかないのか。それとも岩盤は、苦しみからも、私を隔ててくれるのか。

　岩盤の奥に、小さな点が一つ見える。火が燃えているようだった。すると岩盤の中は空っぽだった。そこは岩盤などではなく、ただ、その火を私に示すための、空っぽの暗がりだった。そして、その小さな点は、私がそれまで味わった苦しみを、全て纏めて甦らせるようではないか。その小さな点こそ、私が逃れたいと思うものだ。では、空っぽの暗がりは、岩盤のようにそれを私から隔てたのか、それとも、それを却って際立たせるために、岩盤のように立ち塞がったのか。

　ところで、私は別に、自分の頭と地下の岩盤を取り違えそうになっていても、取り留めのない夢を見ているのではない。その証拠に、ちゃんと独りで道を歩いている。私は、箱に入った光の束を買いに行くところだ。いや、ひょっとして売りに行くところかも知れない。その光は何色かあるが、どれも冷たい。そ

して、箱に入れて持ち運びしやすいように、同じ形をしている。形はずっと変わらない。色褪せない。永久に壊れない。
しかし、光であるからには、元々は火であった筈だ。火は熱い。絶えず形を変え、いずれ燃え尽きる。
それは、私の頭の中で燃えていた。火は決して、頭の中に入れるようなものではない。そのまま放っておけば、頭はその熱で焼け爛れる。私はそれを、一点に押し込めるところまでは出来た。しかし消す事は出来ない。熱いままだ。それを消さない限り、持ち運び出来る冷たい光の束など、何かの影のようでしかない。そんなものの売り買いに、何の意味があるのか。
そして、その火の一点は、岩盤の奥の奥にあって、私を寄せ付けない。無数の私が、恐らく水の入ったバケツでも提げて、それに近付いては、焼けて灰になっただろう。それなのに、私は私のままで、火はもちろん火のままだ。火は私の頭を直に焼く。しかも、私の頭を灰にする事はしない。まるで私の頭の中に、その火のための無尽蔵の燃料が蓄えられているようだ。それとも、私はその燃料そのものので、絶えず燃やされ続けているのだろうか。
しかし、それは本当に火なのか。火でないかも知れない。そう疑えはしても、私がそれを火として知るしかないなら、私には、それは火であるしかない。だからそれは火だ。ただ、それを火として知らないままだったら、それはずっと

冷たい光の束だったろう。そして、たとえそれが、本当はどんなに熱くても、私はそれに焼かれなくて済んだに違いない。

　では、どうして私は、それを火であるとして、知ってしまったのか。或る日、私の頭の中で、その燃料に火が点るのを見てしまったからか。そうかも知れない。その日初めて、私は火を見たのかも知れない。火は燃え広がって、私の頭を覆いそうになって、それをどうにか岩盤の奥の奥の一点に押し込めはしても、却って、決してそれを取り除く事を出来なくもしてしまった。

　もしそれを、そこから取り出せるとしたら、その火で私を焼き尽くすしかないだろう。それこそが恐らく、私の最も望むところだろうが、岩盤の奥に閉じ籠もられては、叶えられそうにない。

　そうだ。火は、自ら進んで、岩盤の奥に閉じ籠もったのではないか。火は私のようなものを、焼きたくないのだ。そんな事をして、変な色になったり、変な匂いを立てたくない。その火だけで燃えていたい。その燃料にしても、私の知らないずっと遠い所で、汲み上げられたに違いない。精々私は、その燃料を通す管だ。決して火は、私の所にやって来て、私を包んだりしてくれない。遠ざけられているのは、私の方だ。

　しかし、私がそれを火だと知って、その火に焼かれる事の他に何の望みもなくしてしまえば、私の中から火は消える事はない。

いや、岩盤の奥の奥が、私の中である筈がないではないか。火は、私の外の、私から隔たるだけ隔たった、ずっと遠くで燃えている。火はそこで、あれやこれやを結合させては、絶えず新しいものを生み出している。それを岩盤のこちらから眺めるだけの私は、決して燃えたりせず、濡れれば濡れっぱなしで、少しずつ縮みながら冷たくなって、もっと冷たい所へ流されて行く。もう光の束さえ、何処で手に入るか分からない。

　そのようにして、火は私の頭を焼く。いや、そのようにして私の頭が焼かれるので、それは火となって、岩盤の奥の一点で燃え続ける。（二〇〇一年五月五日）

*　　　*　　　*

体温

　世界は二つに分断されていて、全く交流がない。決して和解出来ない。後戻りも出来ない。女の掌に乗るくらいの、小さな鉄の箱の中に、真四角に折り畳まれた私が、閉じ込められている。その箱は、私の空っぽな頭の中にある。だから、鉄の箱は叩いても音がしないし、雨晒しにしても錆びない。そのように

して、一つの世界がある。しかしそんな世界は、長続きしない。いや、そこに、長いとか短いとかの物差しは持ち込めない。時間とも空間とも、その係わりを断ち切られている。ただ、時間や空間を、その外から眺める事は出来る。

　それで一つの世界と言えるのか。そんなものは世界でも何でもない、外科手術でもするように、切って取ってしまえ、と言うなら、そこにもう一つの世界がある。いや、精確には、あるかどうかは分からない。ただ、私が、鉄の箱の中から、私の空っぽな頭の中に向かって、それを眺めているかも知れないような気分になれるだけだ。だからと言って、その世界が、朧で儚いものかと言うと、まるでその正反対だ。そこでは、日々新たな世界が塗り重ねられ、余り分厚くなり過ぎて剥げ落ちたら、また塗り替えられ、何事もなかったかのように変わり続けて、終わる事がない。そして、それを眺めているかも知れないような気分になっている方は、まあ当たり前だが、全くそこに入って行く事も、係わりを持つ事も出来ない。

　さて、そのように世界が二つあって、全く交わりを絶って、それぞれの道を進むのなら、話はこれで終わりだ。実際、その通りだろう。それなら、この話自体、始めから徒労だ。

　しかし、徒労ではある。その徒労は、何処に属するのか。尤も、そんな事が分かったところで、それもまた徒労だろう。

では、話をやめたとして、私は徒労から解き放たれるか。そんな事はない。それが私には困るのだ。これがもし、世界と世界でないものの二つだったら、徒労すら入り込めないに違いない。しかし、どちらも世界である限り、二つは徒労によって、どのようにか結び付けられ、世界のままであるしかない。

どちらも世界であるばかりに、すんなり終われない。私は、鉄の箱に全く身動き取れずに詰め込まれ、私の空っぽな頭の中は、すっかり止まったままか、光陰矢のごとしの、矢よりもずっと速く飛び過ぎているようなのに、その一方で、ごく普通に手足を伸ばして歩き回り、カレンダー通りに、あれやこれやを、こなして行く羽目になる。

空っぽな頭の中の鉄の箱に入ったままなら、誰にも見付からず、そのまま独りで居られそうではないか。見付かっても、その居心地などを話して廻り、世の人々から思わぬ喝采を受けるとか、それとも逆に、気持ち悪がられて、スクラップにされても構わない。どうとでもなったのだ。

そうして処分されるまでは、ずっと小さな真四角のままで、そこから私は、逃げ場のないひどい悪夢を、次々に絞り出せただろう。私に襲い掛かって已まないそれらの悪夢と戦って、我を忘れてしまえただろう。そうして、私の一切が磨り減って、遂に悪夢さえ出て来なくなれば、それまでに仕留めた無数の悪夢の、腐って溶けた屍の海に浮かんで、ただ心臓だけを脈打たせて、そこでし

か味わえない、自らの生の中味を味わい尽くせただろう。しかし、ただ見掛け上、普通に歩き回れてしまうだけで、なぜかそれは、許されないのだ。

私を見て、何かの異変に感付く者も居るだろうか。しかし、笑顔さえ浮かべて、自由に当たり前に行動する私を前にして、その異変を言い当てたりは出来ないだろう。もちろん私の方も、間違っても、箱詰めにされているような恰好を、彼らの目に晒してはいけない。彼らは、初め少しは我慢して、顔を歪めて笑っているだろうが、直にその私の醜さに逆上し、私を殴り殺し、袋詰めにし、生ゴミと一緒に捨てるだろう。それも一つの選択肢ではある。いや、そう出来たなら、疾っくにそうしていた。しかし一体、頭も手足もあるままで、折り畳まれて小さな真四角に箱詰めされた恰好とは、どんな恰好なのか。当の私でさえ、目に浮かばなくて、どうやってそんなものを、他人に示せるのか。

どうしてこうなったか。考えていられる内はいい。しかしふと何も考えられなくなる。何が何だかさっぱり分からなくなる。つまり、私の頭の中は空っぽになる。その空っぽな中に、箱詰めの私は居るのだから、その空っぽな頭でいいのかも知れない。しかし、その空っぽは、とても頭の中に収まりきらず、どんどん外に溢れて行く。空っぽな頭だけなら、それを苦しむだけで済む。しかし、私が普通に歩いているここも、歩いて行くそこも、そのまた先もずっと、空っぽが拡がっているとしたら、自分が箱詰めにされているかどうかも、分か

らなくなりそうだ。別に鉄の箱など使わなくても、私は、私の空っぽな頭の中にキッチリ閉じ込められていて、どう歩き回っても何処にも出られず、自分ではそう見えないが、そんな私の恰好は、小さな真四角かも知れない。
　そしてまた私は、人の中へ来た。家から約束の場所まで、迂闊にも私は、頭から溢れ出して、私の行く先にずんずん拡がって行く、私の空っぽの中を歩いていたようだ。そして、やっと、その空っぽの拡がる先に追い付いたようだ。どうしてかと言うと、裸同然に薄着の歳取った男女のペアが、自分達が何処へ行けばいいか分からずに、廊下をウロウロしているのに出会ったからだ。私は、その廊下の壁の窪んだ所にあるドアを開けた。その直ぐ上の天井には、見覚えのある雨漏りのシミが見て取れた。
　しかし、本当に空っぽに追い付けただろうか。たとえ追い付いたとしても、ドアを通り抜けるように、空っぽを通り抜ける事は出来ない。そこで折り返して、空っぽの中を行ったり来たりするだけだ。或いは、あれこれ邪魔が入って、そんな空っぽの事を忘れていられるかも知れない。しかしそんな時、空っぽは多分、恐ろしい勢いで空っぽなまま縮んでいるのではないか。また空っぽを思い出した私を、小さな真四角よりもっとひどく、決まって、ギリギリと締め付ける事になるのだから。
　さて、ドアを開けた部屋の中だが、机が二十脚くらい一つ一つ離されて、整

然と並べられ、机の上には、どれも同じ、コーヒーカップと菓子パンを一つ乗せた小皿が置かれていた。部屋には誰も居ない。私が開けたドアと向かい側の壁の引き戸が開いていて、その奥の部屋が覗けた。そのちょっと乱雑な汚れた感じのする中に、髪型に見覚えはあったが、よく知らない若い女が、向こうを向いて、何かしているのが見える。もうじきこの部屋で行われる、会議の準備かも知れない。しかしそれにしては、俯いてじっと立ち尽くしている。胸の方は見えないが、恐らくそこに両手を持っていって、何か縫い物をしているか、それとも、小さな壊れ物を接着剤でくっつけているのかのようだ。

ひょっとして、私は、私の空っぽを行き過ぎてしまったのか。その女の姿を見ていると、どうしてか、そう思えて来る。私は音を立てずにドアを閉め、そろそろと廊下を引き返した。ドアを開けてから閉めるまでが、何か咄嗟の出来事のようだった。やはりそこは、空っぽの一番端だった。それを背中に感じながら、もう空っぽからは出られないのだと思った。

廊下の突き当たりは脹らんでいて、ソファーが幾つか置かれている。ピンクのお揃いの制服の四人の女が、二人ずつに分かれて腰を下ろしていた。そこへ、その向こうから、揃って、火の着いた煙草を指に挟んだ、大柄で肉付きのいい、髪を短く刈り上げた、精悍で脂ぎった顔の、三人の男が近付いてきた。それらを見て、私は悔やんだ。私は、私の空っぽの中を、余りに無防備なまま、ほっ

たらかしにして通り過ぎた。そのせいで、私はバラバラになってしまった。居合わせた七人は、全て私だった。

三人の男は、煙草を吸いながら、女達と一番離れたソファーに並んで掛け、前屈みになって、早速、どうやって死ぬか、相談を始めた。

女達の内の二人は、話に夢中だった。後の二人は、全てに無関心なような、何も分からなくて不安なような顔付きで、黙ったきりだった。女は誰も、男など眼中にないようだった。女の話が聞こえてくる。

「この前、相手したの、高校の時の同級生の父親で…、」

「世間は狭いって…」

「わざわざ、遠出して、こんな所まで来て、働いてるのに…」

その一番しゃべっている女が、時計を見た。彼女は立ち上がり、柱を隔てた直ぐ先のドアを開け、中に入って灯りを点けた。中は、畳二枚半くらいしかない小さな部屋で、壁は金色だった。隅々まで蛍光灯の光が回って、廊下より何倍も明るかった。彼女が目で合図すると、後の三人も立ち上がり、四人とも中に入った。ドアは開けたままだった。

男達は、女が腰を下ろしていた方に移った。そこからは、長い廊下の向こうの端まで見渡せた。話は、死ぬ方法から次第に脱線し、彼らをそう考えさせるに至った元凶について罵り出し、直に愚痴の言い合いになった。ちょっと横を

向けば、女達の姿が見えるのだが、誰も見ようともしなかった。
　化粧を済ませた女達が、ゾロゾロと出て来た。廊下の暗い照明の下では、化粧など全くムダに見えた。女達は、綺麗な縦一列になって歩き出した。男三人が一斉に立ち上がり、女の列に一人ずつ割り込んだ。列は、女男女男女男女の順になった。
　死にたい三人と、まだまだ生きていたい四人。男と女で、まるで行く先が違う。七人は、何時まで経っても、廊下を行き来して、何処にも行き着けなかった。
　次第に外も暗くなり、私は疲れを感じて、立っていられず、ソファーに倒れ込んだ。私の頭の中の空っぽも、縮む一方だった。私は、鉄の箱の中にすっかり引き返すしかなかった。止まった時間だけが、何処かに積み上がってゆくようだった。幾ら積み上がっても、時間は、地層のようにはならず、ただ同じ色をしているので、時間などないようだった。
　会議が始まった。それぞれの机に一人ずつ、全く同じ恰好の私が、向かっていた。女が頻繁にコーヒーを注ぎに来て五月蝿かった。会議を進行する者が居なくて、部屋は静まり返っていた。廊下のドアを少し開けて、私はその様子を覗いた。まだソファーから立ち上がったばかりで、足元がふらついたが、七人を引っ張ってきて、何とか中に入れた。そうして、彼らに壇上に並んで貰った。

男達は、死ぬのを決めるまでの経緯について、三人、入れ替わり立ち替わりに語り出したが、どうも断片的で、別の事ばかり話しているようだった。女達の話は、あれやこれやの日常報告で、世間は広いようで狭い、というのが、唯一結論めいたものだった。

本来議題に乗せるべきは、どうやったら、この空っぽを処理出来るかだろう。しかし、この空っぽのおかげでここに居られる者ばかりでは、それは取り上げられそうにない。

コーヒーを入れ替えに来る女だけは、私ではなかったが、彼女には何の力もなかった。次第に彼女が、どうにも目障りになって、私達は皆、彼女から目を背けた。それで彼女も、引き戸の奥に籠もったきり、出て来なくなった。部屋は、氷の中に閉ざされているようだった。よく知らないあの女の体温で、辛うじてこの部屋は暖められていたのか。尤も、凍り付いても構わない連中ばかりだ。（二〇〇二年五月七日）

＊　＊　＊

無力

そこへ行く事は、もうない。行こうとさえ出来ない。そこからは、何も返って来ない。そこに向かって何も出来ないでいて、返って来るものなどある筈がない。そして、そのようなそこは、そのようであろうとなかろうと、ずっとそこにある。そこがずっとそこにあって、全く、そのそこだけを向いたまま、じっと止まっていてだけ、私は、自らがどのようであるかを、少しは知れる。少なくとも、知れているようには思える。

　その私はそこで、そもそもの始まりから、消し去られていた。消し去られていたので、却って、立ち入る事が出来たに違いない。尤も、立ち入ったと言っても、ただ、そこにそこがあると知れただけの事だ。それでも、私が私であるのは、そうしてそこに立ち入って、私がそこに居られるからだ。だから私は、何としても、そこに居るべきだろう。

　しかし、私は、そこで、初めから消し去られているのだから、何の前触れもなく、ごく当たり前の事として、何時でも、そこに立ち入れなくなる。そうして私は、すっかり初めから、そこに居なかった事にさえなってしまう。そして、そうなれば、そこに居られて、私は私であったのだから、もう私もない。

　そうして私がないのに、そこはそこにある。なぜなら、そこにそこが、何も変わらないである事が、知られたままだからだ。では、それを知るのは誰か。私を受け継いだ、私に似ているかも知れない誰かだろうか。そんな都合のいい

誰かなんて、居る筈がない、と考えるなら、やはりそれは、私であるとして引き取られるしかない。私である事を断ち切られてしまった私だろうか。私に起こる事は全て起こって、もうすっかり済んでしまった私だろうか。

それとも例えば、歩いている途中で首がなくなっても、首をなくしては、首がなくなったとも分からずに、そのまま歩いて行ってしまう者。いや、そんな事は、あり得ない。では、何があり得るのか。いや、今更もう、何もあり得なくていい。何もかも、なかった事にしてしまえ。しかし、そうはならない。あり得えなければならなくさせる力が、それを許さない。どうしてかは、分からない。いや、分かっている。そこがそこにあるままだからだ。その力に逆らえるものもなく、その力が、まだあり得るらしい何かを、根刮ぎにして、引き摺り回すままになっている。それをどう呼ぶべきか。他に誰も居ないなら、やはり、取り敢えずは、私と呼ぶしかなさそうだ。他に誰も居ない、ただ独り切りだと、知る事が出来るのは、私しかいない。決して他の誰かには出来ない。

さて、そこしかないのだから、そこへ向かってだろう、前へ前へ引っ張られている。しかしどうやら、少しも前に進んでいない。それなら後ろへも引っ張られているのだ。右にも左にも、引っ張られているかも知れない。ただ、ごく当たり前に前を向いていて、それで前に引っ張られているようにだけ、感じられてしまうのかも知れない。今に始まった事ではないに違いない。私はずっと、

あらゆる方向から何時も同じ力で引っ張られ、身動き取れずに来たのではないか。だからこそ安心して、前に引っ張られているように何時も感じながら、自らも前に進もうという気になれたし、前に進めているようにも思えたのだ。しかし実際には、止まったきりだった。

　もし、引っ張る力が偏っていて、そちらにばかり引っ張られていたら、私は逆に、動かずにいたいと思っただろうか。寧ろ、その引っ張る力を自分の力だと思い込んで、その先に何があろうと構わずに、自ら進んでそちらに動いて行けたのではないか。そして、そうなればもう、動こうと思う必要もなくなって、ただそうしていられる事を、晴れやかに受け入れられただろう。

　そうでなかった私は、ただ前に進もうという以外、何をして来たか。そんな私が、少しも前に進んではいなかったし、これからも、とても進めそうにないと分かってしまって、その先、何が出来るか。私を前に引っ張る力にだけ、私は惹き付けられて来た。それが私に何にもならないと分かって、私は、何を拠り所とすればいいのか。

　では、分からないままでいれば良かったのか。それとも、私について、分からない事が分かって、それを私は喜ぶべきか。どちらへも、気持ちは動かない。気持ちが動いたところで、前に進める訳ではない。前に進めているように思えるだけだ。徒労でしかない。徒労の繰り返しでしかないと分かっていて、出来

る事などあるだろうか。他も事も全てそうなのだ。前に進めているようなだけで、少しも前に進めていないなら、もう何も出来ない。

それなのに、どうしてか、こうして少しは書けてしまう。謎だ。書いている時だけは、前に進めているようにも思えていないのだろうか。しかしそうだとしても、徒労であるには違いない。それとも、書く事は、およそ徒労の内にも入らない、つまらない事なのか。そうかも知れない。徒労と分かっていても、余りに取るに足らなければ、惰性に任せる事も出来そうだ。しかし、惰性にも限りがあって、やがて書けなくなって、それに替わる事がなければ、愈愈私は、全てを諦め、身動き一つ取れなくなる。

いや、一体何を何を諦めるのか。始めから止まったままで、さも前に進めていて、私に係わる何事かが起こっているようでも、そう思えただけで、何一つ起こっていなかったなら、諦めなければならない事も、一つもない筈だ。

すると私には、手足も頭も胴体もなかったのだ。もしそれらがあるなら、私はそれだけ、確実に前に進めていた訳だから。もちろん、それらを入れておく、この世界というものも、ただあるように思えていただけで、始めからなかったのだ。それがあるように思えていた頃の記憶も、もう殆ど残っていない。ただ前を向いたまま、あらゆる方向から引っ張れている感じだけがある。

もし私が、こうして独りでなかったら、つまり、世界の中に入り込めていた

ら、私は、私を引っ張る力を使って、世界を動かせただろうか。まさか。世界の中では、私を引っ張る力など、全く無力に違いない。私は簡単に押し潰されてしまっただろう。つまり、私は、世界の中では生きられなくて、このように、その外に居るなら、せめて生き延びられる。それを、有り難いとでも思うべきか。生き延びたところで、大して嬉しくもない。馬鹿げた私の苦しみを、世界が嘲笑うためにだけ、私は生き長らえているようではないか。

いや、世界などなかった筈だ。幾ら、私が滑稽でも、そう感じるのが私独りでは、滑稽にもならない。同じように、悲惨にもならない。その他、どのようにもならない。このままで、もう何もやって来ない。何もやって来ないまま、ただ終わりだけが来る。そうだろうか、終わりは来てくれるだろうか。それがやって来るなら、私は、前に進んだ事になってしまうのではないか。

終わりさえ来ないのは、耐え難い。いや、耐え難さもやって来ない。それなら別に、終わらなくて構わないか。

では、私は、何処からどうやってここに来たのか。答えは簡単だ。私は何処から来たのでもない、ずっとここに居ただけのものだ。私は、何処からかやって来る事さえ出来ないものだ。ここはずっと私だけで、私は独りでここに居た。そのような私は、私は何処から来たか、などと言う問いが、馬鹿げたものになってしまう程に、無力であるしかないだろう。いや、無力でさえない。無力で

あるには、その力が問われる場所に、先ずは身を置かなければならないからだ。

で、この先、そんな私を、私はどう出来るのか。或いは、私でない何か別のものが、私をどう出来るのか。どのようにかしてくれるのか。どうにも出来ない。何もやって来ないし、どんな力も係われないのだから。

どのような展開も、反転も、新機軸も、どんでん返しもない。

それがどうした。所詮その私は、そこになければならない何かが、取り敢えず私と呼ばれて、ひょっこり出て来ただけのものだ。そして、何となくそれが、どうにかならなければならないものに、なってしまっただけではないか。そんな成り行きの私など、どうであろうとなかろうと、一向に構わないのだ。そうかも知れない。しかし、そんな成り行きの私の他に、何があるのか。いや、私など、もうなかった筈ではないか。

しかしどうやら、その私をなくしたそこが、そこにある限り、私もなくならないようだ。これが書かれるのも、そのせいだ。

私がなくなって、私をなくしたそこもなくなっていれば、もう一切は済んでいたのだ。

しかし、そこはなくならない。そこにそこがあると知られたままでは、そこはそこにあるままなのだ。そうなると、それを知る何ものかも、なければならない。それが、何かをあり得なければならなくさせる力であり、その力の振る

舞いが、取り敢えず、私と呼ばれてしまって、その私が、まるで何処かに居る者のようになってしまう。しかし、そのようにしてしか、そこがそこであると知る何かはあり得ない。で、そのようにして、私もなくならない。
なくならない私。私はどうなるのか。そこにそこがあるままでは、どうにもならない。そして、そこからはやはり、何も返ってこない。そこだけを向いたままでいて、一体私は、私の何を知れるのか。（二〇〇一年五月九日）

＊　＊　＊

邪魔

四角だとばかり思っていた大きな建物が、すっかり丸くなっている。少しの風で、転がり出すだろう。数え切れない程ある窓も、脹らみを帯びてすっかり円くなり、建物の壁に、ビー玉を撒いたように、散らばって嵌まっている。その幾つかは西日を受けて、燃えて溶け出すように、輝いていた。出入り口は、どれも、円く窄んでいって、土足が運んだ塵を吐き出して、すっかりなくなってしまった。窓は、脹らんだ一枚切りのガラスだけになって、開け閉めが出来なくなった。

　私はまだ、その建物の中に居るようだった。なぜなら、南側の、地面にかなり近い方の、かなりの角度で斜め下を向いた窓の中に、丸く脹れた私の顔が、やはりかなりの角度を付けて、逆さまに見て取れたからだ。顔は、褪せた紫色の中に、ポツンと浮き立っていた。レンズ状の窓ガラスによってデフォルメされてなくても、私は、建物と同じように、すっかり丸くなっているに違いない。その建物の中では、何であっても、丸くなってしまうに違いない。ただ他の窓の中はどれも、ただのっぺりした、色褪せた紫の闇であるだけだった。闇だけは、丸くならなくて済むようだ。

　外に出られなくて、正解なのだ。あんなに丸いまま外に出たら、急には元に戻れずに、私は破裂してしまうだろう。中にいるから、丸いなりに何とか、私の姿形を保てるのだ。しかし、明らかに私は、建物の外観全体を、ごく当たり前に眺め回していられる。であるなら、丸くなるのを免れている私が、建物の外に居るのではないか。そうであるしかない。それなら、あの窓の中の顔は、真ん丸に丸まったベージュのカーテンか何かの、皺か折り目が、たまたま、私に似た目鼻立ちに見えてしまうだけのものか。

　私は、建物を見る私の姿を探した。その丸顔の浮かぶ窓が正面に見える辺りに、必ず私は居る筈だ。そこを中心に、何度も何度も、探し回った。しかし、私の姿はなかった。人の姿もなく、他のどんなもののも、見当たらなかった。

ただ、その他のものがどんな姿形をしていたか、何であれ、まるで思い浮かばなくて、それで、何も見て取れないようでもあった。いや、では私は、人の姿なら思い浮かべていられるのか。私の姿さえ、それがどんなものか、すっかり忘れてしまっていないか。

　替わりに、同じ建物が、隣に見付かった。その隣にも、その後ろにも、その手前にも。それらは、屋外の地面の上にではなく、端まで見通せない程の大きな部屋の、純白に輝くツルツルの床の上に建っていた。そして、どちらを向いても端まで見通せないその先から、真っ白な光が流れ込んで来て、ただでさえ純白の床に反射すると、そこは透き通っているようだった。天井もまた、高過ぎて、見えなかった。だから、天井と言っても、ただ、上から光が来ていないので、天井があるように思えるだけにものだ。そうしてみると、部屋かどうかも疑わしい。そこに、全て同じ建物が、数え切れない程、縦横に整然と並べられていた。それらをずっと見渡していると、建物と言うより、巨大なカプセルにも見えてくる。

　そしてどれも、窓は、真正面を向いた一つ切りだった。慌てて私は、初めの建物を探した。それには、数え切れない程の窓がある筈だ。しかし、それは見付からなかった。

　そのそれぞれの、一つしかない円い窓を覗くと、中に必ず、真ん丸な私の全

身の姿が見えた。それらはどれも、宙に浮いていたが、それぞれ体の向きこそ違え、少しも動かなかった。そして、瞬き一つしないような、真ん丸に見開いた目で、それぞれの建物の内壁を、じっと見詰めているようだった。そこに、自らの影でも映っているのだろうか。その影を見失わずにいてだけ、そこにじっとしていられるのだろうか。もし、見失ったらどうなるのだろう。独楽のように、クルクル回り出して、自分の力では、止められなくなってしまうのだろうか。

そうして、それらの窓を順々に見て取れているからには、そうしている私が、その純白の床の上の何処かに、居る筈ではないか。しかし、建物の周りを、グルグル廻って幾ら見直しても、人の姿一つなかった。またも、私自身の姿を忘れてしまっていて、見付けようがないという事なのか。

建物から目を離して、ありもしないものをキョロキョロ探し回ったりしたからか、端まで見通せなかった筈の、だだっ広い部屋が、随分と狭くなっていないだろうか。灰色の壁と低い天井で、すっかり取り囲まれているようだ。

もう、建物とは呼べそうにない。並べられたカプセルの数も、かなり減った。更に、天井が次第にドーム状になり、床はすっかり輝きを失って、真ん中から丸く落ち窪んでゆく。部屋自体が丸くなってゆく。壁が曖昧にぼやけて、消えてゆく。壁を挟み撃ちにした床と天井の境は、もう初めから、はっきりしない。

そうなると、床も天井もなくなって、どちらを向いても、白っぽいくすんだ色の、丸い内壁であるしかない。つまり私は、それまでは窓の外から覗き見るしかなかった、閉ざされた真ん丸の中に、入り込んだのだ。姿が見えようと見えまいと、もう私自身を無理に探し回らなくていいのかも知れない。この中の何処かに、私は必ず居るのだから。

　そして、その内壁一面に、丸いカプセルがずらりと並ぶ。並ぶというより、上も下もなく、等間隔に散らされて、内壁にくっついている。その数こそ減ったが、前も後ろも、上も下も、右も左も、丸いカプセルに取り囲まれると、それらが一斉に迫ってくるようで、その数を数えようにも、目が回ってしまうだけだった。

　建物にしろカプセルにしろ、必ず窓があった。しかし幾ら探しても、内壁の何処にも、窓は見当たらない。その替わりと言っては何だが、何時の間にか私は、カプセルの窓を、一つ一つ覗いて回っていた。

　相変わらず、その中に、真ん丸の私の全身の姿が宙に浮いていた。そして、その私の体から延びた影が、そのカプセルの内壁に映っているのまでが、見て取れた。影はどれも、初め楕円に見える。本当は真ん丸で、脹らんだガラスを通して斜めから見るので、楕円なのか。

　しかし、更に窓に寄って見ると、そのせいで、窓から入る光の具合が変わっ

てしまうからか、カプセルの中の影は、大きく、形や濃さを変えた。すると、その自らの影をじっと見詰めていた、カプセルの中の私も、その真ん丸だった体を激しく捩らせるのだった。それだけではない。中の私は、そうして暫くすると必ず、もう宙に浮いているのが嫌になったかのように、その歪な影目掛けて、矢印のような形で、落ちてゆくのだった。しかし、決してその影には触れられない。急に向きを変えさせられ、無様にも、クルクルと渦を巻いて、また宙に浮き上がってしまうのだった。どの私も、カプセルの中で、皆同じ事をする。

何度も何度も見て回って、もうどれを見ても、中の私は皆、クルクルと回っていた。

それを見て回っている私だけ、どうして姿形がないのか。自らの姿を忘れてしまって探しようがないと言うのは、私が、地面の上や床の上に居る時の話だ。今の私は、真ん丸な空間の真ん中に、宙に浮いて閉じ込められている。そんな私の姿が知りたいなら、カプセルの中を覗けば、幾らでも知れるではないか。私もまた、それらと同じように真ん丸に違いない。その真ん丸な私を見付けて、影を映し、その影に向かって落ちて行きたいものだ。クルクル回るのも楽しいかも知れない。

姿がないなら、一つ作ったらどうか。私を取り囲んでいるカプセルは、その

材料として使えないか。実際他に何もないのだから、材料になるとすれば、カプセルしかない。試しに、一つ、もいでみた。果物のように、それは、姿のない私の掌の中にあった。幾つかもいで、それを合わせて一つに捏ねた。大きな丸い塊が出来た。そこから、窓が一つ浮いて出て、中を覗くと、中に真ん丸い私が居た。それでもまた、次々にカプセルをもいでは、塊にくっつけ、捏ねていった。そうして遂に、全てのカプセルを一つに捏ね合わせ、内壁はもう、ただぼんやり白いだけのものになった。

　すると、内壁に、今までなかった、円い大きな窓が出来ていた。私は遂に、外から覗き込まれる中に身を置けた訳だ。その窓を誰かが外から覗いて、私には見えない私の姿を、見付けてくれるだろうか。それともせめて、覗いて、私が捏ね上げた、大きな宙に浮くカプセルを、私だと思ってくれるのではないか。いや、カプセルが私の姿である筈はない。そのカプセルの窓から覗く、クルクル回っているものが、私の姿なのだ。外から覗く人は、窓の中のカプセルの、そのまた窓の中までを、見てくれるだろうか。

　いやそれとも、外から覗くと、このカプセルは、窓のあるカプセルの姿ではなく、丸い私の姿に見えるのではないか。きっとそうだ。そう思って、カプセルの中の私の姿を見直すと、それはもう、クルクル回る私の姿ではなく、窓のある丸いカプセルが、その真ん中に、じっとして浮かんでいるのだった。そし

て、その窓の中にまたカプセルがあり、その窓の中にまたカプセルがありと、それがずっと入れ子になって見えて来るのだった。
　そして、その何処までも奥深くへ続く入れ子が、逆に、それを覗き見る者、つまり私を、見返していた。それは、ぼんやりした内壁に映る、円い影だった。そうして私は遂に、これら一切を見る私の姿を突き止めた。それは、カプセルの影でもあり、丸い私の姿の影でもあるのだった。
　しかし、私は初めから丸い中に閉じ込められていた訳ではない。内壁に映るその影は、その丸い建物やカプセルの外観をどうやって見たのだろうか。その窓を、どうやって外から覗き込んだのだろうか。
　いや、外から内を覗いているように思えただけで、実は私は、初めから、その内側の影として、それらを見ていたのではないか。外からのように見られたのは、その影が、ちょうど窓に掛かって、窓から外に延びて出ていたからに違いない。
　私は、つまりその影は、内壁を移動出来ないか、試してみた。影が動いた。すると、私の捏ね上げたカプセルが、捩れて形を変えた。影の私は、自ら動く事によって、カプセルの形を色々に変えられるのだった。
　そうして、影である私は、窓に辿り着き、そこから半身だけ外へ、滑り出る事が出来た。その滑り出た外から中を見ると、その真ん中に、確かに、私の真

ん丸な姿があった。中からは、カプセルに見えたものだ。

しかし、その外は何処なのか。私は周りを見回した。そこでまた私は、丸い中に閉ざされていて、またその外から覗ける窓があるのだろうか。そしてその窓の外から中を見ると、中からはカプセルに見えたものが、真ん丸な私の姿に見えるのだろうか。そうして、入れ子のように、外へ外へと、膨らんで行くのだろうか。

それらしきものは何もなかった。その替わりに、四角い建物の外壁と四角い窓だけがあった。すっかり日が暮れていて、四角い窓の中に、私の姿が、微かに浮かび上がっていた。

その私の姿もまた、四角だった。何処か痛々しい程に、丸みを拒んでいるようだった。或いは、私から拒む前に、とことん丸みを奪い取られているようでもある。

明らかに私は、ちゃんと四角い出入り口のある、四角い建物の中の、四角い一室に居た。そして、四角い私は、もう決して、外に出ないと決めているようだった。だからこそ、頭も手も足もなく、ただ四角いだけなのではないか。

しかし、次の日の朝が来れば、他の人の仕事の邪魔になるので、四角い物専門の回収業者が呼ばれるだろう。運び出された私は、幾つにも四角く四角く解体され、他の細かな四角と一緒に廃棄場に山積みにされるだろう。そのゴミの

山が、もし丸みを帯びていたなら、せめてもの慰めとなるだろうか。いや、幾ら専門業者といえども、影までは運び出せない。影こそ私なのだ。その私は、ずっとこの建物の中で、解体もされず、四角いまま、ずっとここに残るだろう。そしてもう、丸いものには、永遠に出会えないのだ。その永遠さえ、決して丸みのない、四角いだけの永遠であるだろう。元々四角なら、それで何が不満なのか。不満だったところで、そこまで丸みに見放されては、不満に何の力も宿らない。（二〇〇一年五月十一日）

*　　*　　*

母親

見上げると空ばかりで、見下ろすと海ばかりで、黒っぽい砂埃を巻き上げている陸地なども、何処かに小さく見えていたかも知れない。そんな中のその人は、翼でも生やした積もりになって、自分がそこを飛んでいられると思った。そう思いながら、落ちる事もなく、そのままそこに居られるようだったので、多分、飛んでいられたに違いない。

海面は、様々な深い色が、彷徨うように湧いて出ては、入れ替わる。そこに、

小さな白い岩が、ほっそりと伸び上がっているのを、その人は見た。するとその人は、自分の飛び方が、相当に危なっかしくて、余程の幸運が重なって、やっと今まで飛べて来られたようもので、背筋が寒くなった。もう、一刻も早く、その岩のすべすべした天辺に、降り立ちたかった。その人は、翼を下に向け、どのようにか、一声啼いた。気が付くと、辺りには、濁った色の霧が掛かっていたが、その声に白い岩が振り返って、近付いて来るその人を、嬉しそうに見上げるのだった。そして、愈愈、その人が、その岩に留まろうとすると、岩は素早く身を躱した。その人の体が冷たい海面に落ちて、沈んで見えなくなるのを、白い岩は、甲高い笑い声を空一杯に響かせて、見送った。波が一つ来て、その人の事は忘れられた。

　霧が晴れると、その白い岩は、丸ごと、一羽のほっそりした白い鳥になっていた。その翼はまだ、一度も拡げられた事がないのだろう。塵一つ、着いていない。白く細い両脚まで見えるのだから、水掻きを使うのでもなく、どうやって、海面に浮いていられるのか。よく見ると、脚は海面から離れていて、小さな爪先を、小さな波が洗っているではないか。

　その白い鳥は、ひたすら何かを待つような目で、空を見上げるままだった。そして遂に、ずっと高い所を、同じ白い鳥が飛んでいるのを見付けると、真っ直ぐそこに向かって飛び立ち、二羽は並んで、水平線の向こうに消えた。

さて、すっかり忘れられてしまって、その人は、一体何だろう。海底の藻屑というヤツか。しかし、その人は元々何だったのだろう。実は、海に落ちる前から、もう跡形もなく消し去られて、この水と空気の世界から、追い払われてしまっていなかっただろうか。なぜなら、空を飛ぶのが下手だからだ。空は、飛ぶのが巧いものには、勝手に空を飛び回らせるが、一方で、鳥を岩と見間違うような下手糞には何も許さない、と言う事だ。

だから、その人は、初めから、殆ど何ものでもなかった。その人にしても、自分が何ものか、知らないままだったろう。いや、その人はその人だったのだ。ただ、それを、自分でも忘れてしまっていた。何時から何を忘れていたのかも、忘れてしまっていたに違いない。では、誰が、そこに居るのがその人だと、ちゃんと見分けたのだろう。その人の他に、そこに誰かが居られるものだろうか。

いやそもそも、自分に翼が生えていると思って、それでもう、空が飛べてしまう人からして、居る訳がない。それに、たとえ陸地が遠くに見えたとしても、全くただ海と空しかない所なんて、あるだろうか。風とか、波の音とか、光の色とか揺らめきとか、全くの静寂とか、熱いとか冷たいとか、必ず何か余計なものが、入り込む筈だ。つまり、その人もその人の居た場所も、初めからなかったのではないか。

そんな人の事を知っている私こそ、誰なんだ。その私こそ、忘れられてしま

っている。何時から何を忘れたのかも、忘れられている。では、誰がそれを忘れているのか。仮に、やはり私がだったにしても、私とは何だったろう。多分私とは、もうずっと昔に消されてなくなった誰かだ。そして、そのなくなった後に、他の誰かが私を引き継いで、その誰かが私を忘れているのか。しかし、私の事を忘れていて、どうして、私の事を忘れていると分かるのか。忘れられた私など初めから居なくて、誰も知らない誰かが居るだけではないか。その誰かをまた、取り敢えず私と呼ぶにしても、その私は、絶えず、誰かから遠ざけられるだけだ。

　しかしどうして、その消されてなくなった私が、忘れられたものとして、甦ってしまうのだろう。どうやって消されたかが分からない限り、恐らくは、分からないままに違いない。

などと考えている私を、私であると決め付けて、それでその私に、何か気の利いた事でも出来るだろうか。

　例えば、誰かに話し掛けて、言葉さえ通じるなら、私はその相手から、私の印象を聞き出して、その通りの人間になろうとは出来るだろう。そして、それが巧くゆけば、その人に私は、その私の印象に相応しい名前で、呼んで貰えるだろう。そうして、曲がりなりにも出来上がった私と、巧く調子を合わせて生きていって、いずれは、私が忘れられた人間である事も、たまたま頭の具合の

悪かった日に見た、変な夢に過ぎなかったと思えてしまうだろうか。しかし、やはり、そんな私は、拵え物でしかない。それらしい名前で呼ばれるような事を、幾ら積み上げたところで、一体それは、何処に積み上げられるのか。何処か隅っこの急拵えの土台の上に、積み上がっているのだ。よせばいいのに、そこに近寄って、積み上げたものを全て崩してしまって、また初めからやり直したりするのがオチだ。

私は、手当たり次第、何かの真似をし出した。その方が、手っ取り早そうだ。郵便ポストがあれば、それをよく観察し、優しく言葉を掛けてその来歴を聞き出し、すっかりその気になって、次の次の角辺りまで移動して、口を開けて、ずっと立っていた。

その足元で、たまたまドブ板が外れていれば、ドブの水の流れに、どうしても目が行く。私はドブの水と言葉を交わし、赤い服を脱ぎ捨てて、ドブの中を流れて行った。地下水路を、あっちこっち、どんどん流れて行く。しかし私は、自分が、狭い所を流れているのか、広い所を流れているのか、さっぱり分からない。空気に触れているかどうかも、分からない。殆ど止まったきり、ただ何処となく、延びたり縮んだりするようなだけだった。傾いたり、浮いたり沈んだりするのも、何となくしか分からない。どうやら、水になってしまえば、自分が流れているとは感じられなくなるらしい。

　すると私は、全身に様々な汚物を絡み付かせた、一羽の鳥だった。鳥は、ただただ水に潜ろうとしていた。もちろん潜っていたいからではなくて、そこから出たいからだろう。そうしてやっと、穴を潜れたようだ。そうなれば、また、水の流れに従って、重い翼で水を掻いて行くしかない。急に深くなって、真っ暗になった。どちらに進もうにも、鉄格子に阻まれて進めない。上に上がっても、硬い平板な感触だけで、水の上には出られない。息が苦しくなる。見下ろすと、鉄格子の一ヶ所が光っていて、その向こうから微かな光が差しているのが、見て取れる。鳥はまた潜った。しかしそこに、長く鋭く太い針が、斜めに出ていた。嘴をその針が貫き、鳥は、水の底で身動き取れなくなった。下手に翼を拡げようものなら、嘴を中心にして体がクルクル回ってしまう。

　微かな光に照らされた翼は、緑色のようだった。元々は別の色だろうが、緑色のドロドロの塗料にまみれているようだった。それを目にすると私は、頭を水の上に出していて、翼を激しく羽ばたかせていた。

　鳥の頭の中に、私と私でないものがあるのを感じた。私でないものとは、もちろん鳥の心だろう。すると私は、鳥ではなかったのだ。鳥にとって、私は、勝手に入り込んできた邪魔物に違いない。鳥の体は弱る一方で、その上に、鳥からすれば、何だから分からないものに勝手に入り込まれて、もう何もかも嫌になっているだろうか。何処からか、ひどく冷たい風も吹き込んで来る。

私は、鳥の心にそっと触れ、慰めようとした。すると鳥は、全身をブルブルと猛烈に震わせて、緑のドロドロを振り払った。そして、すっかり真っ白になって、美しい形の嘴にサクランボを銜えて、口移しで、私にそれを食べさせようとするのだった。しかし、私には、口も胃袋もない。サクランボは何処からか、私の心の中にポトリと落ちた。私の心は空っぽのようだった。

するといきなり、鳥の嘴は、尖った針に次々に刺し貫かれて、興奮したハリネズミのようになった。鳥はまた、全身汚物にまみれ、のたうち回った。その針に、皮を破られたのかも知れない。サクランボが、その実をとろりと外に出すと、そのとろりとした中に、私の心は、ゆっくりゆっくり丁寧に、溶けて行くようだった。

しかし、そのサクランボは、傷一つなく、綺麗なままで、白い小皿の上に乗っていた。みるみるサクランボの数は増えて、どれが私か、分からなくなった。私はその中の、一つだけぬるぬると光る、サクランボだった。若い娘がそれを口に含み、舌で散々転がして、次第に柔らかくなる皮が破れる寸前に、それをまた皿に戻した、サクランボだった。

そこは、大抵の大人であれば、身を屈めなければならない、天井の低い、造り掛けの地下室だった。汚れた作業服の大柄な男が、一人だけで、床にコンクリートを流し込んで、それを黒いゴム手袋をした手で均していた。作業用に渡

された板の上に、サクランボの小皿は置かれていた。

男は、まだ仕事の途中だったが、何となく口元が寂しい。手袋を脱いで、女の唾液まみれの私を、口に含んだ。女の唾の味が口に拡がり、その匂いが鼻を突き通って、目の前にまで拡がった。男はそれが嫌で、急いでサクランボを噛んだ。女の唾の匂いの中から、サクランボの香りが湧いて出て、女の唾の味を端っこに追い遣った。

　それで、男は、忘れてしまっていた自分を、思い出した。ただ、自分を忘れてしまってからの事は、よく思い出せない。恐らくは、他人にいいようにこき使われていたのだろう。そして、男は、自分を忘れるしかなかった苦しみまで思い出した。男はそれにずっと囚われていて、その果てに自分を忘れてしまうしかなかったのだ。しかし、何が男を苦しめたかまでは、思い出せない。思い出せないままに、またそれが、彼を襲うようだった。

　それなら、男は、また、自分を忘れられるだろうか。いや、一度使った手はもう通用しない。そんなうまい話はない。どうしていいか分からず、全くの苦し紛れだったので、自分を忘れられたのだ。しかし、もう自分を忘れられないで、どうして耐えられるだろうか。死ぬしかない。彼は、ただでさえ焼けるような苦しみを、頭の一点に集中させて、自らの頭を焼き焦がして死んだ。その体は、まだ乾いていないコンクリートに倒れ込んだ。

暫くして、その家の者が異臭に気付く。警察が来て、床が剥がされる。その家の者は誰も、地下室など知らない。腐った大男にも、心当たりはない。俯せに倒れ込んだおかげで、男の体の前半分は、綺麗に型が取れている。早速、男の姿が等身大に復元され、尋ね人の看板と一緒に、通りに置かれた。しかし、その顔を知る者はない。

初めに気付いたのは子供達か。唇の形がちょっと変だ。吐き出され掛けたサクランボのせいだ。子供達は、その変な唇の形を真似たりした。一人の子供が、家に帰ってそれをやると、母親は、眉を顰めた。それきり母親は何も言わなかったが、子供は気圧されて、二度と真似しなかった。（二〇〇一年五月十三日）

＊　＊　＊

粒子

金色の光を運ぶ風が、ビロードのカーテンの向こうから吹き込んで来る。光に触れると、ビロードは白く染まる。穏やかに波打って、そこだけが、別の、ずっと遅い柔らかな時間が流れているように、その形を、ゆっくりと滑るように変えて行く。ビロードの表面に当たる光の角度も絶えず変わって、そのハイ

ライトの輝きは、すっかり透き通っているようで、そこに流れる時間を優しく撫でさすり、すっかり手なずけているようではないか。

　しかし、私はそこに居ない。それが見える所にさえ、もう居ない。私をそこから引き離したのは、何だったか。ただ最後に私は、そのハイライトの輝きが、その遅く柔らかい時間の中で、その時間とはおよそ相容れないようなものを、撫でさするのを見た。それを見て私は、私独りだけの全く動かない時間の中に、身を強ばらせたのは確かだ。そして、そこから見ると、そのハイライトが撫でさすったのは、折角金色の光を受けても、輝くどころか、却って濃い影を刻み、そのゴツゴツした形を浮き立たせたきり、少しもその形を変えない、硬い棒のようなものだったろうか。それは何処か獰猛だし、愚鈍なようにも見えた。ビロードは、自ら進んでそれに巻き付いて、搦め取られて行くようだった。確かそこは、高い壁の、何も嵌まっていない四角い大きな窓枠で、ただその壁の、見た事もないような厚みだけを、際立たせていた筈だ。

　その壁も、もう見えなくて、私の居る所は、ただ真っ平で灰色だった。私は、ずるずると滑るように後退って行く。一面、薄い灰色に濁った、冷たい水が張られている。水は、その灰色の濁りの成分によって、腐る事もなく、地下から汲んだばかりの味を、ずっと保っているに違いなかった。その水が、後ろへ後ろへ流れていて、私は押し流されて行く。いや、水は踝までしかない。その流

れも、目で追える程ゆっくりで、そんなものに押し流される筈がない。

　それでも、後退るしかない。立ち止まってみれば直ぐに分かるが、水はどんどん冷たくなる。堪らなくなって、二、三歩後退ると、水は温かく感じられる。ちょっと冷たいだけで、膝が逆向きに折れるようだ。もう、立ち止まる事など、思いも寄らない。

　私の目は、何時も、カーテンを最後に見た方を向いている。決してそこから目を離さない。しかし、何処までも灰色の水面で、何の目印もなくて、果たして本当にそちらを向いているのかどうか。時間が経つ程、疑いは増す。

　しかもそこは、穴だらけなのだ。まさか後ろを振り向く訳にはいかない。尤も振り向いても、ただ灰色の水面が続くだけだろう。ただ、振り向いた事はないので、そうとも決め付けられないが。私としては、前を向いたまま、足の裏で、穴の縁を探り取って、避けて行くしかない。穴の大きさは、肩幅より少し広いくらいで、穴を見付けては、少し脚を開いて、穴の縁を、左右とも順々に辿るようにして、注意深く後退る。ただ情けない事に、巧くやり過ごした事など、数える程しかない。それも、カーテンを見失ってからほんの暫くの間だけで、今では幾ら慎重にやっても、必ずどちらか片方の脚を踏み外して、斜めになって、穴に落ちてしまう。そして、必ずその穴の縁に腰をしたたか打ち付け

るので、もう腰の感覚がない。
　穴は深い。少なくとも私の身の丈よりは深い。私は頭まで水に浸かって、中でクルクル回る。ここで何回転したかを、絶対に、正確に数えておかなければならない。数える事だけに神経を集中させたいので、回るのを止めようと、こちらから下手に、穴に触れるような事はしない。心臓がドキドキしてくる。水がどんどん冷たくなる。体は硬直してゆく。
　硬直したせいでか、体は却って、水を切る事が出来るようで、回転する力によって、体は水の上に押し上げられる。まるでミサイル発射だ。しかしそれはほんの一時で、先ず上半身が暖かい空気に触れた途端、それはまた元のフニャフニャに戻って、まだ冷たい硬いままの下半身の方が、勢いが付いたままで、頭より上に尻が持ち上がってしまい、最後に両脚を跳ね上げて、それから全身がフニャフニャになって、巻き取られた絨毯のようになって、穴の脇に投げ出される。それをまた真っ直ぐに伸ばして、立ち上がらなければならない。水はまた、どんどん冷たくなる。心臓がバクバクして、目が回る。しかし目が回るのは、巻き取られた体が元に戻っているからだ。後は、心臓が破裂するのが先か、体が真っ直ぐに起きるのが先かの競争で、今までのところは、何とか生きて戻れた。
　起き上がっても、暫く力が抜けたままで、水はまた、少しも待ってはくれず、

どんどん冷たくなる。しかし、何よりも先ず私は、穴の中で何回転したかを思い出し、正しい体の向きを決め、その遥か前の方に見えていたカーテンの姿を、ありありと思い浮かべなければならない。ただ冷たい灰色の平面のその一ヶ所だけを、その向こうから優しく暖かい光が差しているかのように見て取って、その光の具合を、鉄で出来た機械装置でも据え付けるように、そこに固定しなければならない。そうしてからやっと、もう冷え切ってすっかり感覚をなくした脚を引き摺って、また後退るのだった。

　その第一歩目でもう、明らかに、疲れが増しているのが分かる。それまでの疲れよりも、一段重い感じがして、今まで知れなかった深い所まで達しているような、何も寄せ付けない、ただ疲れであるだけの疲れだ。そして、その何もない静か過ぎる深みに身を置いて、私の体は、それまでより一回り、縮んでいるに違いないのだった。

　相変わらず踝までしかない灰色の水面しかなく、穴の大きさもずっと、肩幅より少し広いままで、小さくなったのは、全く確かめようがないのだが、それでもきっと、水位は少しずつ下がり、穴も少しずつ縮んでいて、私の体は、それだけ小さくなっているに違いないのだ。今までにない新しい深い疲れの元を辿って行くと、必ず、私の体が、前より少し縮んだ感じに行き着くしかないからだ。

そんな筈はない、私の体は同じままだ、などと無理に決め付けたりしたら、どうなるだろう。恐らくは、忽ちに、この灰色の平面だけが、みるみる小さくなって、私は、もうとても、そこに足を着けていられなくなって、何もない宙を、ただ前へ前へ泳いで行って、私の体に見合った、もっとずっと大きな星を、何処かに探しに行くしかなくなるだろう。

いや、そんな妄想に係わっている場合ではない。私はこのまま縮んでいって、どうなるのだろう。同じ事を繰り返した果てに、もうこの世界に存在出来ないまでに小さくなって、消えてなくなるだけではないか。何のために、穴に落ちては、毎回毎回、冷たい思いをして、あの、心臓をバクバクさせて、深く深く、疲れを溜め込むのか。もう一度だけ、金色の光に触れて白く染まる、ビロードのカーテンの揺らめきを見たいからではないか。それが、行く行く、ただ消えてなくなるしかないような事を続けていて、どうして望みを失わずにいられるだろう。

もう一度、よく前を見ろ。目を覚ませ。灰色の水なんて、初めからないんだ。穴はある。落ちたんだから。そしてそこに、灰色の水が溜まってはいる。それだけだ。後退る理由なんて、ない。

もっとよく見ろ。地面はすっかり透明で、お前の前には、真っ直ぐ縦一列に穴が並んでいるだろう。どの穴も、灰色の水を一杯溜めて、遠く小さくなって

見えなくなるまで、続いているだろう。その穴の列の他に、穴はない。つまり、右でも左でも、一歩横にずれて、後退っていたら、一度も穴に落ちずに済んだ筈だ。それとも、穴だと思って落ちたから、そこに穴の列が出来たのか。もしそうなら、その少しも曲がっていないのを彼方まで見晴らして、自分の仕事振りに、大いに満足すべきだ。

私は走っていた。もちろん前に向かって。穴に溜まった灰色の水の上を、ピョンピョン跳ねるように進んでいた。そして遂に、列の一番遠い先のその向うに、小さく輝くものが見えたのではないか。グングン近付いて行く。しかし、何時まで経っても、その輝きは小さなままだ。色も分からない。

私は手を伸ばした。私は行き成り、何かを掴んだ。柔らかい布のような感触ではないか。しかし私は、何も掴んでいない。その替わり、私の頭だけが、カーテンのように柔らかく揺らめき出した。首から下はどうなっただろう。硬く強ばって、何もない所を、真下に向かって落ちて行くようだ。

金色の光を運ぶ風だけが来た。風は頭の中にだけ吹く。頭の中にだけ、遅い柔らかい時間が流れる。体はまた硬くなって、ますます速く、落ちて行くようではないか。

頭の中に、白いビロードのカーテンの、私が見た最後の姿が浮かぶ。金色の光を受けて、またあのハイライトが透明に輝く。体はもう、どれ程深くまで、

落ちて行っただろうか。光を受けて影を刻み、その形を浮き立たせて、カーテンに触れられるのは、体しかないのに。

　私は、また後退っていた。足を踏み外し、穴の縁に腰をぶつけて、灰色の水の中に全身を沈めた。しかし、今更そんな事をして何になるのか。幾ら灰色の冷たい水を掛けても、あのビロードのハイライトは、全く水を弾いて、透明に輝くままだ。それが、頭の中だけで揺らめいて、触れる事も出来ない。

　そう言えばもう、体がクルクル回る事もないようだ。体は本当に、何処かへ落ちて行ったままなのかも知れない。それでもう、水が冷たいとも感じられないのだろう。では、ここが最後の穴なのか。ここでまた私は、私独りだけの全く動かない時間に閉ざされて、何処に行く事もないのか。もう二度と、あのビロードの輝きを、この目で見る事も、それに近付こうとする事さえも、出来ないのか。ただ頭の中だけで、あのビロードのカーテンが、金色の光を受けて揺らめいて、あの濃い影を刻むものと絡み合って、遅く柔らかい時間の流れの中で、ありとあらゆる姿を見せる。

　いや、そのビロードの姿は、決して、私の頭の中で揺らめいているのではない。私の目の前の、灰色に水を濁らせる成分の、粒子の一粒一粒が、そのビロードの姿なのだった。何処にも目を背けられる場所はない。幾ら強く目を閉じても、目の中までが、その灰色の水の中だった。（二〇〇一年五月十五日）

*

*

*

掌

部屋は、窓一つない、四面の白い壁で囲まれている。それなら光は、天井から降りて来るのだろう。首と肩の筋が強張って、上を向けない。目だけで見上げても、壁ばかりで天井は見えない。白い光が、部屋中に回り過ぎて、却ってその白さを曇らせている。部屋には何も置かれていない。何処にも影がない。影を帯びるとしたら、壁しかないが、四面とも同じ明るさで、その境目も見て取れない。だから、なぜそれを四面と分かるのか、不思議だ。

部屋の真ん中で、首と肩の筋を強張らせて立っているのは、一枚の布で出来たような白い服を着た女だった。長い髪を編んで、それを塔のように、頭の天辺から真上に突き立てていた。その重みで、上を向けないのだ。下も向けないし、首を傾げる事も出来ない。その高い髪型を垂直に保ってだけ、よろけたり倒れたりせずにいられる。

何も置かれていない筈なのに、正面の壁の下の方に、黒いものが見える。動いているところを見ると、男に違いなかった。モノが置かれていない替わりに、

男が居るのだ。男は黒尽くめで、壁に背を凭せ掛けて、しゃがんでいた。男の腰に隠れて見え難いが、脇に、小さな瓶が三つ四つあるようだ。男は、それに手を伸ばしては、暫くして、その手を口に運ぶ。

　女は、それと似たような男が、壁の前に一人ずつ、合わせて四人居るのを、思い出した。それで壁も四面と分かるのだ。そして、女は独りで、その四方の四人を監視しなければならないのだ。そのためにだけ、この部屋に居るに違いない。

　その役割を果たすには、自分も、黒尽くめであるべきだったろうか。いや、白い服を着ていても、その下の黒が、上っ面の白を呑み込むようだった。ただ、男達からは、女が向きを変える度に、特にその布地がヒラヒラする辺りが、赤く燃えているように、見えていないだろうか。

　女は、膝は伸ばしたきり、爪先と踵を交互に浮かせてだけ、体をじりじりと回転させてゆく。もう、ずっとそうしているのだ。

　四人の男達は、皆黙ったきり、直ぐ脇の同じような瓶に指を突っ込んでは、摘み出せるだけのものを摘み出して、その指を、そのまま口に入れる。女は、目が回らないように注意しながら、ゆっくり回り続ける。何時からこうしているのかは、女にも分からない。男達は、何かモノを喰っているのだろうか。下顎が、微かに左右に動くようではある。それとも、空っぽの瓶に指を突っ込ん

で、食べる振りをしているだけか。四人共、顔も体も、部屋の真ん中の彼女の方を向いているが、彼女の姿を見てはいないようだった。たまに目が合うように思えても、それは、目が合ったのではなく、ただ、目の向きが、真っ直ぐ向き合っただけで、四人の視線は、決して女には届いていない。

　それでも、四人は、少しずつ腰を捻ったり、首を傾げたり、膝を折ったり伸ばしたりして、女が一回転する間に、何処かその姿勢を変えたので、女はそれを、一つ前と比べて、或いは、二つ前、三つ前、四つ前と比べて、その変化を頭の中に順々に並べて、そこに一繋がりの動きを描き出したりしていれば、退屈はしなかった。しかし、段々に慣れて、易々とその変化を見て取り、殆ど頭をぼんやりさせたままでも、四人それぞれが、ちゃんと区別され、実際に目で見るように、女の頭の中で動き出してしまうと、やはり自分は退屈しているのではないかと、自問してしまうのだった。

　もし退屈しているなら、その退屈から逃れるために、何かが求められているに違いない。それは一体何だろう。そうして思い至ったのが、この部屋がどんどん寒くなる事だった。左腕だけ、まるきり肌を剥き出しにしていた。首に、幅の広いマフラーでも巻いたようで、顎の先や耳たぶの下半分まで覆っていた。その顔を除けば、肌を出しているのは左腕だけだ。その肌が、凍て付いてヒリヒリしたりすれば、その痛みをじっと耐えながら、顔色一つ変えずに、そのまま

まの姿勢で回り続ける事に神経を集中させて、退屈しなくて済む。そう思うだけで、左腕だけが冷たくなってゆくようだった。試しに、左腕をそっと動かしてみる。痺れているようにも感じられる。

　絞り出すような、小さな短い音がした。それは、今、目を離したばかりの壁の方からだ。しかし、振り向いたりは出来ない。残りの三つの壁を、何もなかったかのように、同じペースで、ゆっくり順に見渡してゆく。そうして一回りして、その壁に目を向けた。

　男がじっと、自分の掌を見ていた。掌に何か吐いたのか。しかし女には、自然に曲げられた指と、下を向いた手の甲の一部しか見えなかった。音といい、男が何かをじっと見入る姿といい、全く初めての事で、退屈への疑念は吹っ飛んだ。女は動きを止めた。暫く、その男だけを見ようと思った。すると、その男は顔を上げ、明らかに今度は、彼女に視線を投げた。男は、女の目を見た。そして直ぐに、男の視線は、女から見て、右に流れた。そこで急カーブを描いて、女の体の後ろに消えた。直にそれは、カーブを描いたまま、女の左側に現われた。女は、その軌道を辿らずにはいられなくなった。それは、彼女がもう一回りする事だ。

　そのようにすると、残りの三つの壁から、男の姿が消えていた。替わりに、何もない壁を、隅々まで見詰めなければならなかった。その真っ白なだけの眩

しさに、女は眉を顰めたが、眩しさは、その白の中に奥深く潜むような翳りを、浮き立たせもした。

そうしてまた、男に戻った。男は、瓶に手を伸ばしていた。その目も、元のように、何処を見ているか分からない。女の体はそこで止まらずに、また次の壁に向かった。また、男達がしゃがみ込んでいた。しかし、三人はどれも、じっと彼女を見詰めていて、薄笑いさえ浮かべるのだった。

女は、自分の心の中は、すっかり空っぽだと知っていたが、その自分にも見えない、心の底に微かにこびり付いた何かを、男達に見透かされているように思えた。少なくとも三人の薄笑いは、それを見透かしている積もりになっている、薄笑いに違いなかった。

やっとの事で、一回りすると、白い壁しかなかった。女は、左右と後ろの三人の、男特有の粘り着くような笑い声を聞いた。明らかにそれは、女に浴びせられたものだった。その声が、女の背中を押した。女は、正面の何もない壁の方に歩み出した。

恐ろしく冷たい空気が、左腕の肌を刺した。その痛みに耐え切れず、前に進もうとしても、女の体は、凍て付いて動きの取れない左腕を軸に、くるりと回り、止まれなくなってしまった。回る速さもコントロール出来ない。速過ぎる。壁が、ぐるぐる回って見える。男の姿は目に入らない。一人残らず消えたか。

目が回って気持ちが悪くなり、足元がふらついていても、凍て付いた左腕に、全身が支えられているようだった。
　そうして、グルグル回って見える白さは、それまでと全く違っていた。白いのはほんの上っ面で、その奥に、何処までも黒が占めているのが、ちゃんと見えた。いや、壁はもう真っ黒だった。ただ、それが壁であるためにだけ、その表面が、白い筈であるのが必要なようだった。その白がなければ、壁もなくなり、黒は暴発して、女に襲い掛かり、女の体を吹き飛ばすだろう。
　しかし、そうして黒ばかりであればある程、その表面も、純白の輝きを増すようではないか。そして、その四面の輝きの中に、一つずつ、女の姿が映る。どれも、腰と両腕をデタラメに振り回しながら、床も壁もない真っ白な中を、方向を定めず、デタラメに走り回るようだった。動きが激し過ぎる。骨が砕けて、体がグニャグニャになってしまうのではないか。
　しかし、部屋の真ん中では、相変わらず、動かない左腕に支えられて、女は同じ所を回っていた。
　部屋は縮んでいた。映された女の姿ごと、四面の壁がどんどん迫ってくる。直ぐ手の届く所まで来た。女は、動かない筈の左腕を、壁に突っ込んだ。女は、左腕だけになった。顔はお面で、布に覆われた中は空っぽだった。元々、左腕だけだったのだ。そうして、その左腕は、動き回る四つの自分の姿を、壁から、

殆ど同時に引っ張り出した。四つが一つになった。その勢いに弾き出された左腕は、何処かにクルクルと飛んでいった。

部屋は縮んで、遂に一つの点になって、見失われた。しかし女は、それで終わった訳ではない。その見失われた一点の中で、男の腕によって、八つ裂きにされた。頭と、胸と、腹と、背中と、両腕と、両脚の、八つに。

しかし、それで女は終わった訳ではない。寧ろ、八つ裂きにされたおかげで、女の体は、見失われた一点から、外に弾き出された。そのバラバラの八つを、女の左腕が拾い上げて、ガラス瓶のような、小さな透き通った部屋の中に放り込んでいった。

黒尽くめの、しゃがみ込んだ男が、自分の掌を見詰めていた。今、胃の中から吐き出されたばかりのものだった。どれも皆、少しも噛まずに呑み込んだものので、溶け掛けていたが、まだ半分くらいは形があった。見詰めている内に、それらは次第に透き通って、ちょうど掌に掬い取れるだけの水になった。

辺りが冷たくなって、水は、掌の形にすっかり凍った。男はそれを、真っ直ぐ前に、力を込めて投げた。氷の砕ける、高い短い音が響いた。

男は、しゃがんだ腰の直ぐ脇の、小さな瓶に指を突っ込んだ。そこから、自分の指と同じくらいの長さの、女の脚を摘み出して、口に入れて、暫く転がしてから、呑み込んだ。次ぎには、自分の手の甲の半分くらいの、女の背中を摘

み出して、口に含み、また、グイと呑み込んだ。
八つに裂かれた、小さな女の体を一通り呑み込むと、そのままじっと待った。悪寒がして、吐き気が込み上げる。全てを、片方の掌で受けた。それはまた、水になって、氷になって、真っ直ぐ前に投げ付けられて、割れる音を響かせた。
何度も何度も、同じ事を繰り返していたが、風の鳴る音がして、空っぽの目の前がひらけた。見ると、そこに氷の壁が出来ていて、中に、女が埋まっている。人並みの大きさだ。白い左腕だけが、外に食み出ていた。
男は直ぐ、痺れる腰を上げて近付き、その剥き出しの肌にかぶりついた。冷たくて苦くてざらざらしていて、つまりはひどく不味い。舌が痺れ、歯茎の感覚もなくなった。氷の中で女が笑った。なぜ笑えるのか。氷の壁が震え、キーンと鋭い音を響かせて、その甲高い笑い声を、男の耳まで届けるようだった。
（二〇〇一年五月十七日）

＊　＊　＊

神経

ドアを、羽根のように軽い手付きで閉めて、そのまま、二、三歩、後退った。

縦に長い楕円のドアで、銀色に輝いている。ちょっとでも、そのドアの方に戻ろうとすると、ドアは、熱で溶けるように、捻れてしまうようだった。後退る分には、何も変わらない。ドアの周りは、ずっと鏡が張ってあって、ギラギラしている。鏡に映る部屋の中は、ギラギラしたもので溢れていて、それらが、ゴチャゴチャと入り組んでいるようだった。私は、やっとの事で、私の姿を見付けた。鏡の中で、私は、銀色一色に輝いていた。

　しかしどうやら、突っ立っているのは、私だけのようで、腰を下ろす事にした。尻が床に着くと、床は何処か丸みを帯びているようで、その丸みの感触から、ひどい疲れが襲って来て、そのまま横になりたくなった。両腕をつっかい棒のようにして、何とか上体だけは起こして、楕円のドアと向き合った。

　その正面の壁は、全面が鏡張りで、こちらに傾き掛かっているようだった。見上げると、大きさの微妙に違う、円い窓が、高い所に四つ並んでいた。その内、三つからは、その奥の部屋の、白っぽい低い天井しか見えなかったが、左から二番目の窓からだけ、人の姿が覗いていた。ふさふさした白髪の男で、横向きの上体を、少し前屈みにしていた。見えるのはそれだけだが、その首や肩や腕の角度からして、どうやら椅子に腰掛けて、机に肘を乗せているようだ。顔だけ窓に向いていて、私の方を見下ろしている。彼の二つの目は、銀色に輝く点にしか見えなかった。それが鋭く輝くのは、私の体を映しているからではない

か。

楕円のドアが、独りでに振れだした。振れるだけでは飽き足らないのか、ビリビリと、電気が走るような音を立ててきた。窓の男の目の輝きが、また一段と鋭くなる。音は、床の震動からも伝わってきて、どうにも耳障りになった。堪らずに私は、投げ出していた脚を引いて、取り敢えず、膝立ちになった。音は遠ざかったが、なぜか体に全く力が入らず、私は、そのまま仰向けに倒れるしかなかった。左から二番目以外の、三つの窓のどれかで、男とは別の、ほっそりした人影が掠めて行かなかったか。

　ドーム状の、何処となく狭い感じのする、真っ白な丸天井と向き合った。しかしそれは、直ぐに、三方から、三つの黒いぼんやりした、大きな影に犯された。顔も体も、真っ黒な塗料を塗って黒光りする、性別も判然としない三人の人物が、私を取り囲んで、私の顔を覗き込むようだった。

　その白と黒は、正三角形の安定した構図となって、ずっとこのままかと思えた。しかし、構図は、橙色の強い光によって、台無しにされた。ライトが、私の顔を、間近で照らしたようだった。体が、持ち上がるのを感じた。額に、硬く冷たいものが当たった。金属の触れ合うような音を聞いた。全身に強い力が掛かって、寝かされたまま、押さえ付けられるようだった。少しだけ眩しさが収まったようでも、見て取れるのは、三つに分かれて揺れる、橙色の拡がりだ

けだった。いや、その三つの隙間の向こうに、白と黒の、丸と三角の構図が、まだ生きていた。確かにそれが、垣間見えた。そうに違いない。

両腕を引っ張られるようだった。手の甲と掌を貫くような、燃えるような痛みを感じた。首をどのようにか捩って、両目を目一杯見開くと、その私の視線が、どんなものでも刺し貫くように、硬く鋭くなるのを感じた。それは、真っ直ぐに矢のように進んで、白い丸天井の天辺に達した。その辺りだけは、まだ一度も、黒にも橙にも犯されていないに違いなかった。そこだけは、ずっと真っ白なままだ。

起き上がって、手を差し伸べれば、そこに手は届いて、その内向きの丸みを、撫でる事さえ出来そうだ。どうしてだか、そう思えてしまう。それとも、そんなおかしな事しか、もう、思い付く事は残っていないだけか。まだ何か、カチャカチャと音は聞こえている。三人は、余程念入りに、私の体を動けなくしているようだ。

しかし、私の体は、羽根のように軽くなって、起き上がって行けるのだった。それを阻むものは、何もない。私は、顔を真上に向けて、直ぐ目の前の、その天井の最後の白を、手首をぐっと外に曲げて、両掌にそっと掬い取るようにした。

両掌が、掬い取る形のままで、またひどく熱くなった。それで、その手の痛

みに、幾ら、体の他の部分がのたうち回っても、掌だけは、びくともしないのだった。私は、のたうち回る全身の勢いを使って、一本一本、端から順々に、掌から指を引き剥がしていった。

ただ、そこで折ってちぎろうとしても、ダメだ。引き剥がされた続きは、腕に繋がって、首に繋がって、胸に繋がって、背中に繋がって、腹に繋がって、脚に繋がって、爪先まで届いた。そうして、私の体は、くねくねした縦に、別れ別れになった。私の体は、くねくねしたままの、十本の紐だった。

天井の最後の白が、遠ざかって行く。十本の紐の私の体は、十本の鋭い痛みだった。それは、白が遠ざかるのをどうにも出来ず、同じ所を、グルグル動き回るしかない。それぞれ勝手な動きで、空中の狭い中に入り組んでいるようだが、触れ合う事も、ぶつかる事も、こんがらがる事もない。もちろん、その十本は、形も大きさも違う。どれがどれか、あれが左の小指から、あれが左の薬指から、あれが右の人差し指から、ずっと一繋がりに私の体を裂いたもの、と直ぐに分かる。形や大きさだけではない。その痛みも、一つ一つ違っていて、くっきりと区別された。

橙色が取り払われた。冷たい闇が、目を押した。しかし、目玉もまた、十個に裂かれた筈だ。闇は、何処からどう目を押すのだろう。闇は、どんな形だろう。

闇は、一個の閉じた丸のようではないか。その中を、十本の痛みが、銀色に輝いて泳いでいる。泳げば泳ぐ程、銀色は研ぎ澄まされて行く。燃えるような痛みの方が、よっぽど増しだ。研ぎ澄まされた痛みは、十本に裂かれた私の体の、そのそれぞれを更に十本に、それをまた十本にと、裂いて行くようだった。それらは、何時しか、大小の波のようになって、狙い澄まして、私の神経を弄ぶようだった。しかし、何処にそんな、裂く事の出来る私の体があるのか。私の体は、十本の紐のまま、十本の刃になって、この丸い闇を裂いていないだろうか。その十本が、引き裂かれるばかりのような、波打つ痛みになるなら、この闇こそ、私の体ではないのか。

三人の、いや三人だけではない、更に別の何人かも含めた者達の声が、痛みの波に弄ばれるだけの私の脇から、薄い煙のように、ぼんやりと湧き上がった。の丸い器に収まった、十本の、紐のような刃のようなものについて、彼らは、その売り買いの相談をしていた。声は、初め、一斉に湧き上がったが、暫くして、段々と途絶え勝ちになり、殆ど一人だけの、ぼそぼそ声になって、已んだ。商談成立か。最後のぼそぼそ声は、もう話が纏まった後の、誰かの、何時ものの悪い癖のぼやきか。

闇が取り払われ、そこに七人の男達が居て、どうやら私は彼らの足元に、仰向けに寝かされているようだ。七人は、同じ方向をじっと見上げていて、私も

そちらに目が向いてしまう。四つ並んだ円い窓が、逆さまに見えた。白髪の頭が、軽く頷いた。ほっそりした影が、その白髪の後ろを、逆さまになって掠めた。一番右の窓に、剥き出しの細い足が、やはり逆さまに浮かんで、直ぐに走り去った。

　七人の男達は去った。何処から？　少なくとも、楕円のドアからではない。十本の銀色が、私の上でグルグル回っていた。痛みだけが消えていた。いや、初めだけだ。それらが私に与えた痛みの記憶が甦って、その記憶ごと、痛みとなった。のたうち回る事も何も出来ない。その痛みが、痛みのまま、横になった私の体に染み渡って来るのを、ただそうさせておくしかない。

　白衣を着た小さな女達が、恐らく男達が出て行ったのと同じ所からだろう、飛び跳ねるような足取りで、入って来た。彼女達は、紐のような刃のような私の銀色の痛みを、空中に向かって、小さな手を拡げて、捕まえに掛かった。私は神経を研ぎ澄ました。そうして、十本の銀色の動きを、完全にコントロール出来た。彼女達の手を擦り抜けさせる事など、何程の事でもない。

　ただ彼女達は、銀色を掴み損ねても少しもめげず、却ってそれを面白がって、益益熱中するのだった。恐ろしい程、疲れ知らずだった。その姿を見て、私の方も、益益神経が研ぎ澄まされた。だから、何も変わらない。

　いや、そうではない。研ぎ澄まされた神経は、私の痛みにも向かうのだった。

すると、彼女達の一挙手一投足が、途轍もない痛みとなって、私に跳ね返って来るのだった。堪らず私は、彼女達に銀色を与えようとした。いや、与えられるものではない。私はコントロールを失っている。いや、彼女達の手から擦り抜けるのなら、幾らでもコントロール出来る。しかしその逆は、元々コントロールの範囲を超えているに違いない。

そうだ。彼女達が、銀色の私の痛みに挑み掛かってくるのは、捕まえたくて、ではない。私の銀色を、益益速く鋭く、グルグル回すためだ。そうして私を、苦しめたいだけだ。すると、私の目にはもう、十本の銀色など、見えていなかった。彼女達の白衣さえ、殆ど目に入らない。そこには、彼女達の、決して止まらない体の動きだけがあって、それらは、私には、まるでコントロール出来る筈もなくて、のたうち回る事も何も出来ない筈の体でさえ、のたうち回ってしまいそうだった。

神経が、研ぎ澄まされ過ぎたのか。何が何だか分からなくなった。ただ、目の前の全てが、混ざり合うようだった。すると、窓の中の白髪の男の顔に目が行った。女達の激しい動きによって、随分と遠ざけられてしまっていた。よくそこまで、目が届いたものだ。しかし、何かが違う。その目は、銀色の輝く点ではない。押せば凹んでまた戻るような、虚ろな普通の目だ。しかも、私の方を見下ろすのでなく、もし彼が机に向かっているなら、その上の書類か何かに、

目を通しているような様子だった。
　女達が、嬉しくて仕方がないような金切り声を、放ちたいだけ放って、散り散りになって、クルクルと何処かに消えた。私は空っぽの部屋の真ん中で、独り、起き上がるしかなかった。もう銀色ではない楕円のドアに近付いて、そのノブに手を掛けるしかなかった。ドアは、少しも捩れも歪みもせず、冷たく静まり返るまま、びくともしない。私が、ノブを強く握って力を込める時だけ、ほんのりと、銀色を浮かばせるようだった。それは、私の銀色が、映るだけかも知れなかった。私は、その上の壁を見た。鏡に映る私の立ち姿の、変化し続ける銀色の階調を、じっと眺めた。古びるに連れて光の衰えて行く電球のように、その輝きは、長い時間を掛けて、くすんで行った。何時消えたかは知らない。取り替え係のあんちゃんが、知ってるだろう。（二〇〇一年五月十九日）

＊　＊　＊

模造品

　石の冷たい壁に額を押し付けて、私は、受話器を耳に擦り付けていた。受話器の奥で、小さなネズミが這いずり回るような音がする。ネズミは二匹に増え

て、いがみ合って、互いの体を囓り出した。
確か、隣の部屋は食堂の筈だった。半分、ドアが開いていて、金物類が袋詰めにされて、ガチャガチャとぶつかり合うような音が聞こえて来る。イチョウの葉っぱのような帽子を被った、長いスカートを穿いた女が、大股で歩き回っているのが見えた。
酒臭い。振り向くと、私の直ぐ後ろに、大男が立っていて、生暖かい息を、私の左の耳に吐き掛けている。大男は、今にも涎を垂らしそうに、口を開け放しで、尖った小さな顎を、振り子のように左右に揺らしている。
「何だ、お前。」
そう言ってから、私は背伸びして、そいつの口の中を覗き込んでやった。上の前歯の裏側に、紫色の痣が見えた。
「そう言うお前こそ何だ。勝手に、人の口の中を見るなよな。」
しかし、そう言い終わって、大男は、益益口を開けた。何で、こんなヤツと係ずらわっていなくちゃならないんだ。私に分かったのは、私が、緑色の受話器を握らされて、突っ立っている事だけだった。私は、何処に電話を掛けていたのだろう。電話を掛けた覚えはない。ネズミもいなくなった。左手の指が、独りでに、番号のボタンを素早く押して行く。電話に出た男は、初め丁重だったのが、急に怒り出して、電話を切った。私は手帳で、番号を確認しようとす

る。しかし、電話機の横の小卓に乗っていたのは、黒くて小さくて薄っぺらな、見た事もない手帳だった。
　それは、手帳ではなかった。表紙だけ革製で、手帳のようでも、中は紙ではない。材質も、よく分からない。
　ドンと音がして、ドアが大きく開いた。その向こうの食堂である筈の部屋は、静まり返っているようだった。私の周りも、静まり返っている。女のものと分かる、尖った靴音だけが、三つか四つ、立て続けに響いた。その直後、金物類を詰めた袋を、激しく揺さぶるようなガチャガチャいう音が、覆い被さるように、私に迫って来て、私は耳を塞ぎたくなった。その前に、その音の出所を知っておきたい。音は、黒いスカートの中から聞こえて来る。スカートは、女が一歩踏み出すたびに、中に空気が入って、ドングリのような形に脹れる。女の空っぽな腹の中に、鑿やら金槌やら釘やら、その他、大工道具が詰まっているようだ。
「私の手帳がなくなったんだけど。」
　と、女は、もう直ぐ目の前まで来ていて、大男に向かって言った。私はうっかり、耳を塞ぐのを忘れていた。その女の声に、私はゲロを吐きそうになった。鋼の刃と刃が、擦れ合って、唸りを上げるような声だった。
「こいつが持ってますよ。」

大男が、私を顎で差して、言った。予め、決められてあって科白に違いないのだ。女は、そこで初めて私の方を見て、妙に澄んだキラキラした目を見開いて、言った。

「そう言う事か。金が掛かるぞ、警察相手に悶着起こしたって、何の得にもならんだろ。」

もう耳を塞ごうとも出来ず、女の声は、私の頭蓋骨の内側を、鋼の刃をカーンカーンと打ち当てて、削り取って行くようで、私は、そのされるに任せるしかなかった。

「分かったか。」

女の声は、一転、ビロードの手触りのように、滑らかになった。それは、私の空っぽの頭蓋骨の、すっかり削られてすべすべの内側に、張り付けられて行く。

金が掛かるって？ 警察が金を強請るのか。しかし、相手が警察では金を渡すしかない。私はポケットから財布を出した。しかし、私は、大男のズボンのポケットに手を突っ込んでいた。黒い革の黴の生えた大きな財布が出て来た。中から札を取り出すと、札に印刷された顔は、見た事もないものだった。幾ら見ても特徴の掴めない、生気のない、在り来たりな、くたびれた顔だった。それも紙ではなく、何か別の材質で出来ていた。

「偽札じゃないか。」
と、女は、左足を半歩踏み出して、私から札を乱暴に取り上げて言った。女の腹の中から、金物類の音がした。ついでに女は、一つ、長いゲップをした。それも、私の目の前で、ガチャガチャと小さく響いた。
「何処で手に入れた。」
「こいつのポケットだ。」私は、大男の方に、顎をしゃくって言った。
「バカ言え、ポケットはお前の服にしか付いてない。」女は、ぴしゃりと言い切った。
大男は、薄笑いを浮かべて、両腕を真っ直ぐ上に伸ばし、身軽に一回転した。男は体中、黒いビニールでぴったり覆われていて、全身の体の線がくっきり出て、ポケットは一つもなかった。思いの外痩せていて、まるでダンサーだった。それに比べて、私は灰色で、よれよれで、上着からズボンから靴の底まで、ポケットだらけだった。
今度は、大男が、私の胸に手を突っ込んできた。私は、受話器で男の顔を殴ろうとしたが、男は素早く避けた。私は、受話器のコードを腕に絡ませて、よろけた。電話機が床に落ちたが、余程柔らかい絨毯が敷いてあるのか、何も音がしない。大男は、私の胸から、札束を鷲掴みにして取り出した。札と札が擦れ合う、カシャカシャいう音が、私の胸で高鳴った。

「お前の胸の中は、金ばっかりだ。金だけで生きてるんだな。」
そう言うと、大男は、私の直ぐ傍らにしゃがみ込んで、その札束を、膝の上に全て乗せて、それを、一枚一枚、皺を伸ばして拡げていった。札に描かれているのは、私の知った顔ばかりだったが、とても札に印刷されるような者達ではなかった。しかも、一枚一枚、全部違う顔だった。最後に拡げられたのは、仕事で何時も行き会う、挨拶しても私をジロジロ眺め回すだけの、モジャモジャ頭の薄気味悪い男の顔だった。
「全部、本物であります。」と、大男は女を見上げて、報告した。
「偽札を使って、騙し取った金だろう。本物だけは、肌身離さず胸の中にしまい込んでいるんだな。」
女は、いかにも得意そうに言った。私は顔を赤らめた。しかし、顔を赤くする理由が何処にあるのだろう。女は、大男の膝の上に綺麗に揃えられた札束を、そっと手に取って、柔らかそうな白い指で二つに折って、自分の胸の中にしまい込んだ。
すると、私が警察で、大男は私の部下だった。私は、大男に目配せした。何喰わぬ顔で歩み去ろうとする女を、大男が、二、三歩で追い付いて、羽交い締めにした。私はただ、それを眺めていれば良かった。また受話器から、ネズミ同士の血みどろの格闘の音が聞こえて来た。受話器に向かって、子守歌を歌う

ような調子で、ネズミの鳴き真似をすると、受話器の中のネズミは、即座に争いをやめて、仲良く声を揃えて鳴いた。二匹は雄と雌で、雌の腹の中には、もう子供がいた。

解決した。優位に立って、急に私は空腹を感じ、女の事は大男に任せ、受話器を床の壁際にそっと置いて、二人を残して食堂に向かった。

ドアを抜けると、何もなかった。何もかも、運び去られたばかりのようだった。床を見ると、綺麗な所と汚い所が入り組んで、汚い所は油がこびり付いていて、調理場の跡らしかった。

一本脚が折れて傾いたソファーに、座高のまちまちな三人が、並んで腰を下ろしていた。

「待っているんですか。」と私は尋ねた。今までの店が廃業して、後に、評判の店が移って来るのを、今からもう並んで待っている者達に、私には見えた。食い物の味など、全くどうでもいい私には、何とも間の抜けたヤツらに見えた。

「別に何も。ここは待つ所じゃないよ。」と、私から一番遠い、座高の一番低いヤツが言った。

「じゃあ、ここは何処？」

「独房だよ。」

「独房って、三人も居るじゃない。」

彼らは互いの顔を見合わせてから、一斉に私の顔を見た。

「見たとこ、多分、四人かな。」今度は私に一番近いヤツが、おどけた調子で言った。私を、数の内に入れようと言うのか。

「だけど、四人じゃなくて、五人なんだよ」と、真ん中のヤツが言った。

私は、あと一人を探した。なるほど、ソファーと反対側の壁に張り付いているのが居た。見覚えのある顔だった。私がその五人目を見付けるのを待っていたかのように、ソファーの三人は一斉に立ち上がり、ゾロゾロと、一つしかないドアから、出て行った。ドアが閉まり、鍵の掛かる音が聞こえた。

「ここは何処かな。」

と、私は、壁に向かって聞いた。そいつは耳を塞いで、ドアと反対側の、部屋の隅に向かって、走りながら倒れ込んで行き、壁の方を向いて蹲った。そうして行く動きはしなやかで。若さを感じさせる。何処か、ナヨナヨしている。男か女か分からない。私は、独り取り残されたようで、何でもいいから、そいつに代わる何かを探さなければ、と思った。

私は、体中のポケットをまさぐった。どれも空っぽだったが、手を見ると、指の間にチョコレートのカケラが挟まっていた。また、ひどく腹が減っているのを感じた。しかし、スキッ腹に、いきなりチョコレートを食べる訳にはいかない。体中が痒くなる。そういう体質なのだ。先ず、胃袋の表面を、油で保護

しなければならない。私は、床にこびり付いた油を舐める事にした。しかし、油はすっかり固まっていて、幾ら唾を掛けて、舌ビラを擦り付けても、溶けてくれなかった。

　そうしている内に、私は、チョコレートをなくしたのに気付いた。私は這い蹲っていて、チョコレートは、掌で潰されて、砕けて溶けて、床に擦り付けられていた。私は慌てて、その床を綺麗に舐めて、唾に溶けたチョコを、残らず胃に流し込んだ。覚悟を決めて、痒くなるのを待ったが、何ともなかった。固まったままと思っていた油が、溶けて先に胃袋に行き渡っていたようだ。

なるほど、何年も独房にいなければ、とてもこんな真似は出来そうにない。

　私は、ここが独房であるのを納得した。

　壁際で耳を塞いでいるヤツが、妙に軽いものに見えてくる。やはりそうだ。あれは、血や肉ではなく、何か別の材質で出来た、人の形の模造品に違いない。近付いて、後ろからそいつの肩を掴んだ。やはり軽く持ち上がる。藁人形でも、もっとずっと重い。チップでも埋まっていて、それで人間の動作をするのだ。

　話し掛けると、耳を塞ぐ。暫くすると、急に立ち上がって、黙って笑い出す。涙を流さずに、黙って泣く。極め付けは、眠る事だ。一切寝息を立てず、寝返りも打たず、微動だにしないで、黙って眠る。その有り様にどうしても見入ってしまう私は、そいつが目を覚ますまで、全く眠れない。そいつがやっと目を

覚ます頃には、私の神経はすっかり高ぶって、とても寝付けそうにない。しかも、そいつは、急に立ち上がって、また黙って笑い出して、黙って泣き出して、それでまた、直に眠ってしまう。私の眠る時間がない。（二〇〇一年五月二十三日）

*　　　*　　　*

そちら

あなたは生きている。そして、あなたが生きているなら、私は生きていない。生きているあなたとでなければ、決して私は生きられない。それでも私が生きているなら、生きられない苦しみを生きるためにだけ、生きている。これだけが、私に関しての、幾ら打ち消そうにも、打ち消しようのない、たった一つの事実だ。必ず、ここに戻って来る。そうと分かっていながら、生きているのはどうしてか。

もし、その事実に、２４時間向き合うしかないなら、決して生きてはいられない。どうやらまだ生きているからには、２４時間の内の幾らかは、その事実から目を逸らしているようだ。しかし、その、事実ではない、嘘の時間も、日

に日に、短く危ういものになっている。

　いや、それではまるで、その嘘の時間が、掛け替えのないものであるような口振りではないか。寧ろ、そんな時間があるために、それを少しも望んでいないのに、私の苦しみは、全く何の意味も目的もなく、引き延ばされてしまっているのだ。それも、ただダラダラと引き延ばされるのではない。少しずつ短く危うくなっては、それが、途切れる度に、改めてまた、ただ一つ切りの事実に、向き直らなければならない。その向き直って、その事実をまた認めるしかない時の苦しみは、回を重ねるごとに、それまでより更に、耐え難いものになる。決して和らぐ方向には向かわない。この前の苦しみが限界で、その後にはもう、何をする力も残っていないと思えたのに、まだそれ以上の苦しみを受け入れる力が、私に残されているのかと、自分でも不思議に思う程だ。何かの間違いではないか。

　しかも、その苦しみは、必ず同じ形で現われる。その全く変わらない事が、苦しみが、ただ深まってしまうばかりである原因かも知れない。先ず脳ミソが、一個のひ弱な肉体のように捩れて、そこに隙間が出来て、その隙間が縄になって、それに縛り上げられるような痛みが来る。縄は、何を狙っているのか。脳の中の、一番芯に狙いを定めていて、そこに向かって、真っ直ぐに食い込んで来て、離れない。最後にその芯から、白いものが滲み出し、それは、恐ろしく

傷付きやすい、人の目では捉えられないような妙な曲線を纏った、真っ白な一枚の大きな花びらのようになって、縄の何十倍もの痛みを、私に齎す。私は、とても、その痛みを私の内に留められず、それは、何処か外に向かってまで、垂れ流されて行く。見るもの聞くもの、いや、たとえ見えても聞こえてもいなくても、この世界にあって、私に感覚し得るあらゆるものが、痛みとなって、私に跳ね返って来る。その捉えられない曲線の白い花びらこそ、私の苦しみの源泉であるのは明らかだ。それを、どのような暈かしも、霞みも、曇りも、仄めかしも取り払われ、そのままに、目の当たりにしなければならない。

　何時か何処かで、その苦しみの折り返し点なり、飽和点なりに、達する事が出来るだろうか。などと、淡い望みを、見上げるかのようにしたところで、私はまた、その次ぎに来る、もっとひどい白い花びらが、その先に用意されているだけの、嘘の時間に、搦め取られたに過ぎない。

　ではまた、暫くはその、嘘の時間の中を、泳ぎ回るとしようか。いや、その口振りにしてからが、まるで自分の意志で泳ぎ回るかのようではないか。つまり、そこからもう、嘘は始まっている訳だ。

　さて、その嘘の中に、何処からともなく、目に見えない、熱くも冷たくもない炎が、流れ込んで来た。炎であるからには、何かを燃やしている筈だ。しかし、その燃やされているものも、目に見えないままだ。いきなり、炎がやって

来たが、その炎が消えないのは、ここに何か燃えるものがまだ残っている証にならないか。炎がやって来て、初めて、そのような何かがあるのが、私に知れた訳だ。

それは、何だろうか。ここがここであるために、どうしてもなくてはならない何かだろうか。だとしたらそれは、あの白い花びらに向けての、逃れようのない、私の感情であるに違いない。そして、それが燃やされるなら、それは、何になるのだろう。或いは、愈愈それは、決して私の手の届かない所へと、運び去られて行くだけか。

見えない炎が、静かに、燃えているばかりだ。ただそれを眺めて、それで、嬉しいとも悲しいとも、楽しいとも辛いとも、思えない。そのような感情の起伏はもう失われて、残るのは、ただ生きているのを感じるためにだけある、決して何処にも動いて行かない感情だけだ。では、それが燃えているのだろうか。それが燃えて、それは何になるのか。いや、何になったところで、それが燃え尽きて、生きているのが感じられなくなれば、それはもう、私とは係わりのないものだろう。忽ち、何処かに、吹き飛ばされるに違いない。

それなら、この炎は、生きて感じられる最後のものだ。それさえ、燃え果てる時、ここはどうなるのだろう。完全な停止だろうか。寧ろ、その逆かも知れない。何も感じられなくなったのに付け込んで、途轍もない反転や喧噪や情熱

や、またそれらの、目にも留まらぬ激しい変化が、立て続けに襲って来て、折角の感情の死を、蹂躙して已まないのではないか。

　尤も、どうであったところで、されるに任せるしかない。何処に立ち戻れる訳でもない。しかし、そう感じるなら、それも、れっきとした感情である筈だ。その感情が炎となって、燃えているのではないか。それとも、それは、その炎から生み出されたものなのだろうか。

　いずれにしろ、その感情が、ただ生きているのを感じるためにだけある感情さえ凌いで、ここを支えているようだ。

　いや、私は、何か勘違いをしていないだろうか。勘違いでなかったとしても、そんな感情など、直に、行方不明になってしまうに決まっている。そうしてまた、ただ炎があって、ただ生きていると感じるだけだ。しかしそれで、そこに腰を据えられる訳ではない。やはりまたその先の、直に行方不明になってしまうような感情へと、引き寄せられてしまう。

　そしてそれを、ただ空白の感情を追い掛けるだけで、虚しいだけだと感じるなら、そこにまた、どのようにか、感情があるのだ。そのようにして、直ぐに失われるだけの何かの感情が、失われてはまた甦るなら、そのような、何とも名付けようはないが、或る一連なりの感情が、見失われる事なく、そこに、微かにでも、根を下ろしている事にならないだろうか。

では、それが、燃えているのだろうか。それは、感じ取る事の出来ない感情であって、だから、その炎も、目に見えないのだろうか。もしそうなら、その感情とその炎は、互いが互いを生み出す関係にあって、ずっとそこにあり続けるのではないか。

しかし、炎はそれで収まるだろうか。そのような、あり続けてしまうものにこそ、炎は向かって行くのではないか。

しかし、一体、目に見えない、熱くも冷たくもない炎とは何だろう。そんなものは、初めからなかったのではないか。ただ、あの白い花びらが、私の頭の中を通り過ぎた後に、それでもそこに残ってしまう何かを、或いはそれは、その痛みに焼く尽くされた燃え滓のようなものだろうか、それを、最後まで綺麗に燃やしてしまいたいと言う、私の願いが、見えない炎になってしまっただけではないか。

それなら、そのありもしない炎そのものこそが、私の最後の感情であるしかないようだ。しかし残念ながら、見えない炎に限らず、ここで何かが最後である事など、実は、何の意味もなく、何の力にもならない。それはただ、私に、私自身が、何の意味もなく、何の力も持たない事を、伝えるだけだ。

あの白い花びらの幻が、ちらつき出した。私はまた、ただそちらへと攫われて行くしかない。（二〇〇一年五月二十五日）

* * *

裸足

　私達は、ちゃちなパイプ椅子に腰掛けて、皆で、窮屈に体を寄せ合っていた。そこは、まるで通路のような細長い部屋の、一方の端の壁際だった。椅子と椅子がぶつかり合って、ガチャガチャとうるさい。皆、大男のようだった。座り心地が悪くてしょうがない。中で、私だけが、そこの、狭いじめじめした壁に背中を押し付けて、独り、他の者達と向き合っていた。

　その彼らの頭越しに、遠く、部屋のもう一方の端の壁にだけ、その高い所に、小さな正方形の窓があって、白く輝いていた。その光は、長い部屋を突っ切って、真っ直ぐ私達の上に達して、そこで真っ白に炸裂していた。そのせいで、私は、何時まで経っても目が慣れず、彼らの姿はどれも、肩を怒らせた暗い影のままで、顔も全く分からなかった。ただ、頭の天辺の髪の毛だけが、白い点になって光った。

　彼らは、ずっと、せわしなく腰を上げ下ろしして、旅先で予定の時間に追われて、短い休息を取っている団体のようでもある。彼らは、一人ずつ順々に、

私の直ぐ前に来て腰を下ろし、私に向かって、哀れっぽい調子で頼み事をするのだった。私は、簡潔に答えていった。慣れてくると、簡潔過ぎて、次の相談者と入れ替わるまでに、間が空いた。

その間が長過ぎて、私は独り先走って、これから予想される頼み事とその答えを、頭の中に次々と並べて行った。それは、幾らでも湧いて出た。

私は、すっかり、それに夢中になった。そして気が付くと、私は、そこの、暗く狭い壁の方を向いて、跪いて、ひたすら独りで喋り続けていた。足元は、床ではなく、踏み固められた地面のようだった。他の者達も皆、私の後ろで、壁に向かって、大声で、それぞれ違う事を、喋り続けているようだった。その沢山の大声が、一斉に壁を跳ね返って、ワンワン響いている中から、取り敢えず私は、私が喋っている内容を聞き分けようとした。どうやら私は、自分しか知らない自分の過去について、次から次ぎに、壁の中にちゃんと話を聞いてくれている誰かが居るかのように、説明しているようだった。しかも、大体が嘘だった。

そして、その嘘っぱちが、私の頼み事が成就するのに一役買うだろうと、自分で勝手に信じ込んで、私はそうしているのだった。しかし、頬が紅潮する程に真剣に、べらべらと、嘘を塗り重ねて喋り立てているのが、情けなくなってきた。

何とか口をつぐみたいが、止まらない。そこで私は、膝の前に置かれた、水が一杯に入ったコップを、何となく手に取った。すごく冷えていて、持っていられない。直ぐそれを、左隣の男に渡した。そうしている間、私は、黙っていられた。暫く水を見詰めていた、彫りの深い顔の隣の男は、口を開いて、一気に喉の奥に水を流し込んだ。そして素早く、コップを私に返した。水は半分残っていた。その間も、私は、黙っていられた。

受け取ったコップを、右隣に渡した。右隣は、残りを飲み干した。それを見届けるまでの間も、私は、黙っていられた。もう一度、左に目を戻すと、その体が、内側からぼんやりと光を放っている。大男の筈が、まだほんの子供で、素っ裸で、細い両腕を胸の前で交叉させ、両手を股の間に挟んで、痩せた背中を丸めて、貧乏揺すりをしていた。右を見ても、同じだった。私を含めた三人だけは、ただ間近の壁を見詰めて、口をつぐんでいた。私はもう、ただ壁を見ているだけで、黙っていられる。

その壁に、私の両脇から放たれた、そのぼんやりした光が、更にぼんやりとなって、左右に映った。壁は黒くテカテカしていた。ただ、私の真正面だけは、何も映らないし、黒光りさえしていない。そこは、ぼんやりした光に挟まれた、狭く小さな全くの闇だった。そこも壁には違いないだろうが、それは、目には見えなかった。

しかしそこは、全くの闇であるだけに、闇では収まらなかった。闇と正反対な真っ白なものが、浮かんでは消え、真っ白なものこそ、闇そのものであるのを、私は思い知らされた。私は、いたたまれなくなって、拳を固く握りしめ、それを両隣の子供の肛門に突っ込んで、両腕を、思い切り突き上げた。

柔らかな子供の体は、私の腕に刺し貫かれながら持ち上がり、私の両腕は全て、子供の体の中に埋まって、子供の肛門は、私の肩の筋肉の盛り上がりで、やっと止まった。そのまま私は、その二つの子供の体を、自分の腕同然に、自由に操りたかった。私の手の指は、子供の脳ミソを、鷲掴みしている筈だった。その指を、開いたり閉じたりすると、子供の口が、歯をカタカタ鳴らして、開いたり閉じたりした。私は満足した。

私は、両腕を、つまりは子供の体を、高く振り上げ、腰に力を込めて、立ち上がった。周りから一斉に、賞賛の声が湧き上がっているようだ。彼らにとって、私は、神の血を引く、古代の英雄か何かだ。

すると、私は、ただ独りで、目を閉じて、ひんやりした壁に、額を押し付けていた。周りは全く静かだった。頭が左右に忙しく振れ出した。額が壁に強く擦り付けられた。唇がブルブルと震えて、その唸る音が、耳に届いた。その唸りの、あっちへ飛んだり、こっちへ跳ねたりするような聞こえ方によって、自分が、確かに独り切りであると、分かるのだった。もしその音が、誰かの耳に

届いていたら、音はもう少し、纏まりのあるものである筈だ。

　両腕は、高く掲げられてはいたが、やはり壁に押し付けられていて、そこから壁のひんやりした感触が伝わって来た。十本の指は、鉤型に強張って、爪で壁を引っ掻いていた。爪の先が壁に食い込んで、何時、爪が剥がれてもおかしくない。

　もちろん私は、幾ら独りとはいえ、そんなバカみたいな恰好で、何時までもいるような事はしなかった。素早く向き直って、その狭い壁を背にして、そこから細長く延びる、部屋全体を見通した。

　相変わらず、正方形の窓が、遠くの向かい側の壁に、ポツンと一つあるだけだったが、眩しいどころか、ただ部屋の向こう半分くらいに光を廻すのが、やっとだった。こちらの半分は、闇に呑まれるままだった。

　前に進もうとすると、脚は全く痺れていて、私は、そこにへたり込むような恰好になった。何年も、ずっとこの壁に張り付いていたのかも知れない。それですっかり、脚が弱っているのか。

　側面の長い壁の、ちょうど闇を抜けて、光に壁の色を晒し始める辺りが、小さな長方形に切り取られた。そこにあるドアが開いた。それまでは、そこは全く壁の色に溶けていて、ドアがあるとは分からなかった。そこから、女の白い小さな顔が覗いた。私の方を見て、私が動けないのが確かめられて、微笑んで

いるようだった。遠いし暗いし、よくは分からない。
　ドアは、ほんの狭く開けられたきりで、女は、その隙間を擦り抜けるようにして、部屋に入り、直ぐにドアを閉めた。ほっそりした体から、幅の広い影が壁に延びて、そのまま闇と繋がった。ドアは直ぐ、壁の色の中に掻き消されて、何処にドアがあったのかも、分からなくなった。女は、私に、そのドアの奥を、ほんの少しも覗かれたくないのだ。しかし、ドアが一杯に開かれたところで、それを殆ど真横から見ている私に、中が覗ける筈などないではないか。女は、どうしても私に覗かれたくないと、ただ態度で示したかったのか。
　女は、振り返る素振りもなく、速くもなく遅くもなく、挑発的に尻を振るでもなく、全く誰にも見られていないような感じで、向こう側の壁に向かって歩いて行った。この部屋に居るのは、全く彼女独り切りであるかのように、その幅の狭い肩の、無防備な後ろ姿を私に晒した。私には、それがいかにも、周到に、わざとそうしているように見えた。
　女は、向かい側の壁まで行き着いて、ほっそりした黒い鉄の梯子を登って、正方形の窓に上体を突っ込んで、這うようにして部屋から出て行った。そうしなければ、体を前に押し出せなかったからだろうが、そこで初めて、女は尻を振って、細い脚をバタバタさせた。女が出てしまうと、窓は、直ぐに、短い音を立てて閉まり、部屋の中は、真っ暗になった。

　すると、私は、直ぐさま立ち上がる事が出来て、残像になってまだ宙に浮いている、白く光る正方形に向かって、走り出していた。

　闇の中を、私の吐く息だけが弾んで、その少しも乱れず、規則的であるのに勇気を得て、私は、何の恐れも抱かずに、思い切り地面を蹴って行った。

　そろそろ、向かい側の壁に行き着くのではないか。そう思えて、歩幅を狭めて、速度を弛める。しかし、壁はやって来ない。まどろっこしくなって、速度を上げる。そしてまた弛める。そんな事を続けていて、何時になったら、壁に行き着くのか。必ず壁はある筈だ。私は走り続けた。部屋が蒸し暑く感じられ、汗ばむのが分かった。

　どうやら、私の体は、内から光を放っているようだ。なぜなら、両側の壁の私の直ぐ脇だけが、ぼんやり照らされているようではないか。よく見ると、左右とも同じに、白く光る私の走る姿が、ぼんやりとそこに映っていた。まるで、横一列に、三人で走っているようだ。

　三本のぼんやりした光の筋が、私達の走った後に、ずっと引かれて行くようだった。その筋を、何処までも、途切れさせずに真っ直ぐなまま、引いて行きたい。そのためには、壁は、まだまだずっと先にあって欲しい。

　いや、どうして私に、後ろに目があるように、その三本の筋が見えるのだろう。そう思うと私は、後ろ向きに走っていた。しかし、どちらに向かって、何

時から後ろ向きなのか。そう言えば、私の体が光っていると気付いた時、体が、くるりと反転したようではなかったか。もしそうなら、私は相変わらず、窓のある側の壁に向かって進んでいる。決して、そのまま後ろ向きに、来た道を戻っている訳ではない。それとも、反転したのは、私の体ではなく、壁だったのか。それを切っ掛けに、私はそのまま後ろに走りだしたのか。

汗がどっと出た。ぼんやりした光の筋が、くっきりしてきて、部屋の中の闇を、冴え冴えと切り裂いて、それを楽しんでいるようだった。しかしそれは、私の前に延びて行くのか、後ろに延びて行くのか。幾ら目を凝らしても、見て取れない。その内に、三本の光の筋は、真ん中に集まって来て、ただ全く闇だけを裂いて、部屋を少しも照らさなくなった。ただ三本の筋と闇だけが、私の前だか後ろだかにあった。

もう、部屋の中ではない。風が冷たい。汗が乾いている。両隣の光る走る姿も、私の光が映っているのではない。自らの内から光を放つ、私の伴走者に違いない。試しに私は、二人に別れの挨拶をしてみた。二人は急に立ち止まって、二人だけで短い言葉を交わした。それは、私の脚をぴたりと止めた。二人は、私に向かって手を振って、私の方を向いたまま、後ろ向きに闇の中に消えた。

私は独り残された。ここはやはり、部屋の中のようだった。

私は周りを見回した。相変わらず、ただ真っ暗だったが、その闇の見て取れ

る所までが、全て部屋のようだった。そうであるなら、部屋は、細長いのではなく、多分円い筈だ。そのずっと遠くの何処かから、壁の土を削って踏み固めた長い階段を、先程の女が降りて来るのだった。闇を見据えると、姿は見えなくても、その女が、私に見せ付けるように、腰を振って、踊るようにしているのが、手に取るように分かった。踏み固められた地面に降り立つと、女の姿は、ナイフで削ぎ取られるようにして消えるが、その降り立った瞬間にだけ、全身を白く光らせて、地面を照らした。地面に染み込んだ光は残って、そこから更に、薄まりながら、円く染み拡がって行く。それは、何度か繰り返された。地面は、少しずつ、白い輝きを増して行く。天井まで白く照らす。やはり部屋は円く、何処までも広い。遠くの女の姿も、階段を降りている時から、白く光って、降り立った瞬間には、燃えるように輝いた。その内に女は、逆さまの階段を降りたりする。地面と天井の区別が付かない。私は、女を見失った。見えているのかも知れないが、その姿は、白の中に紛れたままだった。地面と天井の二面の白は、次第に狭まって、一枚に閉じ合わさるようだった。女の姿はもう、思い浮かびもしない。それとも、その白の全てが、女の姿なのか。部屋は、全く白に溶けた。女は、その白い平面の上を、何時までも、踊るように歩き回った。裸足だった。その足の裏の、柔らかい感触だけが伝わる。

　そうしていれば、女はずっと若いままでいられるのだろうか。私はもう、何

処にも居ない。（二〇〇一年五月二十七日）

＊　　＊　　＊

平行線

目の前にあるものを、眺めているつもりだった。しかし、目の前に、見て取れるものなどない。目が何処に付いているかも、よく分からない。つまりは、何処が目の前か分からない。目の前は、誰かに切り取られたか、自然に流れ去ったかして、もうなくなっているのかも知れない。

私は、白い紙を、ただそれが白いのを頼りに、覗き込んでいた。なぜか、そうする事だけは出来る。そして、もしその白を見失えば、後は何もないに違いない。その白だけは、たとえ私の目が何処でどうなっていようと、私の目の前にあって、他の何もかもが奪われて行く中に、微かに揺れながらも、動かなかった。それでもその白は、決して、それだけで宙に浮いているのではなく、必ず、紙の上に乗っていた。何処までも、紙の手触りがあり、それが白の中に影を落としていて、私の目に入る白は、恐らくは、その影の白さだろう。

その影が、ちゃんと白く見えていると思える時だけ、その影に向かってだけ、

私は書ける。黒いインクは、その影に向けてだけ、ボールペンの先から、流れ出て行ける。影のない白や、白でない所に、幾らボールペンの先を向けても、インクは、初めから、詰まってしまうに決まっている。

　そのようにして、その紙にも、つい先程まで、確かに黒い文字が書き込まれていたではないか。紙の上を、羽根で一掃きするように、一瞬、それが目に触れただけで、私は、その書かれている事を、易々と読み取れていた筈だ。

　それが今、こうして見ても、どう斜めから見ても、透かして見ても、殆ど真っ白なのだ。第一、紙の形や大きさからして分からない。例えば、形だが、摘み上げれば、そこだけキュッと、とんがるかも知れない。両手で、両端をきつく持って掲げれば、四角くなるし、ゆるく持って、ふわりと落ちて行くままに、横たえて行けば、丸くもなりそうだ。投げ出すと、その方向にずっと敷かれて行って、白い床のようでもあって、その上を歩いて行けるかも知れない。大きさはと言うと、どう手に持っても、何処か余るようで、その余った先が、まるで分からない。分からないだけ、まだまだ先に続きそうかと言うと、そうでもなく、手に持った軽さからすれば、その余った先には、紙のように薄っぺらな風が、ただ緩やかに流れているだけのようでもある。実際、見えていそうな部分は、普通に手に取れて、一目で見て取れる程のものだろう。

　そうこうする内に、それが決して真っ白でないと、分かって来る。文字に違

いない。ただ、読み取れそうな文字が、そこに浮かんで来る訳ではない。黒い筈が、白と混じって、汚れた灰色になった、染みのようなものが、白を片隅に追い遣っているだけだ。しかし、一度はそれは、さらりと読めたのだ。それならもう、その染みの様子から、読み取れた事を思い出すだけではないか。

　染みは、大まかに見て、三つある。ブヨブヨと動くからには、血が通っていて、今にも何か言葉を吐きそうなら、そこに書かれたのは、三人の人物ではないか。女、男、女。若い、若くない、若くない。多分そうだ。

　先ず、男。若くない。その若くないのを活かして、ここで大抵の事を仕切っている。男で若くないのは、こいつだけだ。ただそれだけの理由で、仕切っている事になっているが、実はまるでデタラメだ。それでも、あちこち目配せして、何時も誰やらに、女よりも高い、尖った弱々しい声で、指図している。指図されているのは、若い男達だろうが、三人には含まれないので、私からは隠されたままだ。休みなく、かなりな力仕事をさせられているようだ。

　若くない女。こいつは何をしているのだろう。さも悲しげな顔を作って、薄ぼんやりと、ただ何かを見ているだけのようではないか。ぼんやりしていられるのは、そうさせられているからだ。そうでなければ、女は余りに無防備で、疾っくに何処かに、吹っ飛ばされていただろう。手に薄い本か何かを持っている。これも持たされているに違いない。手元に目を落とす事はない。女の目は、

何時も、真っ直ぐ前の、少し先を見ている。
　その見えている先で、時々、若い女が見掛けられる。そこは、その女の通り道で、ただ行き来するだけだ。何かの弾みで、女は、分厚く四角い、湿った大きな木の板の上に乗った。その上で跳ねると、その四方の角にロープが結ばれ、板は、女ごと宙に吊り上げられて行く。その宙に、女は、笑い声を、水飴のように伸び上がらせて、面白がっているようだ。何が面白いのか、と若くない女は思う。若い女は、その板の上に囚われたのだ。もう高過ぎて、飛び降りる事は出来ない。
　若い女は、板の端でロープにしがみついて、下を見下ろした。身を乗り出すと、ロープは呆気なく千切れ、板は傾いて、女はそこから滑り落ちた。その落ちて行く先は、男達の、恐ろしく危険な仕事場で、次々に怪我人が出ては、使い捨てにされて行くような所だ。女などが入り込んだら、ひとたまりもない。女は俯せの恰好で、大の字に落ちて行った。下で、男達が、女を避けようと、物凄い速さで、仕事の後片付けを始めた。間に合うのだろうか。
　間に合うのだ。女がそこに落ちた時には、何も残っていなかった。だから女は、何にブチ当たる事もなく、無傷だ。しかし、女の直ぐ後から、木の板が落ちて来た。男達は、女の体ではなく、木の板が怖かったのだ。木の板は、女を下敷きにする直前に、一枚の白い紙になって、捩れてふわりと風に乗って、ま

だ逃げている途中の男達の上に、被さって行った。男達は、汚れを拭き取られるように、その紙の白さの中に溶けて消えた。
溶けた男達が、その中で一人に纏まって、紙の中で紙を破って、その外に出た。見上げると、若い女は、また別の木の板に乗って、宙に浮いていた。男の体は、若いが、紙のように軽くて薄い。風を捉えれば、幾らでも宙に舞う。女は、風に乗って近付いて来る男に気付いた。
女が男に声を掛けると、それは男の耳に、今の二人の有り様を、女が、ごく当たり前の事として受け入れているように、聞こえるのだった。男がそれに苛立つと、その苛立っただけ、男の体は強張って、風を掴み損ねて、女から離れて行った。それをまた女は、当たり前の事のように、ほんの少しだけ眉を顰めて、見送った。男の姿が小さくなって消えると、女の乗った木の板は、白い紙になって、女の体を、その白の中に溶かして消した。その白い紙も、風に乗って、男と反対の方に、小さくなって消えた。
それを見送ったのは、若くない女だが、足元に目を落とすと、消えた筈の、若い男の体を踏ん付けていた。その体は、風に運ばれて来たには違いなかったが、ずっと地べたを引き摺られて来たようで、砂まみれのボロボロだった。女は、持っている本を男に渡して、男の上から、降りた。
すると、そこは、木の板の上で、あっという間に、宙に引き揚げられた。遠く

で、ロープを引っ張っている、若い男達の姿が見えた。女は、若い女のように声を上げる事はなかったが、笑顔で彼らに手を振った。男達は応えなかった。木の板は、何処かに運ばれようとされていたが、男達のチームワークが今ひとつで、宙をフラフラしている内に、白い紙になって、女を白に溶かし、男達の上に被さって、男達を白に溶かした。

　それらを、横になったまま見送ってから、男は、本を開いた。中の文字が、男の目に触れると、その活字のインクが溶けて、流れ落ちた。男はそれを、左手に持った小さなインク壺に受けていた。本の中は真っ白になって、そこに染み込んでいたインクは、全てそのガラスの壺に収まった。男はそれを透かし見た。空の奥から、白に溶けた者達の白い光が、差し込んでいた。その輝きを見て、男は吐き気を催し、砂混じりの黒いインクを、壺の中に吐いた。

　壺の中が、海の景色のように見えた。しかし、海の水は直に干上がって、獣の大欠伸のような穴が現われて、男は目を背けた。その目を背けた方に、そのまま男の体は、ごろりと転がった。そこは白い紙の上だった。全身が、その紙の白に溶けていったが、口だけは溶けずに、黒いインクを吐き続けた。インクは、紙を黒くドロドロに溶かして、それでも、その黒に染まらない白は、最後には蒸発したようだ。口だけが残ったが、干涸らびて、ボロボロになって、風に飛ばされて消えた。

白い紙は、なくなっていた。替わりに私は、部屋の壁に掛かった、小さな鏡を覗き込んでいた。そこに映る、私の全身と、狭い部屋を、隅々まで見渡したが、白っぽいものさえ見当たらなかった。

鏡の端が綻びていて、そこを摘んで、私は、鏡の表面だけを綺麗に剥ぎ取った。鏡の裏も、鏡の奥も、目を黒く溶かす程に、真っ黒だった。私は、黒く溶け始めた目のままで、外に出た。手に持ったままの鏡の表面が、白い空を映した。それは白いものしか映さなかった。そこに映った白は、地上の全てを溶かし込んでいて、そこは一つの世界に違いなかった。私もまた、そこへ入って行きたい。しかし、どう頑張っても、もう中へは入れて貰えそうにない。多分私独りが、遅れて来たのだ。それを頭の上に掲げ持って、世界中を駆け回っても、その白と私は、何処まで行っても、平行線だった。

元々それは、鏡の表面だ。その端は、恐ろしく鋭利に違いない。しかし、それを刃物に見立てて、喉を切ろうとしても、やはり平行線で、喉は無傷のままだ。

世界が全て、その白の中に収まって、私独りがその外では、私は、死ぬ事も出来ないのか。ヤケになって、私はそれを、がむしゃらに力を込めて、引き裂こうとした。すると、ぱらぱらと、何かが私の足元に落ちた。私の十本の指だった。もちろん私は、気が狂いそうな程、嬉しかった。こんな手近な所に、平

行線の終点があったとは。
　しかし、その白く薄いものもまた、地面に落ちて、そこにぴったり張り付いてしまった。指をなくした私には、それを剥がして取り上げる術はない。その上で、腹這いになろうが、逆立ちしようが、一日中、額を打ち付けていようが、もう二度と、それで私の体を傷付ける事は出来なくなった。そこを離れる訳にもいかず、四つん這いに蹲って、目玉をその表面に擦り付けて、その白を、少しでも体の中に取り入れて、その白が目の中で私の血に溶けて、それが少しずつ、体中に回っているように思い込んでは、気休めにするのだった。
　何時まで、そうしていただろう。私は、私の目がすっかり白く染まったのを、その目で見て取った。私は遂に、私を拒む白から、白を取り出せたのだ。そうに違いない。しかし、その白は余りに重い。とても私の歪んだ背骨で、支え切れるものではない。二つの目玉を、地面に擦り付けて歩いた。いや、それは一体どんな恰好なのか。脚は何処を向いているのか。脚は、真上を向いていた。私は、二つの目玉を切っ先にして、逆さまに、ナイフのように地面に突き刺さっていないだろうか。それとも、地面が丸ごとすっかり逆さまで、目玉だけがその地面にくっついて、そこにぶら下がっている私の全体重を、引き受けていないだろうか。ただどちらにしろ、それで私の目に、何が映るのか。いや、白はそれ以上、何も映さない。それなら別に、地面に埋もれていても、空

を見上げていても、同じ事だ。
さて、この先私に何があるのか。（二〇〇一年五月二十九日）

個人的、その他

著者　u_

© 2001 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published